北塚遺跡群

1985

石川県立埋蔵文化財センター

北　塚　遺　跡　群

石川県立埋蔵文化財センター

序

金沢市西郊の石川県西部緑地公園は県下最大の緑地帯として多くの県民に憩の場を与えている。

いま北塚遺跡群として報告する北塚Ａ遺跡，同Ｂ遺跡はこの公園の整備に先立って発掘調査を行なったものである。

北塚Ａ遺跡は明治33年の耕地整理による縄文土器の発見を契機として，大正時代の上田三平の調査，昭和（とくに戦後）に入ってからの安村律義・沼田啓太郎両氏をはじめとする石川考古学研究会会員による精力的な調査・研究によってその存在が世に知られるようになった。現在は国の重要遺跡として縄文時代中・後期の研究には欠かせない遺跡となっている。今次の調査は130㎡と対象面積は少なかったが，土壙２基，溝19条を検出し，縄文時代から中世にいたるまでの遺物も出土した。

北塚Ｂ遺跡では古墳５基，土壙11基，溝14条を検出し，古墳時代から中世にわたる複合遺跡であることが判明した。このなかで注目すべきは５基の古墳で，墳丘が現存するおまる塚古墳や宇佐神社古墳，びわ塚古墳などとあわせると，かつてこの地に金沢平野における一大古墳群が存在したことが判明したのである。５世紀から６世紀にかけての犀川水系の支配者層の奥津城と見られる。遺跡はその上をアスファルトで覆われるが，現状を損うことなく保存されるのは幸いである。

最後になったが，本遺跡群をよく保存してこられた二塚地区の皆さん，そして，精力的な研究によってその価値をゆるぎないものに高められた石川考古学研究会の努力に敬意を表し，今次の調査にあたってご協力いただいたすべての方々に深甚の謝意を表したい。

昭和60年３月

石川県立埋蔵文化財センター
所長　濱岡賢太郎

北 塚 遺 跡 群

目 次

頁
序 …… i
例 言 …… ix

序 説
第1章 調査の契機と経過 …… 1
第1節 契機と分布調査・発掘調査の概要 …… 1
第2節 調査の経過 …… 4
第2章 位置と環境 …… 6
第1節 北塚遺跡群の位置と地理的環境 …… 6
第2節 考古学的環境 …… 8
第3章 既往の調査と研究 …… 13
第1節 あらまし …… 13
第2節 戦前の調査と研究 …… 15
第3節 戦後の調査と研究 …… 16
第4節 第6次調査（北塚B遺跡第1次調査：昭和48年）の概要 …… 20

第1編 北塚B遺跡
第1章 調査の概要 …… 27
第1節 調査の位置 …… 27
第2節 遺構の配置と概要 …… 28
第2章 遺構と遺物 …… 31
第1節 古 墳 …… 31
第2節 土 壙 …… 49
第3節 溝状遺構 …… 57
第4節 包含層およびピット出土遺物 …… 62
第3章 まとめ―古墳群を中心にして― …… 65

第2編 北塚A遺跡
第1章 調査の概要 …… 71
第2章 遺構と遺物 …… 72
第1節 概 要 …… 72
第2節 遺構・遺物 …… 72
第3章 まとめ―今後の課題― …… 80

英文要旨 …… 83

図　版　目　次

本文対照頁

図版第 一　北塚遺跡群　北塚遺跡群（○印）と周辺地域 …… 10

図版第 二　北塚Ｂ遺跡　空中写真 …… 28～30

図版第 三　北塚Ｂ遺跡　遺構

(1) 第５号墳遠景（北から）　(2) 第５号墳近景（東から） …… 33・34

図版第 四　北塚Ｂ遺跡　遺構

(1) 第４号墳近景（東から）　(2) 第４号墳周溝（北側） …… 31・32

図版第 五　北塚Ｂ遺跡　遺構

(1) 第６号墳近景（北から）　(2) 第６号墳完掘状態（東から） …… 35・36

図版第 六　北塚Ｂ遺跡　遺構

(1) 第６号墳遠景（北から）　(2) 第６号墳西側周溝（南から） …… 35・36

(3) 第６号墳と第７号墳の切り合い（北から） …… 35・39

図版第 七　北塚Ｂ遺跡　遺構

(1) 第７号墳近景（北から）　(2) 第７号墳北側周溝（西から） …… 39・40

図版第 八　北塚Ｂ遺跡　遺構

(1) 第７号墳周溝西側土器出土状況（西から） …… 39～41

(2) 第７号墳須恵器装飾付台付壺出土状況（北から） …… 39～41

図版第 九　北塚Ｂ遺跡　遺構

(1) 第２号土壙 …… 49

(2) 第４号土壙 …… 51・52

図版第一〇　北塚Ｂ遺跡　遺構

(1) 第５号土壙 …… 52

(2) 第11号土壙 …… 56

図版第一一　北塚Ｂ遺跡　遺構

(1) 南北に走る近世・近代溝（北から） …… 57

(2) 第５号溝（西から） …… 57

(3) 第７号溝（東から） …… 61

図版第一二　北塚Ｂ遺跡　遺構

(1) 第10号溝（中央の直進する溝・北から） …… 62

(2) 第10号溝土層断面（北から） …… 61

図版第一三　北塚Ｂ遺跡　遺物

(1) 第５号墳周溝出土土器 …… 33

(2) 第４号・第６号墳周溝出土土器（上段が第６号墳） …… 35

図版第一四　北塚Ｂ遺跡　遺物

第７号墳出土須恵器 …… 39・41～45

本文対照頁

図版第一五　北塚Ｂ遺跡　遺物
(1)　第２号土壙出土土師器……49・50
(2)　第３号土壙出土弥生土器……51
図版第一六　北塚Ｂ遺跡　遺物
(1)　第２号土壙出土土師器坏……49・50
(2)　第５号土壙出土土師質土器小皿……52・53
(3)　第５号土壙出土土師質土器・青磁（下段右）……52・53
図版第一七　北塚Ｂ遺跡　遺物
(1)　第５号溝出土土師器　(2)　第５号溝出土土師器・白磁（下段右）　59～61
図版第一八　北塚Ｂ遺跡　遺物
(1)　溝・土壙・包含層出土遺物……61・62
図版第一九　北塚Ａ遺跡　調査区
トレンチ全景……71
図版第二〇　北塚Ａ遺跡　遺構
(1)　第２号溝　(2)　第３号溝……72
図版第二一　北塚Ａ遺跡　遺構
(1)　第４号・第５号溝……72
(2)　第６号・第７号溝……75
図版第二二　北塚Ａ遺跡　遺構・遺物
(1)　第16号・第17号溝……78
(2)　石器……72・77
図版第二三　北塚Ａ遺跡　遺物
(1)　縄文土器……76・77・79
(2)　弥生土器・土師器・須恵器・珠洲焼……75・76・79
図版第二四　周辺の古墳
(1)　おまる塚古墳（北西から）　(2)　おまる塚古墳（南東から）……65・66
図版第二五　周辺の古墳
(1)　宇佐神社古墳（南東から）……69
(2)　びわ塚古墳（南から）……65
図版第二六　北塚Ｂ遺跡　第一次調査
(1)　第１号墳（北西から）……21
(2)　第２号墳（北西から）……21
図版第二七　北塚Ｂ遺跡　第一次調査
(1)　第３号墳（西から）……21
(2)　第１号溝（北西から）……21・22

挿　図　目　次

頁
第1図　北塚遺跡群関連の分布調査箇所（S＝1/7,500）…… 2
第2図　北塚遺跡群の発掘調査箇所（S＝1/5,000）…… 3
第3図　北塚町の位置 …… 6
第4図　北塚遺跡群周辺の地形（S＝1/20,000）…… 7
第5図　周辺の遺跡（S＝1/50,000）…… 10
第6図　石川郡二塚村字北笹塚地図（十葉の内一葉・『金沢市おまる塚古墳』より転載）…… 14
第7図　『石川縣史蹟名勝調査報告』第壹輯・第二輯・第三輯 …… 15
第8図　北塚A遺跡出土の有孔鍔付土器（石川県立郷土資料館蔵）…… 17
第9図　北より北塚A遺跡・おまる塚古墳を望む …… 19
第10図　北塚B遺跡（第1次調査）第1号溝出土土器（S＝1/3）…… 22
第11図　北塚B遺跡（第1次調査）第1号墳～第3号墳実測図（S＝1/80）…… 23
第12図　北塚B遺跡調査区の位置（S＝1/300）…… 27
第13図　調査区区割図（S＝1/400）…… 28
第14図　昭和58年度調査区遺構実測図（S＝1/150）…… 29
第15図　第4号墳実測図（S＝1/80）…… 32
第16図　第5号墳実測図（S＝1/80）…… 34
第17図　第6号墳実測図（S＝1/80）…… 36
第18図　第4号・第5号・第6号墳出土土器（S＝1/3）…… 37
第19図　第6号墳出土土器（S＝1/3）…… 38
第20図　第7号墳実測図（S＝1/120）…… 40
第21図　第7号墳周溝西側土器出土状況（S＝1/40）…… 41
第22図　第7号墳周溝覆土下層出土土器（S＝1/3）…… 43
第23図　第7号墳周溝覆土出土土器（S＝1/3）…… 45
第24図　第8号墳実測図（S＝1/40）…… 46
第25図　古墳配置図（S＝1/150）…… 47
第26図　第1号土壙実測図（S＝1/20）…… 49
第27図　第2号土壙実測図（S＝1/40）…… 49
第28図　第2号土壙出土土器（S＝1/3）…… 50
第29図　第3号土壙実測図（S＝1/60）…… 50
第30図　第3号・第4号土壙出土土器（S＝1/3）…… 51
第31図　第4号土壙実測図（S＝1/40）…… 52
第32図　第5号土壙実測図（S＝1/40）…… 52
第33図　第5号土壙出土土器（S＝1/3）…… 53

頁
第34図　第６号土壙出土土器（S＝1/3）…… 53
第35図　第６号土壙実測図（S＝1/40）…… 54
第36図　第７号土壙～第11号土壙実測図（S＝1/40）…… 55
第37図　近世・近代溝断面図（S＝1/60）…… 57
第38図　近世・近代溝平面図（S＝1/300）と出土遺物（S＝1/3）…… 58
第39図　第５号溝土器出土状況 …… 59
第40図　溝状遺構出土土器（S＝1/3）…… 60
第41図　第10号溝土層断面図（S＝1/20）…… 61
第42図　包含層およびピット出土遺物（S＝1/3）…… 62
第43図　おまる塚古墳測量図（S＝約1/250）…… 66
第44図　北塚古墳群分布図（S＝1/2,500）…… 68
第46図　北塚Ａ遺跡発掘調査区位置図（S＝1/200）…… 71
第47図　遺構配置図（S＝1/80）…… 73
第48図　出土遺物実測図（S＝1/3）…… 77

表　目　次

頁
第１表　周辺の遺跡名とその時代 …… 11
第２表　発掘調査一覧 …… 20
第３表　北塚古墳群墳形規模等一覧表 …… 67

例　　言

1　本書は，昭和58年度と同59年度に実施した西部緑地公園整備事業に伴う北塚（きたづか）A・B遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は石川県土木部公園緑地課の依頼により石川県立埋蔵文化財センターが実施し，費用は同課が負担した。

3　北塚町地内には，北塚A・B・C遺跡と北塚古墳群があり，本書ではそれらを総称して北塚遺跡群とした。なお，縄文土器における「北塚式土器」の標式遺跡は，その北塚A遺跡を指すものである。本来は北塚遺跡として従来からの呼称を継承すべきであると考えるが，本書では県教育委員会発行の遺跡地図に順ずることとした。

4　出土品の説明にあたり，月影式土器の範疇として捉え得る土器については弥生土器として紹介した。

5　本書中における註や参考文献は，それぞれの章末に掲げた。

6　本書中で指示した方位はすべて磁北であり，断面図の数値は絶対高である。

7　発掘調査および出土品整理にあたり御協力を頂いた方々については，序説第1章第2節にその氏名を掲載した。

8　写真図版，挿図，表には本書全体での通し番号を付してある。

9　写真図版の遺物に付した番号は挿図の番号に一致する。

10　本書の執筆分担は，次のとおりである。

序説第1章，同第3章第4節 …… 三浦純夫
序説第2章，第1編第1章，同第2章第1節4・5，第2節～第4節，同第3章 … 戸淵幹夫
序説第3章第1節～第3節 …… 芝田　悟
第1編第2章第1節1～3，同節4の一部（上層出土土器） …… 栃木英道
第2編 …… 垣田修児

11　英文要旨については，垣田生知（金沢工業大学講師），道井瑞枝（石川県立金沢女子高等学校講師）の両氏をわずらわせた。

12　写真撮影は，遺構・遺物とも戸淵・垣田が担当した。（ただし，図版第一・第二・第二六・第二七を除く）

13　本書の作成にかかる遺物整理作業の運営は戸淵が統括した。編集は，執筆者各員の助力を得て戸淵と三浦が担当した。

14　北塚A・B遺跡の発掘調査によって得られた資料は，石川県立埋蔵文化財センターが保管している。貸出しを行なっているので利用されたい。

序　　説

第１章　調査の契機と経過

第１節　契機と分布調査・発掘調査の概要

1　はじめに

金沢市の郊外は，近年のスプロール現象によって大きく変容をとげている。北塚遺跡群の位置する金沢市北塚町，袋畠町周辺もその例にもれない。とくに昭和40年代に入って国道８号線金沢バイパス，北陸高速自動車道，都市計画道路専光寺野田線などの大規模道路の建設，そして県内最大の緑地帯とすべく昭和44年に着工した西部緑地公園によって，もと二塚村と呼ばれた本遺跡群周辺は地貌を変えてきたのである。発掘調査にいたるまでに数度の分布調査を経ている。以下これらの経過を追いながら調査の流れをたどってみたい。

2　北塚Ｂ遺跡の調査

本遺跡の発掘調査までに２度の分布調査を実施している。

分布調査　①　（第１図）

昭和56年７月14日から同７月21日の間実施した。金沢市北塚町・袋畠町地内である。陸上競技場建設予定地と公園整備予定地内の合わせて90,000㎡を調査した。この結果，公園整備予定地内の約 1,000㎡について北塚Ｂ遺跡の広がりを確認した。また十人川寄りで急激な地形の落ち込みを認め，ここが地形の大きな変換点であると判定された。

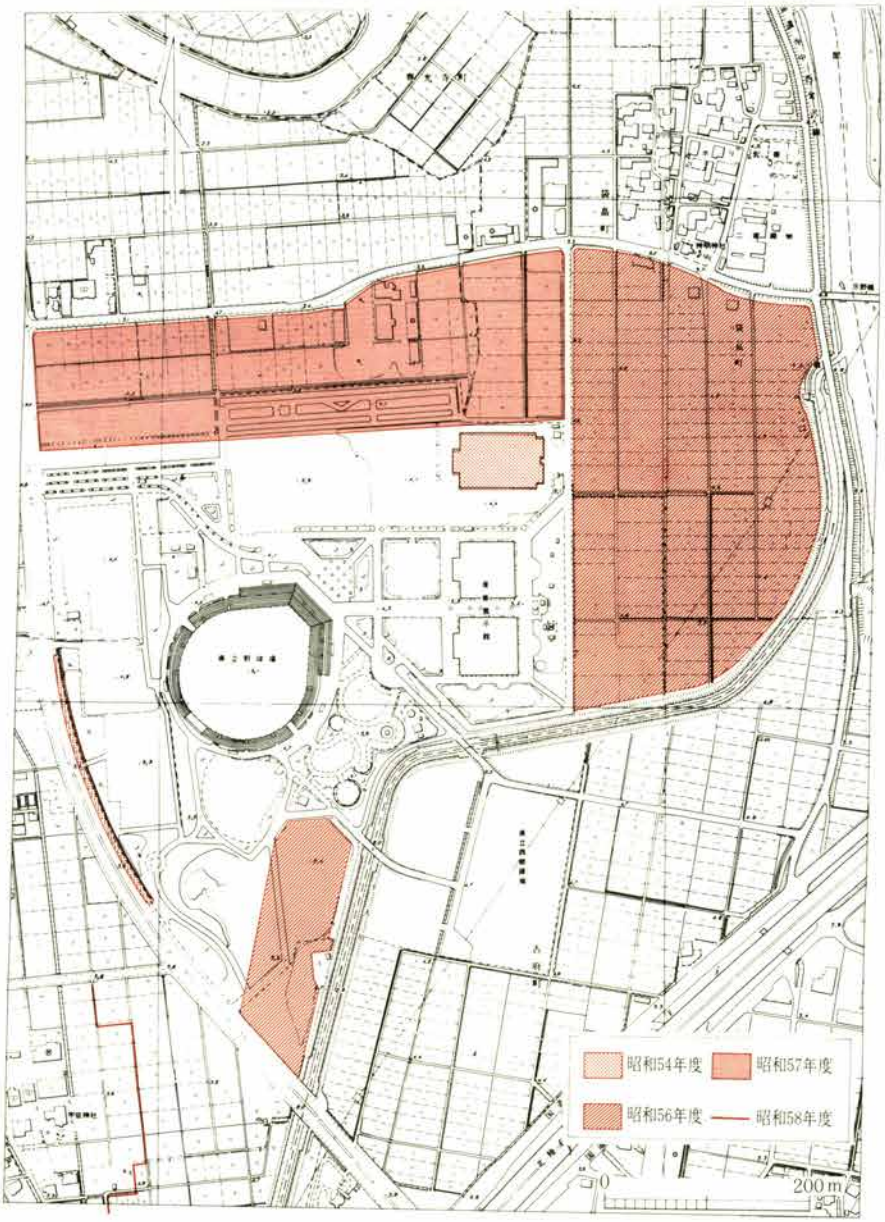
分布調査　②　（第１図）

昭和57年４月16日から同４月19日まで実施した。金沢市袋畠町・稚日野（わかひの）町地内である。テニスコート，駐車場，補助陸上競技場建設予定地の55,000㎡を対象とした。約１ｍの盛土の下に客土層，細砂層があり遺跡の存在は確認できなかった。

以上２回にわたる分布調査の結果を公園緑地課に回答して事業との調整をはかった。その結果公園造成箇所のうち 1,000㎡がアスファルト舗装されるため，事前に発掘調査が必要となった。

発掘調査

前述の 1,000㎡を対象として行なった。調査では地元北塚町に作業員の要請をしたが，参加者はおられず，金沢市田中町・高柳町の有志に参加していただいた。調査区域のうち公園の南側出入口となっている鉄製門扉の基礎部分は，門の倒壊のおそれがあるので発掘区域より除外してほしいとの申し入れがあったので，対象としなかった。調査日数は延33日間である。結果の詳細は第１編で述べられているが，墳丘の失なわれた古墳が６基検出され，北塚古墳群の復元に大きく寄与する資料が得られた。


昭和54年度
昭和57年度
昭和56年度
昭和58年度
0
200m

第2図　北塚遺跡群の発掘調査箇所

3　北塚Ａ遺跡の調査

分布調査　（第１図）

西部緑地公園の利用者増加，とくに昭和60年８月の全国高等学校総合体育大会（インターハイ）同66年の国民体育大会に備えた駐車場の造成に先立って実施した。試掘坑18ヶ所，トレンチ６本により本遺跡とおまる塚古墳周辺を調べた。この結果，北塚Ａ遺跡はおまる塚古墳の北に接した地点まで広がることが確認され，それより南側は急激に落ち込むことが判明した。また，おまる塚古墳周辺部については，周溝想定線をも含めた墳丘の景観を保護するため，南側は約20m，東側は約８m当初の計画を墳丘裾部より遠ざけることを公園緑地課に申し入れ，合意に達した。

発掘調査

駐車場のフェンスの基礎により損壊をうける箇所を対象とした。面積は 130㎡。検出した遺構には土壙，溝などがあるが，縄文時代の遺物は少なく，やや遺跡の中心を離れた箇所であると推定される。調査にあたっては金沢市田中町・高柳町の協力をえた。調査日数は延17日間である。

第２節　調査の経過

1　北塚Ｂ遺跡の調査（調査日誌から）

昭和58年10月３日より開始した。仮設事務所を建設したあと杭打ち作業を行なう。10月６日に器材を搬入し，翌７日より発掘を開始する。幸い秋の好天にめぐまれ調査は順調にすすむ。10月17日までに包含層の調査を終了する。10月中旬より遺構の検出作業を開始し，古墳のものと思われる周溝が次々と検出される。第６次調査で明らかになった北塚古墳群第１・２号墳の近接地でもあり，古墳である可能性が高くなってくる。10月下旬より一部写真撮影を行なう。10月31日には北塚Ａ遺跡の駐車場建設予定箇所の分布調査を実施する。11月上旬より溝状遺構の掘り下げを一部行ないながら実測を中心に作業を進める。11月中旬より遺構の清掃・写真撮影を行なう。11月19日には現地の実務的作業を終了する。11月29日より埋め戻しを行ない翌30日には器材を埋蔵文化財センターへ撤収して現地調査をすべて終了する。

2　北塚Ａ遺跡の調査（調査日誌から）

昭和59年５月24日より開始。同26日に耕土の除去を行ない同28日より作業員が入り，調査を開始する。調査区の呼称を第１～第４トレンチとする。調査面積がせまいため６月６日で各トレンチの遺構発掘を終了する。実測作業は６月５日より開始し同９日で終了する。作業員による発掘は６月７日で終了。６月12日に器材の撤収，同14日に埋め戻しを行ない現地調査をすべて終了すする。

3　整理作業

北塚Ｂ遺跡の整理は昭和58年度より開始した。同年度内に遺物の記名・復元作業と一部の実測作業を実施した。昭和59年度では石川県埋蔵文化財協会に遺物の復元，実測図の作成，浄書および遺構図の浄書を委託した。

北塚Ａ遺跡は昭和59年度に遺物実測図の作成，遺構図の浄書を委託した。

4　調査関係者

（肩書は当時）

北塚Ｂ遺跡

分布調査①　米沢義光（主事）　芝田　悟（技師）
山川正一（宇ノ気町教育委員会嘱託・埋蔵文化財センター長期研修生）

分布調査②　垣内光次郎（主事）　藤田邦雄（臨時任用講師）
田中孝典（石川考古学研究会会員）　広多清一（関西学院大学学生）

発掘調査　戸淵幹夫　三浦純夫（以上主事）　芝田　悟（技師）
栃木英道　中島雄二　山津康義（以上金沢大学学生）　北野スイ　坂田あや子
坂井かず子　中栄みゆき　西川愛子　宮田ハル　村田清子（以上田中町）
北村芳子　高崎春子　高崎道子　高村正雄　高村松子　高村　緑　高柳美代子
竹山くに子（以上高柳町）　最里健太郎（疋田町）

北塚Ａ遺跡

分布調査　戸淵幹夫　栃木英道

発掘調査　垣田修児（主事）　芝田　悟（技師）
杉野洋一郎（石川考古学研究会会員）坂井かず子（田中町）北村芳子　高崎春子
高崎道子　高村正雄　高村松子　高村　緑　高柳美代子　竹山くに子
（以上高柳町）

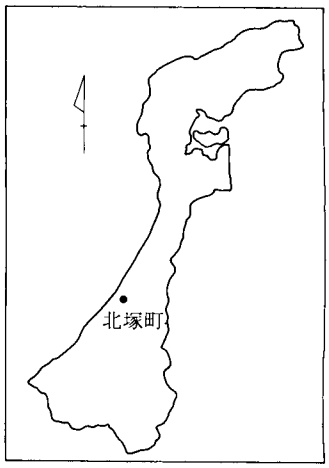
遺物整理

戸淵幹夫　垣田修児　杉野洋一郎　田中孝典　栃木英道　山津康義　本田秀生
石川県埋蔵文化財協会（川端敦子　黒田和子）

第2章　位置と環境

第1節　北塚遺跡群の位置と地理的環境（第3・4図，図版第一）

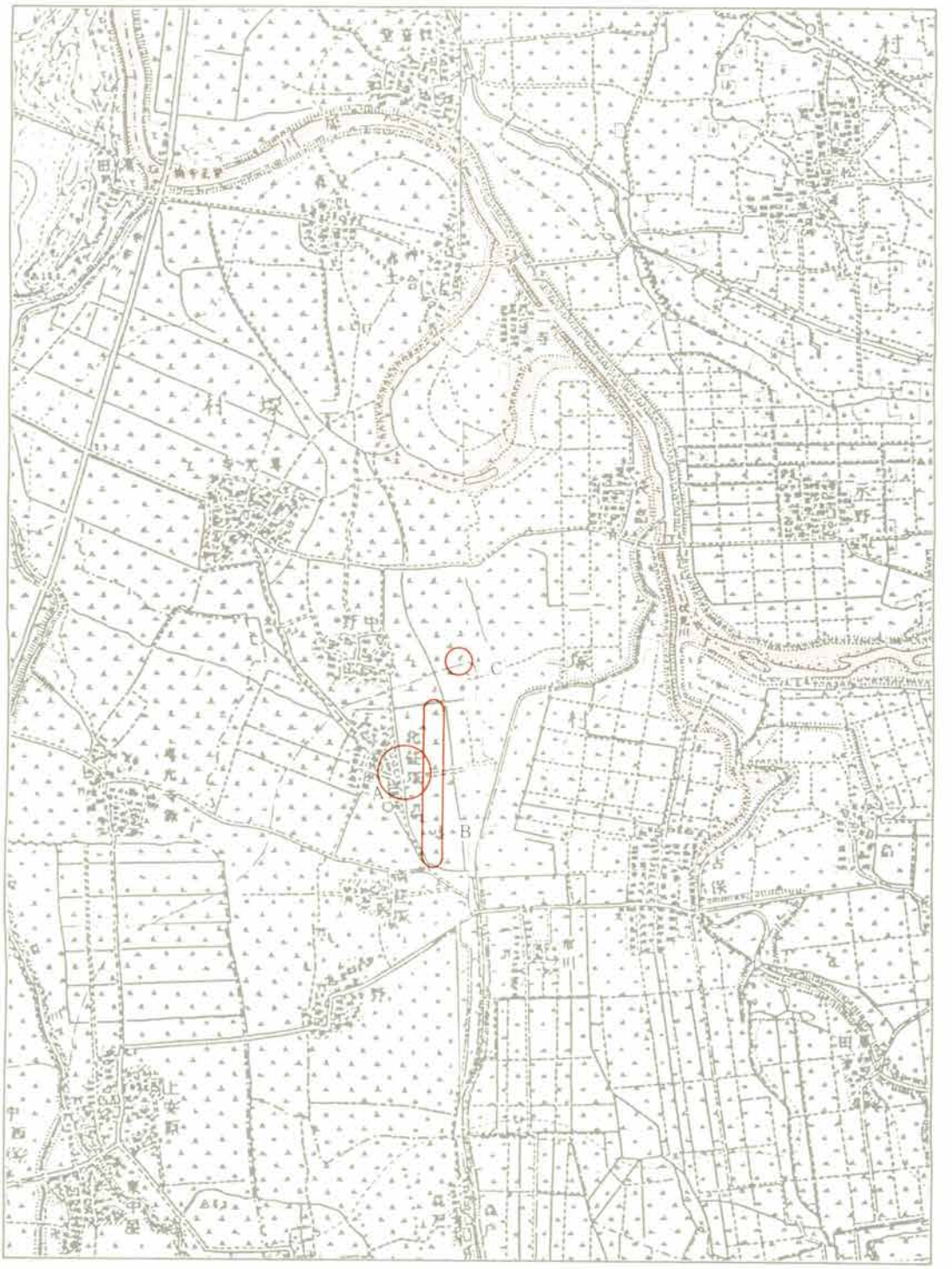
北塚遺跡群は，金沢市の西部地域にあたる北塚町に所在する。金沢市街の中心部から県道専光寺野田線を西へ約5km行き，国道8号線との松島交差点からさらに西へ約 400m を測る地点に位置する。遺跡群の東には十人川（赤目川）が流れ，国道8号線と北陸自動車道が並行し，金沢西インターへも東約 500m の至近距離にある。北には，県立野球場と産業展示館が存在する。遺跡群のなかには，先の県道専光寺野田線が縦断しており，それを挟んで南の北塚集落よりの水田地帯にはA遺跡が，その反対側の緑地公園内にB遺跡，公園内でも最も北にあたる野球場付近にはC遺跡があり，これらは半径約 300m 圏内にあって隣接している。



第3図　北塚町の位置

さて，本遺跡群は標高約5mを測る低平な北部金沢平野に占地する。北部金沢平野は，白山山脈の北縁につらなる大門山系を源とする犀川と，かつては現在より北方を流れていた手取川との沖積作用によって形成された複合平野である。遺跡周辺は，その犀川扇状地と手取扇状地の縫合部に接するところにあり，東にはその変換線ともいうべき犀川と伏見川が北流している。巨視的にみれば，本遺跡群は手取扇状地（曲率半径12km，扇形の開角度100度）の北東縁部にあたり，地勢も南東から北西方向へとゆるやかに傾斜をみせている。また，伏流水の自噴も認められるところである。遺跡群のすぐ東を流れる十人川は，手取川の旧河道の分流にあたる旧三十刈川の末流にあたるものであり，北東約1kmの地点で犀川，伏見川と合流している。ところで，耕地整理以前の北塚地内には〝フルカワ〟と呼ばれる伏見川ないし手取川の旧河道にあたる低湿地が存在した。その〝フルカワ〟については，「古府町と松島町の間を経て十人川を越え，北塚町，稚日野町の東を犀川よりに走って袋畠町において犀川に達した」[(1)]といわれている。北塚付近では，落ち込みの段差も浅くなっていたようではあるが，本遺跡群の立地する微地形を理解するうえで見逃せない存在である。すなわち，一見低平にみえる地形も，実際は微高地や微低地が複雑に入りくんでおり，本遺跡群は旧河道の氾濫などによって形成された微高地上に立地していることが周辺の分布調査からも判っている。こうした新旧諸河川の存在は，本地域が洪水と宿命的ともいえる歴史を有しているのであり，東に流れる犀川の現河道は，藩政末期の嘉永元年（1848）に二ツ寺古川を流れていたものを改修したものである。しかし，それらの河川は田舟による物資輸送路として利用度が高く，現在の北塚町の共同墓地付近がかつての荷揚場であった。

西方の地形についてみると，約 3.5kmで日本海に至り，古墳時代初頭期に形成されたと考えら



第4図　北塚遺跡群周辺の地形　0　1,000m

れている安原砂丘が存在する。その型は平列砂丘に属するといわれている。

第2節　考古学的環境（第5図，第1表）

本遺跡群周辺にみる最古の歴史は，現在のところ西約3kmにある安原砂丘下にある下安原海岸遺跡である。泥炭層下部の青色粘土層より縄文前期末に比定される福浦上層式の土器片が出土している。(2) 南東約 1.5kmの至近距離にある古府遺跡は，北陸縄文土器の中期中葉に位置付けられる古府式土器の標式遺跡として著名である。県下の中期縄文遺跡では，北塚A遺跡とともに平地に立地するという点で類例の少ない遺跡であり，この両者には，古府遺跡の衰退にともなって北塚A遺跡の集落形成が始まるという関係が窺える。(3) 北塚A遺跡が廃絶する後期前葉をすぎると，周辺地域での集落形成は一時途絶えるが，後期も後葉に入ると手取扇状地北扇部を中心にして大集落が鼎立するようになる。南約 1.5kmにある新保チカモリ遺跡は，晩期初頭に位置付けられる八日市新保式の標式遺跡であり，先年巨大木柱遺構が検出されて全国的にも話題となった。また，南西約2kmには中屋式の中屋遺跡があり，南 2.5kmには県下最大級の縄文集落跡として名高い御経塚遺跡が存在する。こうした大集落が形成された背景には，自噴地帯で湧水に恵まれたことや，微高地が樹木が繁茂する原野として恰好の食料資源を提供したからだと考えられている。(4) 一方，犀川以北の沖積地では周知されている縄文遺跡は比較的少ないが，北東約2kmにある晩期中屋式の松村A遺跡では地表下約1mに包含層の存在が確認されており，(5) 木曳川などの氾濫によって堆積した厚い粘土層下にはより多くの縄文遺跡の存在が予想される。

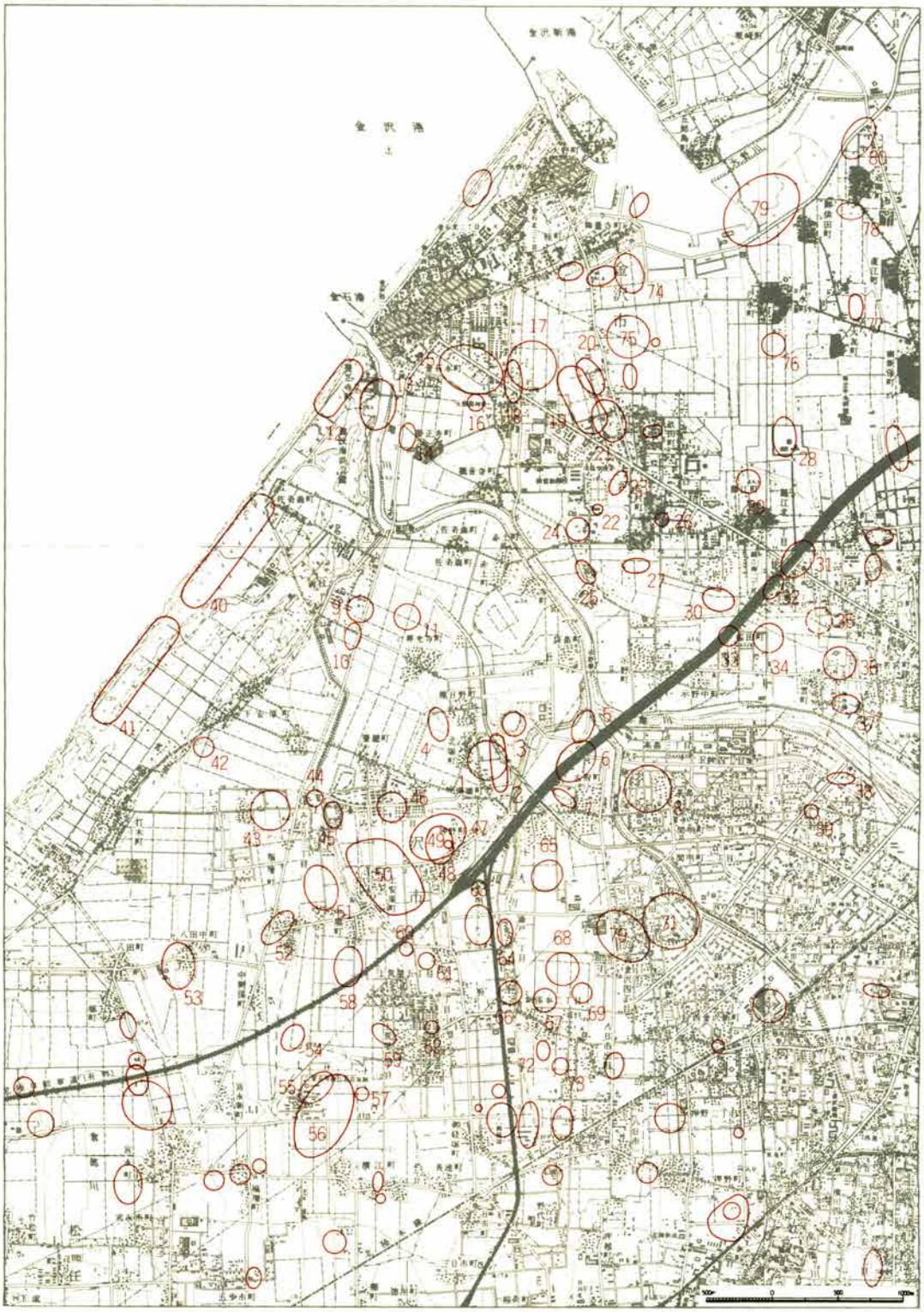
弥生時代の遺跡では，本遺跡群の南西約2kmの安原川流域を中心にして，上安原陸橋遺跡，上安原緑団地遺跡，緑団地下水処理場遺跡などの中期に遡る遺跡が知られている。また，先述の下安原海岸遺跡でも泥炭層中に小松式の土器と溝状遺構などが検出されている。周辺地域において弥生中期遺跡の最も顕著な分布は，湿潤な低地が広がる犀川以北の標高2m前後を測る沖積地である。なかでも，北約3kmにある寺中（じちゅう）遺跡は，柴山出村式期から小松期にかけての中期前半の母村的集落跡と考えられ，過去の調査では 250基にも及ぶ土壙墓群が検出されている。(6) この他，北東約4kmには畿内第Ⅳ様式併行の標式遺跡として知られる戸水B遺跡がある。北東約3kmにある西念南新保遺跡は，中期から後期に営まれた集落跡であり，後期前半に比定される竪穴住居跡や土壙が検出されている。(7) 南西約3kmにある横江A遺跡では，後期中頃に比定される方形周溝状遺構が検出されており，金沢平野における最古の事例として注目される。(8) 終末期になると遺跡数は爆発的ともいえる増加現象がみられ，沖積低地だけでなく扇央部や谷間にも分布するようになる。下安原海岸遺跡は，海岸砂丘の後背地を生産基盤とした月影式期の集落跡であり，粟崎（あわがさき）遺跡や大根布（おおねぶ）遺跡のように銅鏃を出土する砂丘遺跡としても注目される。(9) 近年，北東約 3.5kmにある無量寺B遺跡からも銅鏃が出土しており，(10) 海岸線沿いに分布する傾向が注視される。この他に終末期を代表する遺跡には，先述の桂遺跡や寺中遺跡をはじめ，北東約3kmには大溝や円形周溝墓が検出されている南新保D遺跡や南新保三枚田遺跡がある。また，南約 2.5kmを測る御経塚ツカダ

遺跡では，月影式期の竪穴住居跡や倉庫様建物跡が検出されている。[11] はるか東に連なる丘陵上では，南東約７kmにある満願寺山に３基からなる台状墓群があり，北東約９kmには方形周溝墓や台状墓，そして土壙墓群からなる著名な七ツ塚墳墓群がある。

古墳時代では，本遺跡群の北東約 500m に近接する古府クルビ遺跡がある。畿内布留式併行期の古い段階に比定される標式遺跡である。調査では小銅境片が出土しており，森下川水系における塚崎遺跡や金腐川水系の田中Ａ遺跡出土の小銅鏡とともに，金沢平野における古墳出現期に係る集団相互の祭祀構成を知るうえで見逃せない。東約１kmにある高畠遺跡は，古府クルビ式に後続する布留式併行期の標式遺跡であり，石釧破片や管玉未成品とともに土壙墓が多数検出されたことから玉作工人の墓域と理解されている。[12] 北約 2.5kmの畝田・寺中遺跡では古府クルビ式から高畠式にかけての方形周溝墓群が存在し，初期古墳に類する供献形態から被葬者の性格に問題を投じている。[13] 後期の遺跡で周知されているものは少ないが，先述の古府クルビ遺跡で六世紀後半頃の竪穴住居跡が検出されており，近接地に該期の集落跡が広がっている可能性を示唆した。

ところで，北塚古墳群の関係から周辺に分布する古墳群について概観しておく必要があろう。犀川水系を辿ると，南東約６kmの野田山に長坂古墳群がある。山頂部には，北加賀では最大級の直径42m を測る野田山三角点古墳がある。山麓には全長約50m の前方後円墳・長坂二子塚古墳があり，鏃状銅製品や鉄剣の他，埴輪も出土しており，四世紀末から五世紀初頭頃の北加賀の盟主墳と考えられている。[14] 一方，北東にある森下川水系の丘陵では，小坂古墳群や神谷内（かみやち）古墳群をはじめとする前期古墳群や，前方後円墳の可能性が強い吉原親王塚を盟主とする後期の法華堂古墳群が存在する。北塚古墳群に最も近接する古墳は，南西約 600m にあるびわ塚古墳である。この他には，伝承として押野地内の押野大塚や一塚地内の一塚古墳が存在したといわれるが，いずれも実体は不明である。

律令期では，当地は弘仁14年（823）の加賀立国後の加賀郡大野郷もしくは玉戈（たまほこ）郷のいずれかの郷域推定地にあたる。『日本霊異記』に初見する大野郷畝田村の推定地である畝田町は，北約３kmにあり，畝田・無量寺遺跡からは７間×３間をはじめとする奈良時代末期の大型建物跡や倉庫からなる５棟の企画的な建物跡が検出されており，「庄」と記された墨書土器などから荘家跡と想定されている。[15] こうした初期庄園については，北東約３kmにある藤江Ｂ遺跡からも「石田庄」と記された平安前期の墨書土器が出土しており，文献にみられない庄園の存在を知る有効な手掛りとなっている。逆に，文献に登場する庄園を考古学的に実証したのは，南約３kmにある横江庄遺跡である。この遺跡は平城皇妃朝原内親王家より東大寺に寄進されて成立した初期庄園である。西念・南新保遺跡からも「庄人」と記された墨書土器があり，奈良時代末期以降の周辺地域では，荘園化への新な古代開発の胎動があったことが判る。この他，南東約２kmにある黒田遺跡は，一説では石川郡の郡衙跡と考えられており，西約 1.5kmの安原工業団地遺跡では，６間×２間の大型建物跡があり緑釉陶器や墨書土器が出土している。北北東約 4.5kmの大野川河口には，加賀郡津とも考えられている平安期を中心とする戸水Ｃ遺跡があり，それに近接して平安中期の近岡ナカシマ遺跡が知られている。犀川河口には，中世港湾集落跡として著名な普正寺（ふしょうじ）遺跡がある。



第5図　周辺の遺跡

第1表　周辺の遺跡名とその時代（番号は第5図に符合する）

遺跡名	時代
1．北塚A遺跡	**縄文～古墳**
2．北塚B遺跡・北塚古墳群	**縄文～中世**
3．北塚C遺跡	**古墳**
4．稚日野遺跡	縄文・古墳
5．古府カタガリ遺跡	弥生・奈良・平安
6．古府クルビ遺跡	弥生・古墳・奈良・平安
7．古府B遺跡	不詳
8．高畠遺跡	古墳
9．専光寺染色団地遺跡	古墳・奈良・平安
10．専光寺養魚場遺跡	古墳
11．佐寄森遺跡	奈良・平安
12．善正寺番屋砂丘遺跡	縄文・奈良・平安
13．善正寺遺跡	鎌倉末・室町中期
14．善正寺高畠遺跡	古墳後期・鎌倉
15．金石本町遺跡	奈良・平安
16．寺中御台場跡	江戸
17．寺中B遺跡	縄文晩期・弥生中期・古墳前期
18．寺中遺跡	弥生中期・古墳前期
19．畝田寺中遺跡	古墳(前・後期)・奈良・平安
20．畝田遺跡	縄文晩期・弥生中期・古墳前期
21．畝田大徳川遺跡	奈良・平安
22．松村平田遺跡	弥生
23．松村西の域遺跡	古墳
24．松村A遺跡	縄文（後～晩期）
25．松村どのまえ遺跡	弥生
26．松村寺の前遺跡	室町
27．松村B遺跡	縄文・弥生・江戸
28．戸水B遺跡	弥生・平安
29．藤江C遺跡	古墳前期
30．松村高見遺跡	弥生
31．藤江B遺跡	弥生中期
32．藤江A遺跡	平安（前・後）
33．示野中桜田遺跡	平安
34．出雲じいさまだ遺跡	平安
35．北町遺跡	縄文
36．薬師堂遺跡	古墳前期
37．若宮遺跡	室町
38．玉鉾B遺跡	奈良末～平安初
39．玉鉾遺跡	古墳初頭
40．専光寺海岸遺跡	奈良・平安
41．下安原海岸遺跡	縄文・弥生・古墳
42．下安原遺跡	縄文
43．安原工業団地遺跡	平安
44．緑団地下水処理場遺跡	弥生
45．緑団地公園遺跡	古墳
46．上安原緑団地遺跡	弥生
47．南塚遺跡	縄文
48．南塚B遺跡	古墳
49．びわ塚古墳	古墳
50．上安原遺跡	奈良・平安
51．中屋ヘシタ遺跡	奈良～中世
52．福増遺跡	不詳
53．八田中雁田川遺跡	縄文
54．下福増遺跡	縄文～古墳
55．横江庄遺跡	弥生～平安
56．横江A遺跡	縄文～中世
57．ジョウガンジ遺跡	縄文
58．中屋遺跡	縄文
59．上荒屋遺跡	縄文
60．上安原陸橋遺跡	弥生
61．矢木本町遺跡	縄文
62．上荒屋住宅遺跡	弥生
63．森戸バイパス遺跡	古墳
64．森戸本町遺跡	縄文
65．松島ナカオサ遺跡	平安～中世
66．森戸住宅遺跡	縄文
67．新保東遺跡	古墳
68．新保本町チカモリ遺跡	縄文
69．新保西遺跡	古墳
70．古府遺跡	縄文
71．黒田遺跡	古墳～平安
72．新保本町ツカダ遺跡	弥生

73. 新保南遺跡	中世	77. 大友遺跡	平安
74. 無量寺遺跡	弥生～中世	78. 近岡ナガシマ遺跡	弥生・平安
75. 畝田無量寺遺跡	弥生・平安	79. 戸水C遺跡	弥生～中世
76. 戸水オモテ遺跡	平安～中世	80. 近岡遺跡	縄文～平安

註

(1)　高堀勝喜・南　久和　『金沢市古府遺跡』（金沢市教育委員会　1974年　石川。）のP3～P5から引用。

(2)　橋本澄夫　「砂丘遺跡」『金沢周辺の第四系と遺跡』　北陸第四紀研究グループ　1975年　石川。

(3)　註（1）の文献に同じ。

(4)　高堀勝喜　「金沢市近郊八日市新保並びに御経塚遺跡の調査」『石川県押野村史』　石川県石川郡押野村史編集委員会　1964年　石川。

(5)　米沢義直　「金沢市松村晩期縄文遺跡概報」『石川考古学研究会々誌』第12号　石川考古学研究会　1969年　石川。

(6)　宮本哲郎　『金沢市寺中遺跡』　金沢市教育委員会　1977年　石川。

(7)　宮本哲郎・楠　正勝・栃木英道他　『金沢市西念・南新保遺跡』　金沢市教育委員会　1983年　石川。

(8)　戸澗幹夫・浜野伸雄他　『松任市横江A遺跡発掘調査報告書』　石川県立埋蔵文化財センター　1984年　石川。

(9)　橋本澄夫　「金沢市下安原海岸遺跡の第1次調査」　『石川考古学研究会々誌』　第18号　石川考古学研究会　1975年　石川。

(10)　出越茂和　『無量寺B遺跡』　金沢市教育委員会　1984年　石川。

(11)　吉田　淳　『御経塚ツカダ遺跡（御経塚B遺跡）発掘調査報告書Ⅰ』　野々市町教育委員会　1984年　石川。

(12)　橋本澄夫　『金沢市高畠遺跡』　金沢市教育委員会　1975年　石川。

(13)　南　久和・楠　正勝　『金沢市畝田・寺中遺跡』　金沢市教育委員会　1984年　石川。

(14)　石川考古学研究会　「北加賀地域古墳群分布調査報告」『石川考古学研究会々誌』第22号　石川考古学研究会　1979年　石川。

(15)　出越茂和　『金沢市畝田・無量寺遺跡』　金沢市教育委員会　1983年　石川。

第３章　既往の調査と研究

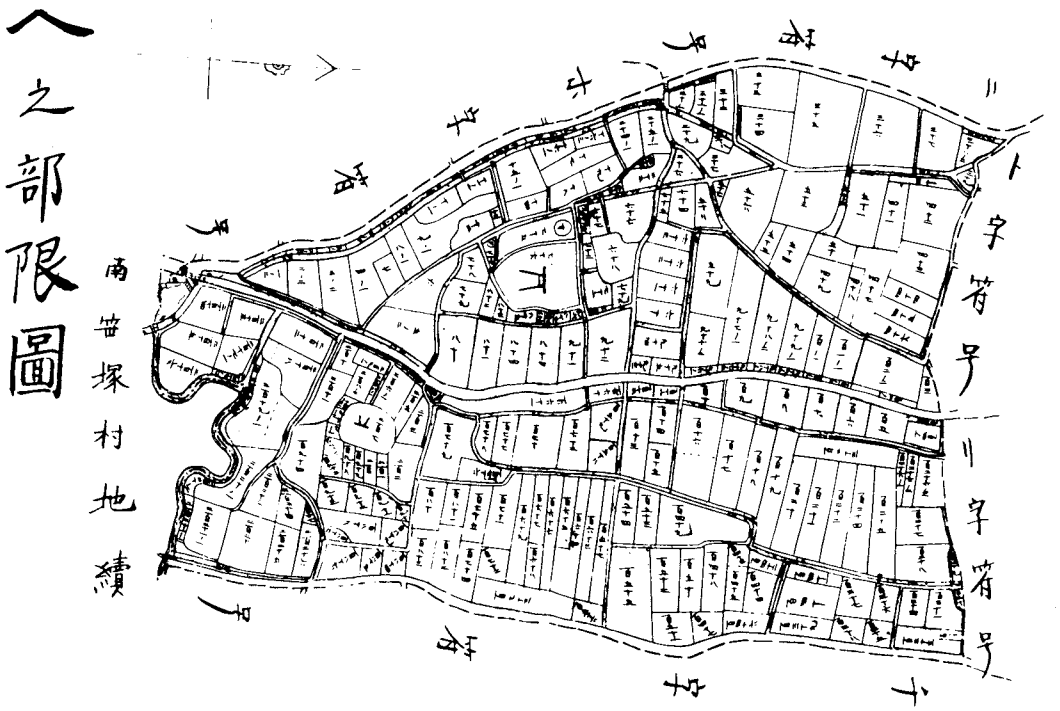
第１節　あらまし

北塚遺跡群は，金沢市西方郊外の北塚町（旧石川郡二塚村北笹塚）地内に所在する。本遺跡群を構成する北塚Ａ遺跡（縄文時代中期後葉～後期前葉に営まれた集落跡）は，集落の東から東南にわたって分布している。北塚Ａ遺跡に一部重複する東西約30m，南北約 500m の範囲にわたり北塚Ｂ遺跡（縄文時代中期中葉～後葉，古墳時代，平安時代，中・近世にかけての複合遺跡）が分布する。北塚Ｂ遺跡と一連のものとも考えられている北塚Ｃ遺跡（古墳時代前期，平安時代にかけての包含地）は集落の北東方に分布している。平地に築造されている古墳として従来から注目されてきたおまる塚古墳（古墳時代後期）は，北塚Ｂ遺跡の南端部近くに立地している。

本遺跡群が所在する地域は，白山を源流とする手取川と本遺跡群の東側を流れる犀川，伏見川，十人川の中小河川の氾濫原によって複合形成された扇状地扇端部の沖積平野である。周辺一帯は古くからの米作地帯で，都市化が進むまでは，これまでどこにでも見られたのどかな田園風景を呈していた。しかしながら，1960年代のほぼ中頃から始まる高度経済成長政策は，日本各地で各種の開発事業の増加をもたらしていった。本遺跡群周辺も，車社会の発展・波及にともない，1972（昭和47）年に金沢バイパス（現国道８号線）が建設されている。これをかわきりに北陸高速自動車道，県道専光寺野田線が開通し，さらに石川県が計画策定した西部緑地公園をはじめ，県立野球場，県産業展示館，県陸上競技場の諸施設が建設整備されるに及んで，急速にその変容をとげてきた。同時に，過去の人々が遺してくれた貴重な文化遺産である遺跡は，その大型開発事業により，徐々に破壊・消滅の危険にさらされてきた。本遺跡群における埋蔵文化財発掘調査および分布確認調査は後に述べるように，当初の学術目的やこれらの開発行為によって，十数次にわたり実施されている。

ところで，おまる塚古墳は平地に築造されている関係上，その立地状況などから江戸時代の文人等の注目するところとなり，種々に記されたようである。[1] 1840（天保11）年津田鳳卿（つだほうきょう）の著した『椋部考古游記（くらべこうこゆうき）』は，「三代實録」仁和元年十二月二十九日条の説[2]と結びつけた最初のものである。また1895（明治28）年11月23日，東京，奥羽，札幌などに次いで全国５番目に結成された北陸人類学会（発起人代表須藤求馬）の機関紙『北陸人類學會志』第貳編の遺跡表には，三湖台古墳，長坂二子塚古墳などと共に載せられている。

北塚式土器の標式遺跡として著名な北塚Ａ遺跡の発見は，1900（明治33）年に実施された耕地整理[3]によって，通称間屋畑と呼ばれる付近より多量の遺物が出土したことが端緒となっている。その後1922（大正11）年秋に，石川県史跡名勝天然記念物調査嘱託の上田三平（うえださんぺい）氏は北塚Ａ遺跡およびおまる塚古墳の調査・研究に来訪し，翌年刊行した『石川縣史蹟名勝調査報告』第壹輯に，その調査結果を詳しく記載している。



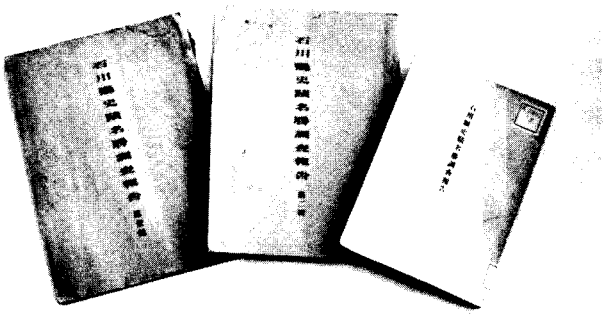
第6図　石川郡二塚村字北笹塚地図（十葉の内一葉・『金沢市おまる塚古墳』より転載）

従来，地元二塚村周辺においては遺跡や遺物に対する関心はかなりの水準であったと思われるが，この史跡調査を機会に，1923（大正12）年地元有志を中心として二塚考古学会（会長篠塚宗太郎）が結成されている。

戦後，本遺跡群の調査・研究に大変活躍なされた安村律義氏（元石川考古学研究会顧問・故人）は，この特色ある地域学会会員となって，考古学研究の第一歩を踏み始められている。その後1949（昭和24）年に至り，石川考古学研究会（会長鏑木勢岐（かぶらきせいき）・1948年発足）に入会され，良き名コンビとなった沼田啓太郎氏（元石川考古学研究会副会長・故人）と出会ってから，本遺跡群はもとより旧二塚村周辺を精力的に巡検し，ほとんどの遺跡の位置，遺物の所在などを踏査，確認されている。安村氏の，あの優秀，絶妙な発掘技術そして遺跡および遺物に対する真剣な心構えなど，後輩として学ぶべき点は多々あった。また，沼田氏は県下の縄文遺跡はくまなく踏査し，それらをこよなく愛護されてきた。そして，縄文土器拓本保有数とその几帳面な整理については，当時全国においても並ぶべき者がいなかった。ともあれ，本遺跡群に対する熱意は甚大で忘れることのできない御二人であり，その功績は大きいと言えよう。

第２節　戦前の調査と研究

本遺跡群における既往の調査と研究は，これまで多数の方々によって行なわれてきている。ここでは，管見にのぼった資料にもとづき，戦前の調査・研究の概略に触れると共に，関係文献から一部引用転載しておきたい。



第７図　『石川縣史蹟名勝調査報告』第壹輯・第二輯・第三輯

先にも述べたように，北塚Ａ遺跡は1900（明治33）年に実施された耕地整理中，問屋畑付近から多量の石器や土器が出土したことが発見の契機となっている。それ以来，水田の耕作時や降雨後の際などに採集された遺物は少なくない。(4)

1919（大正８）年４月，「史蹟名勝天然記念物保存法」が公布されている。それを契機に石川県は，1921（大正11）年県下における史跡名勝天然記念物の実態を把握するために調査を実施している。同年秋，石川県史跡名勝天然記念物調査嘱託の上田三平氏は，北塚Ａ遺跡とおまる塚古墳の実地調査をしている。1923（大正12）年石川県が刊行した『石川縣史蹟名勝調査報告・第壹輯』に，その調査結果を載せてあるので，関係の箇所を原文のまま以下に転載する。

〔**笹塚附近ノ遺跡及遺物**〕　笹塚ハ南北ノ二字ニ分レ，石川郡二塚村ニ属ス。北ハ犀川ニ接シ，西約三十町ニシテ海岸ニ達ス。現今ノ部落附近ハ一帯ノ水田ニシテ南笹塚ニ大神（びわ）塚，北笹塚ニ（おまる）塚ノ二墳アリ。二塚ノ村名亦之ニ出ヅト云フ。（おまる）塚ノ東方ニ問屋畑ト稱スル地域アリ現今ハ水田トナレルモ今ヨリ二十餘年前ハ雑木林ヲ爲シ鬱蒼タル光景ヲ示セリ。卽チ問屋畑ノ如キハ古來加賀平野ノ中間諸所ニ存在セル所謂〔野〕ト稱スル雑草地又ハ雑木林ノ一ニシテ中世ノ開墾ニ洩レタル處女的原野ナリトス。明治三十三年問屋畑附近を開墾シテ水田トナサントセシニ多數ノ土器破片及石器ヲ發見セリ，然レドモ土器ハ何レモ脆弱ニシテ破片ノミナリシヲ以テ土砂ト共ニ窪地ニ埋没シ去リ，少數ノ石斧及石珠類ヲ採集セルニ過ギズ，然シテ此等採集セル遺物ハ地方ノ傳説ニ基キ悉ク古墳關係ノモノトシテ怪マザルノ狀態ナリキ。大正十一年ニ至リ附近調査ノ際，水田ノ畦畔ニ於テ多數ノ繩紋式土器及彌生式土器破片ノ散亂セルヲ發見シ，問屋畑ガ繩紋式土器及彌生式土器ヲ出土セル石器時代ノ遺跡タルコトヲ斷ズルニ至レリ。卽チ第一章ニ記述セシ河北郡倶利伽羅村ノ遺跡ト共ニ從來知ラレザリシモノニシテ，石器時代ノ加賀平野ヲ考察スルニ際シ有力ナル資料ヲ提供スルモノナリ。

土器ハ耕作ノ結果細片トナリテ存在シ且開墾後年月ヲ經タルヲ以テ表面ノ削磨甚シク，爲

メニ紋様ノ明瞭ナルモノ多カラザルモ多數ノ破片ヲ總合シテ觀察セル結果蓆紋ヲ印セルモノ最モ多ク曲線模様，直線模様等アリ。又鉢形容器ノ平底ニ印セル「アンベラノ形付」ハ刈安遺跡ニモ存在シテ聯係ヲ示セリ，彌生式土器ニ屬スル高坏ノ脚部ニ小圓孔ヲ縦三行ニ併列セルモノアリ，素紋ニシテ碗形ノモノアリ，厚手ノ祝部土器及坏ノ破片アリ。此等ノ層位關係ハ詳ナラザルモ表面ヨリ一尺位ノ深サニ包含セラレシト云フ。

石器ハ磨製石斧多ク，大ナルモノハ長サ八寸三分，最大幅三寸八分，厚サ一寸四分，重量六百匁ヲ有シ角型ニ磨キタルモノ多ク，從來温石トシテ之ヲ燒キ布帛ニ包ミテ腹痛ノ際之ヲ利用スルノ習慣アリ。打製石斧亦形態ノ整正ナルモノ多シ，他ニ玉質ノ石珠數個アリ，其圓孔ノ工作法ヨリ推シテ古墳時代ノモノト認メラル。石鏃モ多少採集セラレ，錘石モ少量發見セシト云フ又同村字古保ニ於テモ彌生式土器ニ伴フ石器ノ出土セルアリ。要スルニ笹塚附近ノ石器時代遺跡ハ既ニ湮滅シテ水田トナリ，其遺跡ノ存在ヲ偶然ニ採集セル遺物ニ據テ論斷セルモノナルヲ以テ，其性質ノ完全ナラザルハ止ヲ得ザルナリ。

〔**笹塚附近ノ古墳**〕　おまる塚ノ墳丘ハ琵琶塚ノ東北位シ，北笹塚ヘ百二十七號地籍ニアリ。周圍ハ水田ニシテ略圓形ヲ呈シ，直徑十二間半，高サ十三尺，頂上ニ於テ直徑約五間，表面ニハ雑木雑草繁茂シ，松樹高ク聳エテ遠見スルヲ得ベシ。丘上諸所ニ狐穴アリ曾テ老狐ノ住所トナリ；後墳丘上ニ稲荷社を設ケテ其功德ヲ喧傳セル結果，金澤地方ニ其名聞エ一時參詣人絶エザリシト云フ。古墳ノ壙穴ニ狐狸ノ棲息スル例ハ諸國其類ニ乏シカラザレバ壙穴ノ存在ヲ豫想シ得ベク，附近ノ水田ニハ多少ノ祝部土器ノ破片アリ，其東北部ナル問屋畑ニモ古墳副葬品タリシ所謂朝鮮式陶器ノ破片少カラザレバ，此地方ニ於ケル古墳ノ存在ヲ類推シ得ベシ。然シテ此墳丘ハびわ塚ト共ニ祝部土器ヲ副葬セル古墳ト認ムベキモノトセバ，其被葬者ノ如キ奈良朝以前ニ求メザルヲ得ザルベシ。（最近田園中ヨリ勾玉一個ヲ拾得セルモノアリタリ）

当時この史跡調査にかなり刺激され，地元二塚村では考古学に対する熱意が高まって，1923年に二塚考古学会が発足したことは先ほど述べた。しかし，当学会に関する資料が残存しないため，このユニークな地域学会の詳しい調査研究活動は残念ながら不明である。しかしながら，あの不幸な戦争をのり越えてきた考古学研究者達によって，本遺跡群の調査・研究活動は戦後まもなく開始されるに至った。

第3節　戦後の調査と研究

長く続いた暗黒時代の戦争も漸く終結となり，その敗戦によって皇国史観のタブーをはずされた日本の考古学は，全国各地で一斉にその活動を開始していった。1948（昭和23）年，石川考古学研究会は斯学の研究と文化財の保護活動を目的に結成された。

本遺跡群の戦後最初に行なわれた発掘調査は，この石川考古学研究会が学術研究目的のため，

1951年に実施したのが嚆矢である。爾来，1984年の現在まで第12次調査に至っている。それでは，これら既往の調査と研究史的な概略について述べたい。

本遺跡群の戦後最初にみえる研究活動は，1950(昭和25）年３月，安村律義・沼田啓太郎の両氏によって北塚Ａ遺跡の出土品を検討している。その結果，藤井伸三氏（元石川考古学研究会幹事）の収集品中に笹塚（北塚Ａ遺跡か）出土の黒曜石製縦形石匙が確認された。

第８図　北塚Ａ遺跡出土の有孔鍔付土器
（石川県立郷土資料館蔵）

第１次調査（北塚Ａ遺跡）　石川考古学研究会によって，1951(昭和26)年４月２・３日の両日，発掘調査を実施したが雨天のため途中で中止している。約８㎡の小規模発掘となったけれど，炉跡および柱穴６個を伴う，県下初例の竪穴住居跡を発見している。

第２次調査（北塚Ａ遺跡）　当時石川考古学研究会代表幹事であった高堀勝喜氏（現石川考古学研究会常任顧問）の指導のもと，金沢市中学校社会科研究部会と石川考古学研究会の連合で，1952（昭和27）年３月28日～30日の３日間，前回調査半ばの未発掘部分約28㎡を共同発掘している。この時の調査は好天に恵まれ，未発掘竪穴住居跡の追及と石器や土器の検出をしている。

1966（昭和41）年12月20日，北塚町在住の菅原仁俸氏より，北塚Ａ遺跡から土器が露出しているとの連絡を受けた安村律義氏は，現場へ急行して水田に露出している極めて特徴的な有孔鍔付（ゆうこうつばつき）土器を含む土器片を採集した。

第３次調査（北塚Ａ遺跡）　沼田啓太郎・安村律義・黍野藤二郎（元石川考古学研究会幹事・故人）各氏の石川考古学研究会会員によって，二塚農業協同組合倉庫移転工事に伴ない，1967（昭和42）年３月，緊急に行なわれている。

第４次調査（北塚Ａ遺跡）　1967年７月11日，荒木繁行氏(元石川考古学研究会副会長)より沼田啓太郎氏のもとへ二塚農業協同組合倉庫移転のための敷地内側溝掘り下げ工事中に，多量の土器片が出土した旨の通報が入った。そこで早速，翌12日現場へ赴いて安村律義・黍野藤二郎・荒木繁行の諸氏と急遽協議し，トレンチ（試掘溝）による発掘を実施した。調査は，1.3m×４mのトレンチを工事建造物の支障にならない地点に設定し掘り進めたが，層位は表土，耕作土，遺物包含層の３層で単純層となっていた。遺物包含層は洪水などの影響によるものか酸化鉄による高師小僧（たかしこぞう）が多く認められた。また，出土遺物の土器片も完形品と想像できるものは発見されていない。調査の結果，従来北塚Ａ遺跡の編年は縄文時代中期後葉と考えられてきたが，今次の調査で気屋（けや）式土器を検出していることから，下限は後期初頭であることが確認された。

1960年代のほぼ中頃から始まった高度経済成長時代は，各地に各種の開発事業の増加をもたらし国土の様相を一変していった。それに伴い，国民の共有財産である貴重な文化遺産すなわち遺跡

は破壊・消滅の一途をたどっている。この様な情勢の中，全国的に埋蔵文化財の保存が叫ばれるようになってきた。そこで文化財保護委員会（文化庁の前身）は，諸開発事業と遺跡の保護・保存の調整に資するため，1968（昭和43）年『全国遺跡台帳』および『分布地図』を作成刊行している。本遺跡群の北塚Ａ遺跡とおまる塚古墳は『全国遺跡地図（石川県）』（文化財保護委員会 1968）に「県登録 406　北塚遺跡　金沢市北塚町トイヤバタケ　比較的重要」，「県登録 449　古墳（古墳）　おまる塚古墳　北塚町」と登載された。

第５次調査（北塚Ａ遺跡）　県教育委員会社会教育課文化室によって，新設の都市計画道路専光寺野田線と北塚町を連結する取付道路工事に先だって，発掘面積 480㎡を対象に1972（昭和47）年３月，緊急に実施している。調査により，２連式炉を備えた直径６ｍの円形竪穴住居跡と各種の石器や土器を検出している。

第６次調査（北塚Ｂ遺跡）　県教育委員会文化室によって，都市計画道路専光寺野田線新設工事に伴い発掘面積 1,500㎡を1973（昭和48）年１月16日～３月15日までの厳冬期間実施している。調査成果は，円形周溝墓状遺構２基，同方形周溝墓状遺構１基，大規模な溝１条，古墳時代から平安時代の遺物を数多く検出している。本調査の報告については第４節に詳しく載せてあるので，ここでは省略させて頂だく。

石川県は金沢市西郊外の北塚町と袋畠町地内の一画に西部緑地公園をはじめ，県立野球場，県産業展示館，県陸上競技場の多目的ゾーンの建設計画を策定した。おりしも，緑地公園事業に先だち，1973（昭和48）年秋，同公園において「日本海時代のビジョンと環境」をテーマとした，日本海博覧会が開催されることになり，県教育委員会文化室は西部緑地区域全体にわたって分布調査を実施している。その結果，北塚Ｃ遺跡の所在が確認された。

第７次調査（北塚Ｃ遺跡）　県教育委員会文化財保護課（1973年７月５日文化室が課に昇格）によって，県立野球場建設に伴い発掘面積約 590㎡の調査を1973（昭和48）年11月18日～同30日までの13日間，緊急に実施した。南北50ｍ，東西70ｍの調査対象範囲に６本の東西トレンチ（２ｍ幅）を設定して行なった結果，溝状遺構と小ピット群を検出したが，トレンチ方式の制約上から遺構の性格は明らかにできなかった。遺物は土師器，須恵器，碧玉原石が出土していることから，古墳時代前期から平安時代にかけての遺物包含地と認められた。

1975（昭和50）年９月29日，金沢市教育委員会社会教育課は金沢市中央農業協同組合と北塚Ａ遺跡分布範囲に係る金沢市中央農業協同組合二塚支所事務所建設工事に伴う発掘調査の事前協議をした結果，協同組合側は調査の必要性を理解され，工期延長と調査費用の全面負担を了解している。

第８次調査（北塚Ａ遺跡）　先の事前協議にもとづき，金沢市社会教育課文化室（現文化課）は，調査面積 130㎡を対象に1975（昭和50）年10月14日～11月14日までの30日間実施している。その結果，検出遺構では単式石囲炉をもつ住居跡と多数の土壙，出土遺物は垂飾，石斧，石鏃など各種の石器と炉跡内に伏せられていた深鉢形土器のほか多量の土器片が発見されている。

第９次調査（おまる塚古墳）　金沢市社会教育課文化室は，おまる塚古墳周辺の都市化に伴い，

1977（昭和52）年７月20日～同28日にかけ測量調査，同年９月12日～同30日にわたってトレンチ調査を実施している。この調査は，周溝の有無と遺物の検出および古墳基部の平面形の明確化を目的に，古墳の周囲にトレンチを放射状に設定して行なった（第43図参照）。調査により，第１トレンチ内から時期不明のもの，第６トレンチ内からは月影式土器の口縁部片が検出されたが，いずれも本墳築造時のものとは考えられない。また，試掘溝断面からは周溝および平面形を明らかにすることができなかった。なお，墳丘が削平され周溝のみを残す古墳は第６次調査に３基，第11次調査では５基検出している。この検出された古墳と本墳が立地する地形転換線上には，推定10数基以上の古墳が築造されていたものと考えられる。そして，本墳は当古墳群中において後世の開発から運よく免れた数少ない古墳の一つと考えられる。

第９図　北より北塚Ａ遺跡・おまる塚古墳を望む

1979（昭和54）年８月22日付けで県商工労働部商工課長より，袋畠町地内の第３号産業展示館建設予定地の分布調査依頼が当埋文センターへ提出された。これを受けて同年９月10日～10月１日にかけて現地調査を行なった。調査方法は１ｍ×100ｍのトレンチを東西方向へ６本設定した結果，流れこみとみられる土師器，須恵器，珠洲焼各１点あて検出しただけで，明確な遺物包含層は認められなかった。犀川河岸段丘の近辺にあたるところから，古代集落立地の適地と推定されていたが，袋畠遺跡と本遺跡群の周辺にあたると理解している。

この第３号産業展示館の建設によって，従来の駐車場スペースがかなり狭められたので，その移転先に北塚Ｂ遺跡が分布する範囲が選定されたが選定地中央部に農業用水路が流れているため，駐車場スペースが充分に確保することが困難であった。そこで用水路を道路沿いに付け換える方法がとられた。なお，駐車場は盛土を行ないバラスを敷く簡易舗装の方法で保存に対処した。

1979（昭和54）年８月15日付けで県土木部公園緑地事務所長より，西部緑地公園整備工事に係る用水路の付け換え工事区域の分布調査依頼が当埋文センターへ提出された。これを受けて，同年10月２日～同４日にかけてトレンチによる分布調査をした結果，事前調査の必要がある対象面積は 750㎡に及ぶことが確認された。

第10次調査（北塚Ｂ遺跡）　当埋文センターは先の分布調査にもとづき，1979（昭和54）年11月21日～翌年２月22日までの冬期間，延36日間の調査を実施した。調査は，用水路が側溝に沿うかたちで湾曲にのびるため長大なトレンチ状の発掘となった。検出遺構は，溝100条以上，建物跡１棟，土壙４基，井戸３基，多数のピットがあげられる。出土遺物は，縄文時代中期中葉に比定される古府式期段階のもの数点，古墳時代前期の土師器，同後期の古式須恵器，平安時代，中・

近世の土器が出土している。その出土遺物から，各時期にかけての複合遺跡と判明した。しかし，検出された遺構の構成や性格は発掘調査の性格上，明らかにすることができなかった。

以上，第１次～第10次調査までの概略を管見にのぼった資料をもとに記述した。なお，本書の第１編は**第11次調査**（北塚Ｂ遺跡），第２編は**第12次調査**（北塚Ａ遺跡）の報告である。

第２表は，本遺跡群における発掘調査の次数，期間，面積，主体者，箇所を一覧表にまとめたものである。

第２表　発掘調査一覧

調査次数	調　査　期　間	調査面積	調 査 主 体 者	調 査 箇 所
第１次調査	1951年４月２日，３日	約8㎡	石川考古学研究会	北塚Ａ遺跡
第２次調査	1952年３月28日～同月30日	約28㎡	〃	〃
第３次調査	1967年３月中	不　明	〃	〃
第４次調査	1967年７月12日	5.2㎡	〃	〃
第５次調査	1972年３月中	約480㎡	県教育委員会文化室	〃
第６次調査	1973年１月16日～３月15日	約1,500㎡	〃	北塚Ｂ遺跡
第７次調査	1973年11月18日～同月30日	約590㎡	県教育委員会文化財保護課	北塚Ｃ遺跡
第８次調査	1975年10月14日～11月14日	130㎡	金沢市教育委員会	北塚Ａ遺跡
第９次調査	1977年９月12日～同月30日	約90㎡	〃	おまる塚古墳
第10次調査	1979年11月21日～1980年２月22日	750㎡	県立埋蔵文化財センター	北塚Ｂ遺跡
第11次調査	1983年10月３日～11月30日	1,000㎡	〃	〃
第12次調査	1984年５月24日～６月14日	約130㎡	〃	北塚Ａ遺跡

なお，本遺跡群の保護活動および全調査にわたって，石川考古学研究会より絶大なるご尽力を賜っている。前半の第１次～第４次調査に至っては，研究会の一方針でもある〝手弁当〟による学術的な発掘調査を小規模ながら積極的に行ない，多くの成果を挙げられている。高度経済成長時代に移行した第５次調査以降においては，研究会の基本理念である文化財保護の精神にもとづき，開発側との事前協議や困難な調整など，その都度的確なご指導，ご助言を頂戴している。そして，地元北塚町周辺の方々には発掘調査のご協力，ご支援はもとより本遺跡群の重要性を深く認識せられ，高い関心と暖かい熱意をもって，その保存に深い理解を示されている。さらに，各関係機関におかれては，最善の努力を尽くされてきたことを，ここに銘記すると共に本遺跡群に関係したすべての方々に，衷心より厚く感謝申し上げます。

第４節　第６次調査（北塚Ｂ遺跡第１次調査：昭和48年）の概要

都市計画道路専光寺野田線道路改良工事に先立って金沢市北塚町・稚日野町地内において実施

された。調査は当時の石川県教育委員会文化室が石川考古学研究会の全面的な協力を得て実施した。

調査は昭和48年１月16日から同３月15日まで冬期間の悪天候をついて行なわれ，おりからの降雪のため再三中断を余儀なくされたという。その結果，円形墳２基，「方形墳」１基をはじめ大きな溝状遺構２条などが検出されている。金沢平野における古墳群の実態を知るうえで，報告書の刊行がまたれるところであるが，『二塚郷土史』に調査担当者の高橋裕氏が概要を報告されているので，それに拠りながら以下に一部を紹介したい。

１　古　墳（第11図，図版第二六・二七）

第１号墳

径12.0mを測る円墳である。墳丘および主体部はすでに失なわれており，検出時における周溝の内側（中央部）は平坦であった。周溝の幅は80cm～100cm，深さは南側で50cm，北側で70cmを測る。断面は逆梯形を呈する。溝内は茶褐色の単一土層で充塡されていた。中央部のピットおよび溝状の遺構は，古墳とは関係ないものと推察される。なお，本墳の東側は路線外にあるため全掘していない。

遺物は，北側周溝の覆土中より土師器の小片が検出されている。

第２号墳

第１号墳の北方約20m に位置する。径11.5m を測る円墳である。第１号墳と同様，墳丘および主体部は失なわれている。周溝の幅は 100cm前後，西側が最大 1.5m を測る。検出面からの深さは南側で55cm，北側で45cmを測る。断面は逆梯形を呈し，急角度をもって立ちあがる。溝内は茶褐色の単一土層で充塡されている。中央部のピットは古墳とは関係ないものと思われる。

出土遺物は，周溝覆土中より月影式期の土器が検出されているが，古墳の築造時期を考えるための資料とはなりにくい。

本墳も第１号墳と同様，全掘していない。

第３号墳

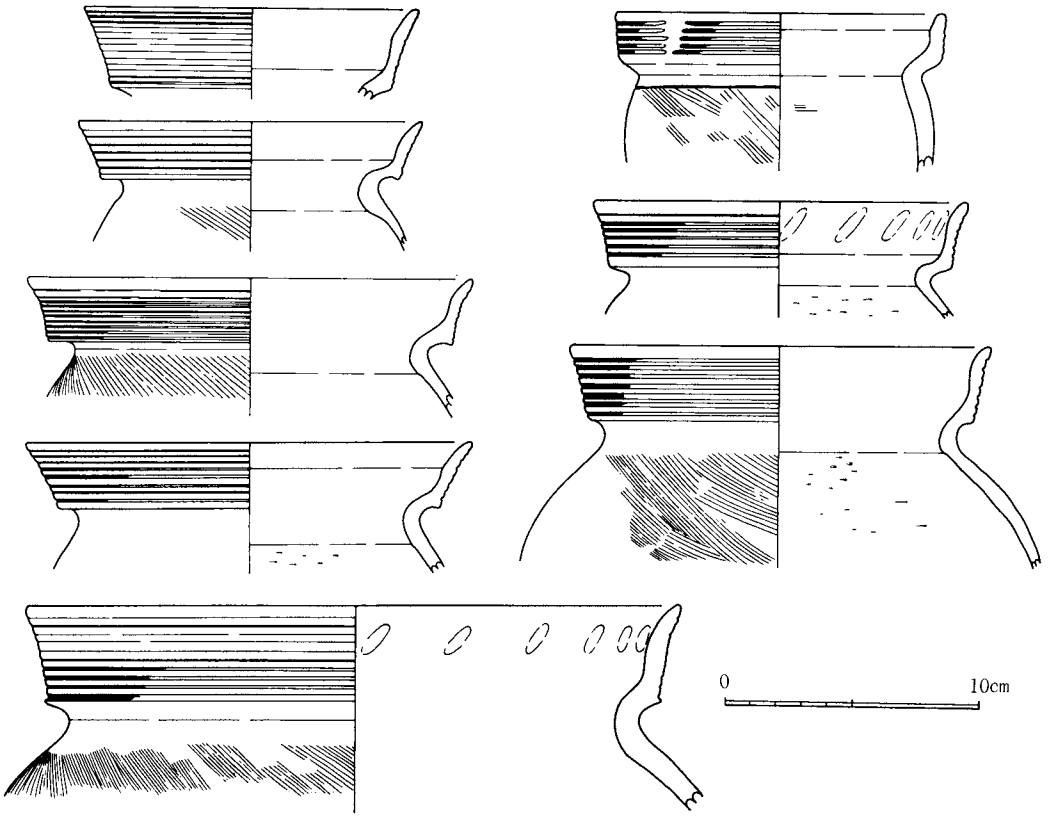
農道の存在により一部未掘であるが，一辺約７ｍの「方形墳」と思われる。周溝の幅は北側の上端が最大で 100cm，下端は約30cmを測る。検出面からの深さは最大70cmを測る。断面逆梯形を呈し，立ちあがりは非常に急である。溝内は茶褐色で充塡されている。

出土遺物はない。

２　溝（第10図，図版第二七）

第１号溝

第１号墳および第２号墳の西側にあって両者をとり囲むように円形を呈する大規模な溝である。法量は上端の最大値が 4.5m，下端で 100cm，深さ 1.2m を測る。底部から第10図に示した弥生時代末期月影式期の土器が出土している。図示した器形のほかに壺形土器，高坏形土器，蓋形土器などが出土している。高橋裕氏は本溝について，第１号墳，第２号墳を含んだ墓域と居住域を



第10図　北塚B遺跡(第1次調査)第1号溝出土土器

区画するための遺構の可能性を指摘しておられる。しかしながら，溝という遺構の性格から上記の土器が遺構の時期を示すとはいいがたく，遺物のほとんどない古墳との同時性を明らかにすることはむずかしいと思われる。

第2号溝

本書で図は掲載していないが，東西方向に走る上端約2m，下端約1mの溝である。溝内より平安時代後期の土師器，須恵器が出土している。

3　遺　物

縄文時代の遺物を中心とする北塚A遺跡と本遺跡の境界については判然としないが，本遺跡からも相当量の縄文土器をはじめ御物石器，石冠，打製石斧等が出土している。本書で報告する北塚B遺跡からは縄文関係の遺物がほとんどなかったことより，A遺跡とB遺跡は専光寺野田線あたりで境を接すると見られる。

第11図　北塚B遺跡(第1次調査)第1号墳～第3号墳実測図

註

（１）　菅原仁俵　「おまれ塚・琵琶塚について」『石川郷土史学会々誌』第17号　P66～68　石川郷土史学会　1984年　石川。

（２）　「三代實録」仁和元年十二月二十九日の条に次のように記してある。

廿九日己卯°節婦加賀國加賀郡大野郷人道今古°授二位二階°免二戸内田租°表二其門閭°以旌二貞節一也°今古生年十三°適二故前加賀權掾大神高名°經二二十餘年°高名身死。今古廬二千墳側°歴レ年不レ去°哭泣之聲°日夜不レ斷°今古母箭集錆河子年二十一°始適二於人°其夫死後°不二更再醮°全守二一節°齢七十六°終二於室内°母子繼レ踵°貞潔无レ虧焉°

上記加賀郡大野郷の節婦道今古をおまる塚古墳，その夫加賀権掾大神高名をびわ塚古墳の被葬者に比定している。

（３）　耕地整理事業は二塚村笹塚田整理組合によって，明治31年２月に工事着手，同44年工事終了している。

（４）　上村弥寿男編　『二塚郷土史』Ｐ666～Ｐ684　二塚農業協同組合　1978年　石川。

〔北塚遺跡群関係文献〕（五十音順）

上田三平　『石川縣史蹟名勝調査報告』第壹輯　石川縣　1923　石川。

上村弥寿男編　『二塚郷土史』　二塚農業協同組合　1978年　石川。

大屋愷故他　『加賀国石川郡村誌』　1883年　石川。

小嶋芳孝　「北加賀地域古墳群分布調査報告」『石川考古学研究会々誌』第22号　石川考古学研究会　1979年　石川。

財團法人石川郡自治協會編　『石川縣石川郡誌』　石川縣石川郡自治協會　1927年　石川。

柴野美啓　『亀の尾の記』　1830年～1845年頃　石川。

菅原仁俵　「おまれ塚・琵琶塚について」『石川郷土史学会々誌』第17号　石川郷土史学会　1984年　石川。

須藤求馬　「北陸地方遺物遺蹟表」『北陸人類學會志』第貳編　北陸人類學會　1898年　石川。

高堀勝喜・金沢市中学校社会科研究部会　「金沢市北塚住居址遺蹟の調査」『石川考古学研究会々誌』第４号　石川考古学研究会　1952年　石川。

津田鳳卿　『椋部考古游記』　1840年　石川。

中島俊一　『金沢市北塚Ｃ遺跡』　石川県教育委員会　1974年　石川。

西野秀和他『金沢市北塚Ｂ遺跡（第Ⅱ次調査）』　石川県立埋蔵文化財センター　1980年　石川。

沼田啓太郎　「金沢市元二塚村出土品について」『石川考古学研究会々誌』第２号　石川考古学研究会　1950年　石川。

「金沢市北塚遺跡第２次調査報告」『石川考古学研究会々誌』第12号　石川考古学研究会　1969年　石川。

橋本澄夫　『石川県考古学便覧』　北国出版社　1970年　石川。

梅軒恭村　『笹塚村古塚由来』　1854年　石川。

平岡栄雄　『石川縣石川郡神社誌』　石川縣神職會石川郡支部　1924年　石川。

日置　謙　『石川縣史』第五編　石川県　1933年　石川。

『石川縣史』第一編　石川県　1937年　石川。

『加能郷土辞彙』　金澤文化協會　1942年　石川。

南　久和・吉本澄与治　『金沢市おまる塚古墳緊急調査報告』　金沢市教育委員会　1978年　石川。

南　久和　『金沢市北塚遺跡』　金沢市教育委員会　1979年　石川。

森田柿園　『加能越氏族伝』巻一　1868年　石川。

『加賀志徴』巻十一　1860年代　石川。

安村律義・嵯峨井亮　「金沢市北塚遺跡発見の有孔鍔付土器」『石川考古学研究会々誌』第14号　石川考古学研究会　1971年　石川。

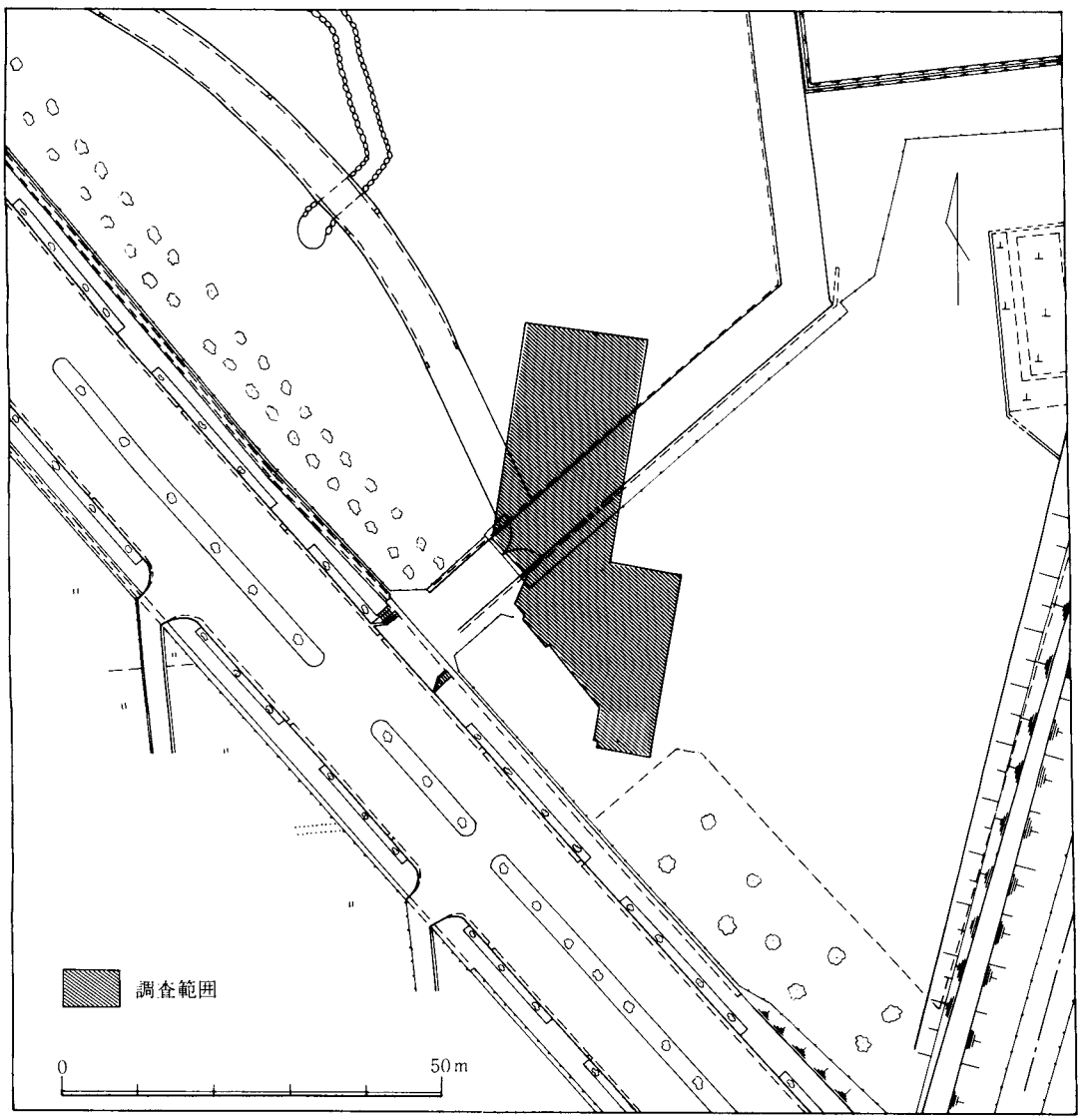
若林喜三郎編　『石川県の歴史』　北国出版社　1970年　石川。

第1編　北　塚　B　遺　跡

第１章　調査の概要

第１節　調査の位置

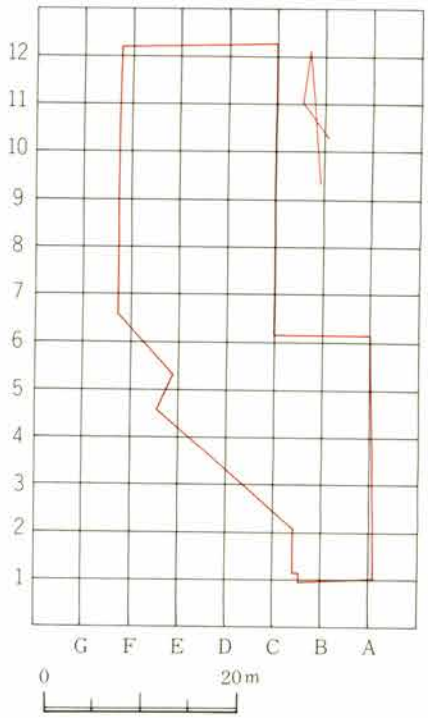
昭和58年度の調査対象区は，西部緑地公園内でも南側入口付近にあたる。北塚集落の共同墓地の南西約50m を測る地点で，仮駐車場となっている部分である。県道専光寺野田線建設に伴って実施された昭和47年度の調査区の北側に接するところである。調査区は，８ｍ×11m の一画と25ｍ×24m の一画からなり，それをいわば鍵形に接合した調査範囲である。門と周辺樹木の保存のため南側の一画は不整形なものとなった。実際の対象面積は約 900㎡ である。



第12図　北塚Ｂ遺跡調査区の位置

第2節　遺構の配置と概要（第14図，図版第二）

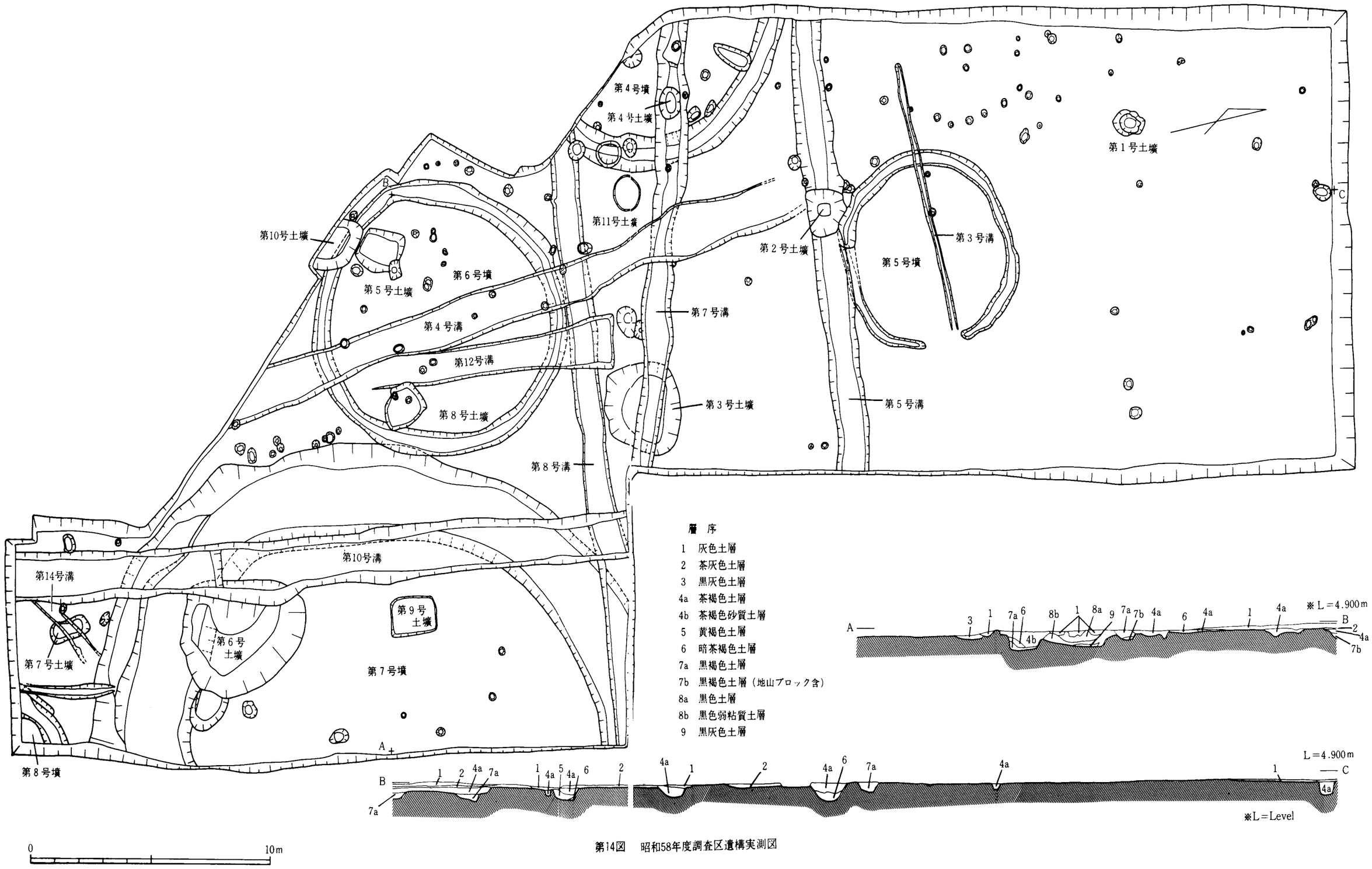
調査地点では，地山面が南から北へ緩やかに傾斜しており，調査区の南北両端では約20cmの落差が認められた。遺物包含層は，中央部から南西方向にかけて約10cm程度の堆積が認められたが，耕地整理や公園造成の際に削平や破壊を受けている部分も少なくない。特に，北側と西側にその傾向が著しく，包含層は残存しない。また，包含層からの出土品は，縄文土器から中世陶器におよぶが，その数は少なく小片であることがほとんどである。



第13図　調査区区割図

検出された遺構は，弥生時代終末期から近世・近代まで存在するが，古墳5基と平安時代後期の溝状遺構と土壙が主であった。古墳については，過去の隣接する調査区でも3基の古墳が検出されており，古墳の番号は過去の調査からの通しとした。北から第5号墳，第4号墳，第6号墳，第7号墳，第8号墳が約4～5mの間隔をもって配置し，第6号墳と第7号墳が周溝外縁で極わずか重複する以外には古墳相互の切り合いがなく，計画的に築造されたものと考えられた。第5号墳は，検出された古墳のなかでは最も低いところに位置し，直径約7mを測るものである。それより以北は地形の傾斜とともに遺構密度が薄いことから，古墳が存在する可能性は低いと理解された。第5号墳の南西5mには直径約12mを測る第4号墳が5分の2程検出された。その東約4mにある第6号墳は，南北軸の直径が約10mを測る楕円形を呈しており，東に接する第7号墳の規制を受けたことが理解される。第7号墳は，2分の1程度しか検出されていないが，復元径が約25mを測る円墳と推定されるものである。今回の調査区では最も大きいものであり，おまる塚古墳に近似する規模を有するものであった。第8号墳は調査区の東南隅に10分の1程検出された復元径約10mを測るものであった。これらは，後世の削平を受けており外表施設や内部主体は不明であり，周溝のみを検出したにすぎない。第7号墳を除いては，規模や周溝形状に共通性が認められるが，第7号墳の周溝は緩やかに立ち上がる溝底面の広いものであり，葬送儀礼に使ったと想われる須恵器の装飾付台付壺形土器の破片も出土するという特異な存在であった。

古墳以外の遺構では，弥生終末期の土壙や，平安後期と中世の土壙と溝状遺構があった。平安後期の遺構は，古墳が占地する箇所にも随所にみられ，平安後期の時期には古墳の存在が意識されていなかったことを窺わせた。なかでも，平安後期の第10号溝が第7号墳の周溝と裾部を切って構築されているのが最も顕著な例である。出土品については，量的に乏しく時期比定の困難な遺構も少なくない。そうしたなかで，第5号溝から出土した平安後期の土師器や白磁片，また，第5号土壙から出土した鎌倉時代後期の土師質土器や青磁の小片が目立ったものといえる。



第14図　昭和58年度調査区遺構実測図

第２章　遺構と遺物

第１節　古　墳

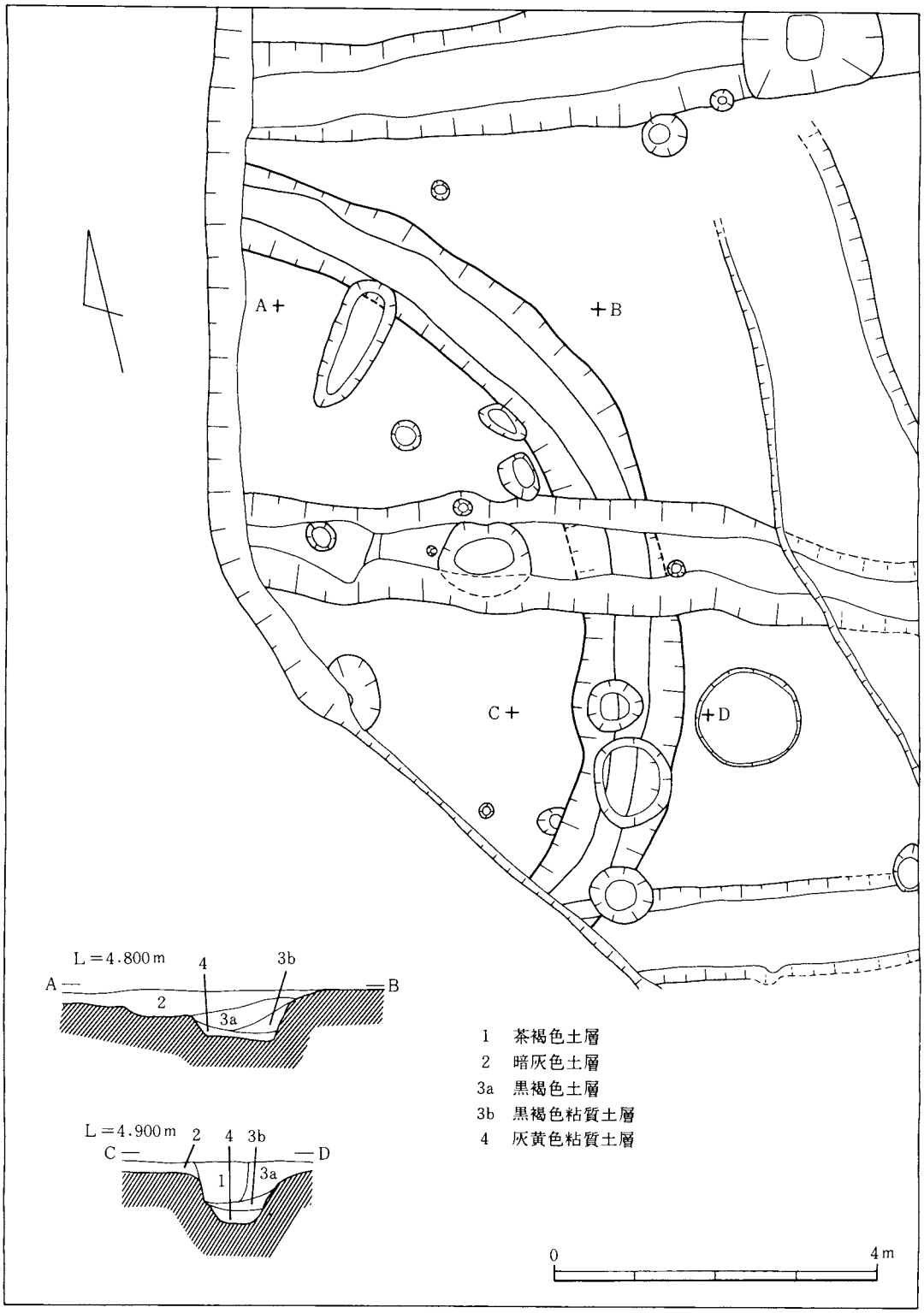
１　第４号墳（第15図，図版第四）

位置と形状等　第４号墳は，調査区中央西側に位置する。中央を東西方向に第７号溝・第４号土壙が第４号墳を切っている。周溝のみを検出し，内部主体等は検出されなかったことから，かなり削平されているものと思われる。（第５号・第６号墳も同様。）平面形は円形を呈し，推定では周溝外縁で直径12m 弱の規模となろう。周溝は上幅1.0～1.4m を測り，深さは0.4～0.7m（平均0.5m），溝底レベルは4.0～4.2m を測る。断面形は北側で逆台形，南側でＵ字状を呈する。覆土は下から灰黄色粘質土層，黒褐色粘質土層，黒褐色土層，暗灰色土層の４層を判別し得た。そのうち下２層は，周溝が掘られたのち，あまり時間をおかずに周辺から流れ込んだものと考えられる。その上の黒褐色土層は，周溝外側上端にとどまらず，周溝外へも堆積をのばしており，第４号墳との関連性の比較的弱い外側からの流入土と思われる。最上層の暗灰色土層は，下３層の上から周溝内側上端を越え，周溝内にまで堆積していることから，盛土等とは考えられず，後代盛土（があったと仮定して）削平後に堆積したものであろう。遺物（土器）は上２層から多く出土している。

第４号墳は，調査区の西壁に位置しているため，全体の５分の２程度を検出したにすぎないが，昭和48年の調査の際検出された第２号円形周溝状遺構に近接する位置に存在する。[(1)] ちなみに，『二塚郷土史』によれば，第２号円形周溝状遺構は，「径11.5㍍を測り円形プランを呈する。周溝幅は南側で約1.0㍍，西側で0.9～1.5㍍，北側では約1.0㍍を測る。深さは黄褐色の地山面より，南側で50～55㌢㍍，西側で25～35㌢㍍，北側で35～45㌢㍍をそれぞれ測る。周溝断面形は逆台形を呈し，その立ち上がりは垂直に近い急角度をもっている」[(2)] とされ，同円形周溝状遺構は全体の５分の３程度を検出している。

出土土器（第18図１～５，図版第一三）

弥生土器　土器は，周溝内覆土より出土したが，一部は周溝上面より高い位置，あるいは周溝のやや外側の地山面直上から出土した。北側で若干まとまって出土したものの，総じて分散的な出土であり，少量であるうえいずれも小片で摩耗が著しい。溝底面からの出土はなかった。図化し得たものは第18図１～５の５点である。１～３は有段口縁帯の外面に擬凹線文（６～10条）を施した甕形土器である。口径はそれぞれ17.6，20，16.7cmを測る。口縁体が幅広で強く外反することから，月影Ⅱ式土器と考えられる。１・３の外面の一部に煤が付着している。４・５は底部片で，底径はそれぞれ２，４cmを測る。１～５の胎土・焼成は概ね良好であるが，１～４の胎土中には若干の砂粒が混入している。色調は１・３・４が淡褐色，２・５が黄橙褐色（５の内面は灰褐色）を呈している。



第15図　第4号墳実測図

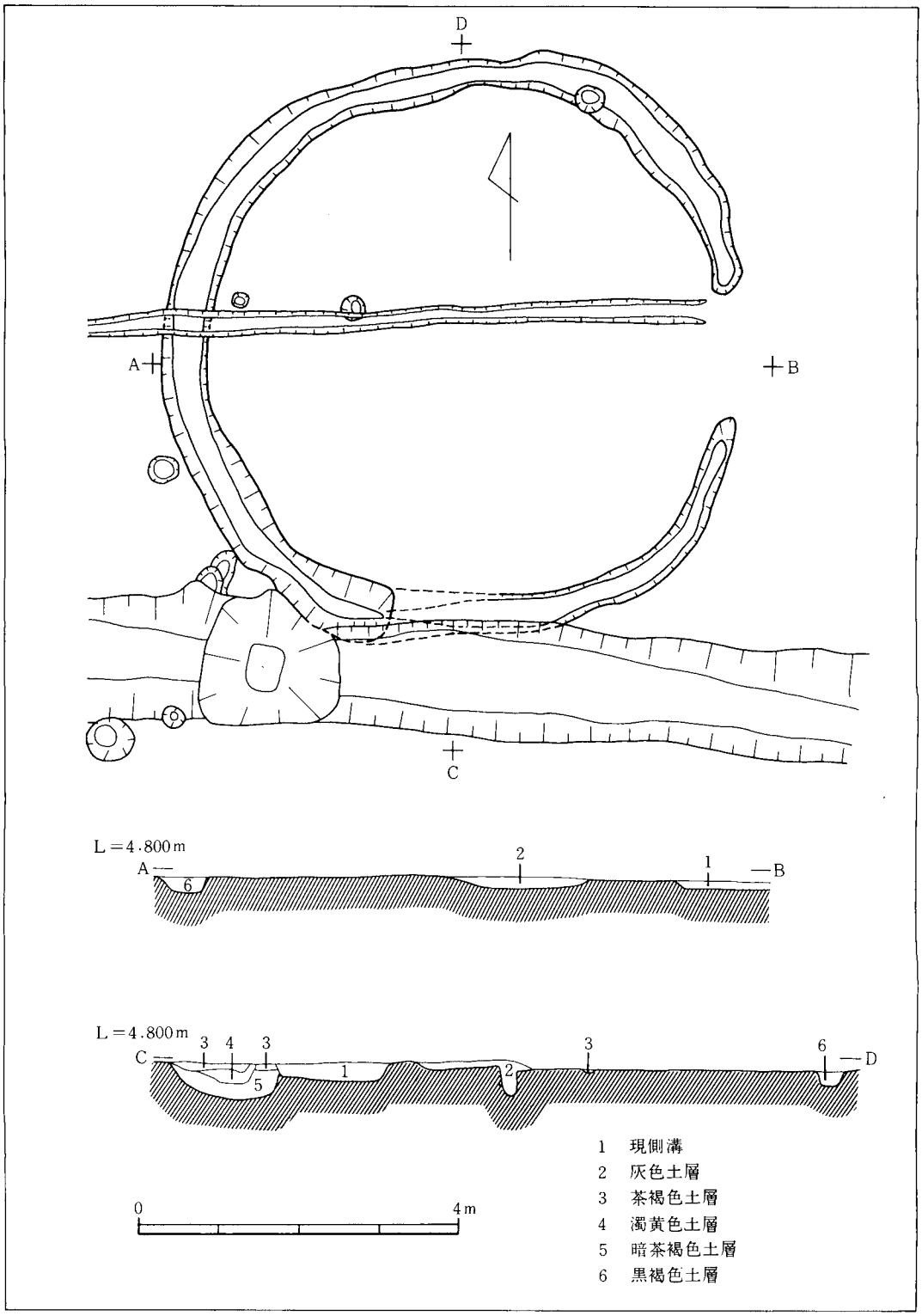
2　第５号墳（第16図，図版第三）

位置と形状等　第５号墳は，第４号墳の北東，調査区の北側中央に位置する。第４号・第５号墳の周溝外縁間の距離は約5.3ｍである。中央を南北方向に第１号溝が，東西方向に第３号溝が第４号墳を切っており，また南東部を南北方向に第２号・第６号・第９号溝が，南端部を東西方向に第５号溝・第２号土壙が同じく第５号墳を切っている。さらに南東部は既存の側溝によって再度の攪乱をうけている。第５号墳は周溝外縁で直径7.2～7.6mを測り，平面形はほぼ円形を呈するが，東西方向がやや短い。(南北方向を１とした場合，東西方向はおよそ0.94となる。)周溝は上幅0.3～0.8mを測り，深さは0.1～0.5m（平均0.2m），断面形は丸みをおびた逆台形ないしはU字状を呈し，覆土は黒褐色の単一土層である。

第５号墳の周溝は，東側では検出されず，一見幅約1.5ｍの土橋部を残すようにもみえるが，周溝の両端の溝底レベル（約4.51m）と，同部のレベル（約4.59m）との差はほとんどなく，また地山面（検出面）が南西部で高く（約4.8m），北東部で低い（約4.6m）ことから，北東部がより深く削平を受けたために，結果的に同部の周溝が検出されなかったものと考えられる。第５号墳を切っている第３号溝及び側溝が同部で検出できなくなることも，同様の理由によるものであろう。こうした削平状況が，第５号墳の平面プランの東西方向の歪みに関連している可能性もあるが，いずれにせよ，かなり削平されているとはいえ，第５号墳が他の古墳に比較して小型のものであることは疑い得ない。

出土土器（第18図６～11，図版第一三）

弥生土器　土器は，周溝内覆土から分散的に出土した。いずれも小片で，溝底面からの出土はなかった。図化し得たものは，第18図６～11の６点で，すべて甕形土器である。６～８は，外傾する有段口縁帯の外面に擬凹線文（９～11条）を施すものである。口径はそれぞれ19.8，17，20.8cmを測る。６は口縁帯が外傾はするものの外反はせず，口端部は厚く丸みをもたせていることから，月影式土器に先行する法仏式土器と考えられる。７・８は，強く外反する口縁部の内面屈曲部が，横ナデ調整によって大きく凹み，上位に稜をもつもの（８は同部に指頭圧痕を連続的に施している）で，月影Ⅱ式土器である。６・８の外面の一部には煤が付着している。９は有段口縁帯の内外面をナデによって仕上げるもので，口径15.8cmを測る。受口状口縁系の甕のようにもみえるが摩耗が著しく判然としない。10は外反する「くの字」口縁の端部を上方へつまみあげることによって外面に不明瞭な面をつくりだし，口縁部を強調したもので，口径18.6cmを測る。胎土は精選され焼成も堅緻であり，他のものと印象を異にしている。この種の甕は，能登地域で比較的多く出土をみている。[3] 11は甕の底部片で，底径は1.9cmと小さい。９～11は，７・８と同時期の所産と考えておきたい。６～９・11の胎土及び焼成は概ね良好であるが，胎土中に砂粒を若干含んでいる。色調は，６・10・11が淡褐色，７が黄褐色，８・９が黄橙褐色を呈している。



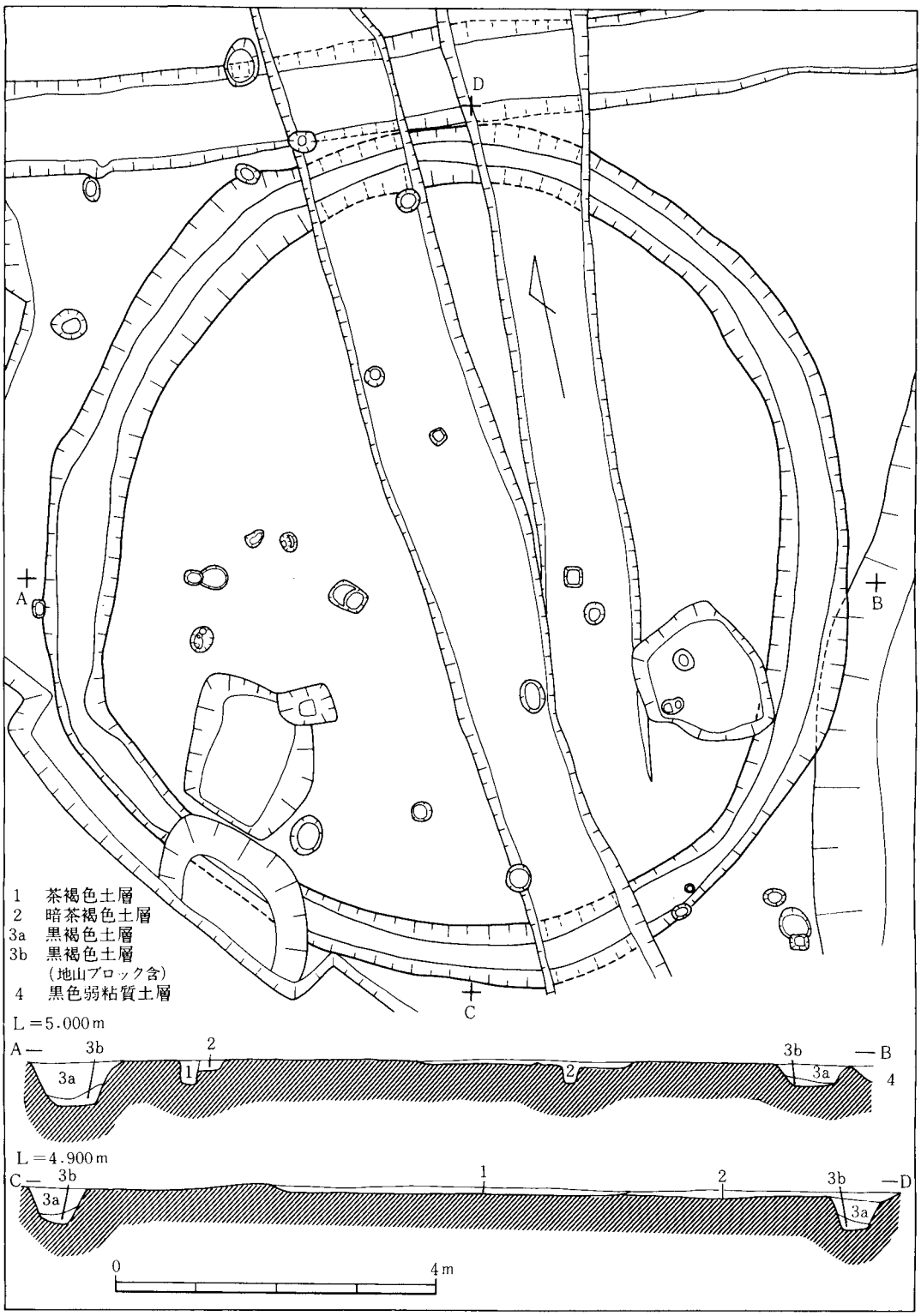
第16図　第5号墳実測図

3　第６号墳（第17図，図版第五・第六）

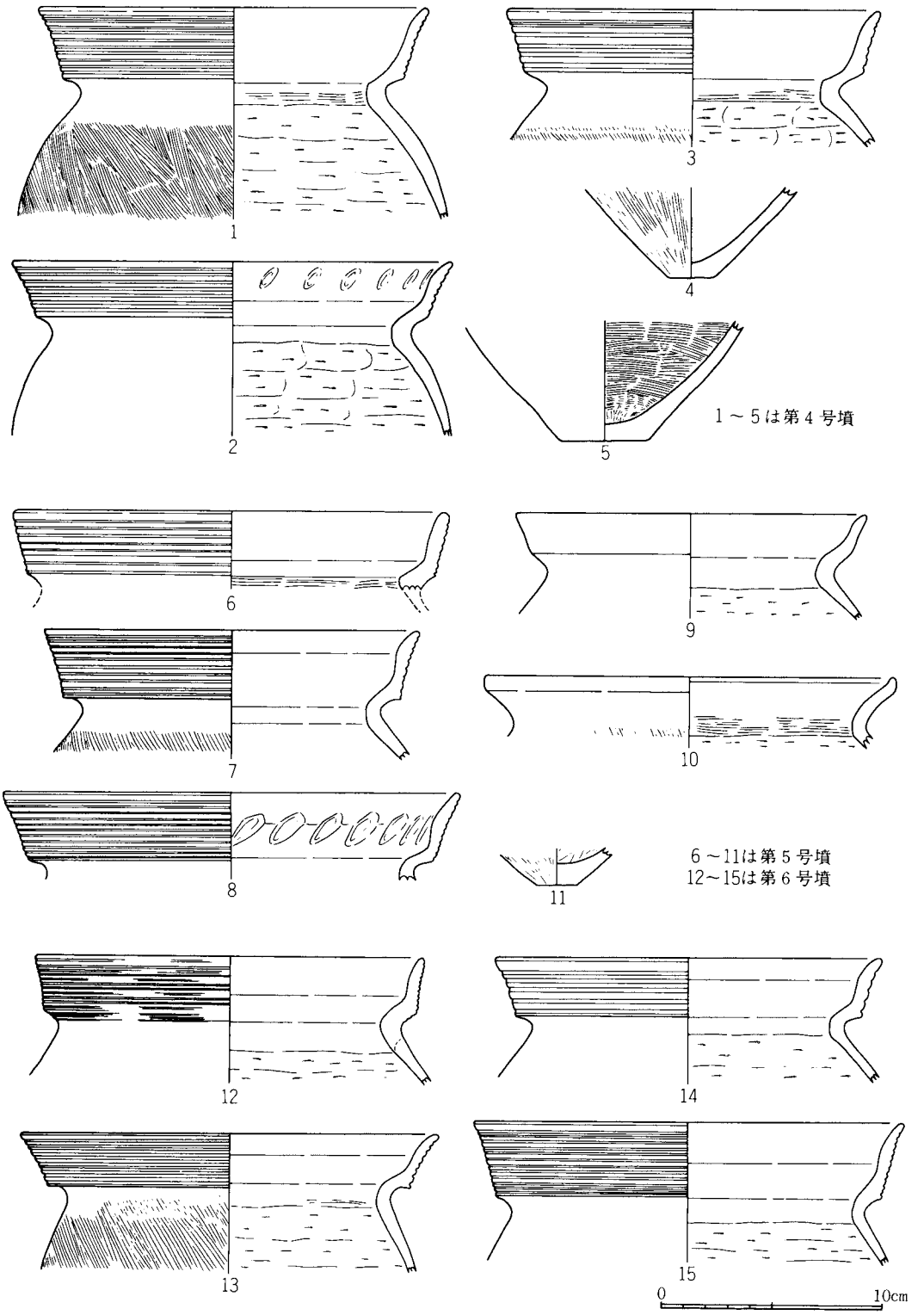
位置と形状等　第6号墳は,第４号墳の南東，調査区の中央やや南西寄りに位置する。第４号・第６号墳間の周溝外縁間の距離は約3.2mである。 中央を南北方向に第４号溝・第12号溝が，南東側では第８号土壙が，南西側では第５号・第10号土壙が第６号墳を切っている。また，東側では第７号墳と一部（約２ｍにわたり，最大0.3ｍ）重複している。周溝外縁で直径 9.8～10.5mを測り，平面形はほぼ円形を呈するが，東西方向がやや短い。(南北方向を１とした場合，東西方向はおよそ0.93となる。）周溝は上幅0.5～1.1mを測り，深さは0.2～0.6m（平均0.4ｍ），溝底レベルは4.3～4.6mを測る。東側と西側ではやや幅が広く，また東側では比較的浅い。断面形は概ね逆台形状を呈し，覆土は２層を判別し得た。ともに黒褐色土層を基調とするが，下層は黄褐色土（地山土）ブロックを含んでいる。下層上面が外側への傾斜を示していることから，周溝の内側から流れ込んだものと考えておきたい。なお，地山面（検出面）のレベル差は10cm弱と小さいことから，周溝の東西方向への歪みは,第5号墳のように後代の削平等によるものとは考えにくく，一部重複して東側に接する大型の第７号墳との関連を重視すれば，第７号墳を意識したためという可能性がある。

出土土器（第18図12～15・第19図16～33，図版第一三）

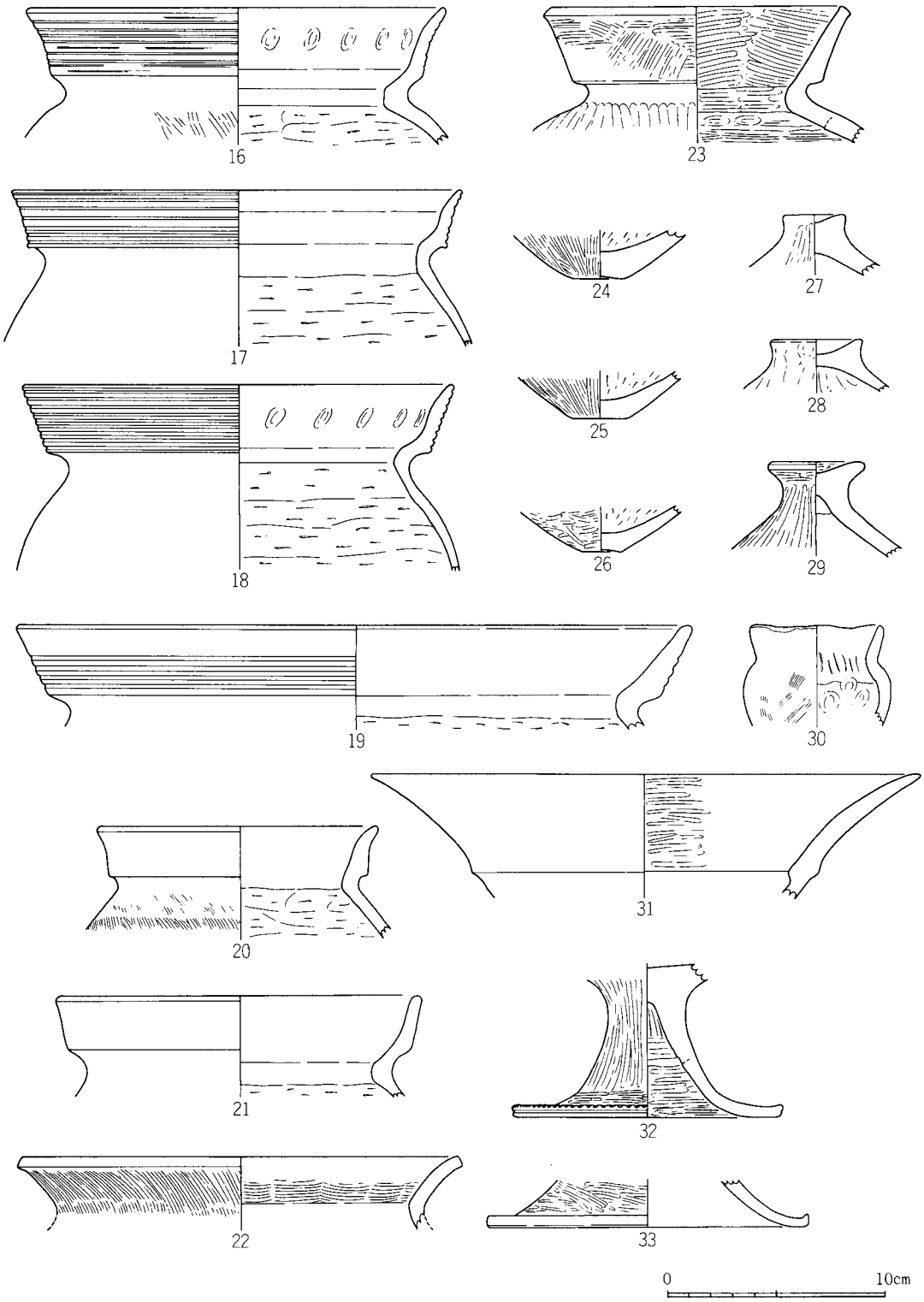
弥生土器　土器は，周溝内覆土より出土している。北西側でややまとまって出土しているほかは，分散的な出土である。小片が多く，摩耗が著しい。溝底面からの出土はなかった。図化し得たものは，第18図12～15・第19図16～33の22点である。その内訳は，甕形土器11点，壺形土器１点，高坏形土器３点，蓋形土器３点，小型土器１点，甕・壺形土器の底部片３点である。12～18は，口縁外面に擬凹線文（５～14条）を施した有段口縁甕で，口径12～21cmを測る。口縁帯は比較的幅広で，強く外傾・外反するものが多い。19は，口径31cmを測る大型の有段口縁甕で，口縁外面に４条の擬凹線文を施している。20・21は，口縁部をナデによって仕上げる有段口縁甕で，口径は12.8，16.5cmを測る。20の口縁内面は「くの字」に近い。22は外反する「くの字」口縁甕で，口縁端部に外傾する面をつくりだしている。23は口径13.4cmを測る有段広口壺である。口端部は外傾する面をもち，口縁内面は「くの字」状を呈する。24～26は甕・壺の底部片で，底径はそれぞれ2.2，2.6，1.8cmを測る。27～29は鈕部径2.6，4.2，４cmを測る蓋である。27･28の鈕端部は先細りに仕上げられるが，29の鈕端部はやや厚く反転ぎみである。30は手捏ね風の小型土器で，口径5.8cmを測る。31は坏部が有段鉢状を呈する高坏の口縁部で，口径25.2cmを測る。32･33は高坏の脚で，脚部径はそれぞれ12，14.6cmを測る。16～33の胎土及び焼成は概ね良好である。色調は，13・24・25・28・30・33が淡褐色，15が橙褐色，16・23・26・32が淡茶褐色，17が橙茶褐色，20・22は黄褐色，21が淡黄褐色，12・14・18・19・27・29・31が黄橙褐色を呈する。13・16～18・22・24・25の外面の一部には煤が付着している。時期的には，22の「くの字」口縁甕がやや古相をおび，逆に23の有段広口壺がやや新しい様相を呈するとも考えられるが，全体的には月影Ⅱ式土器の範疇で捉えられるものと思われる。



第17図　第6号墳実測図



第18図　第４号・第５号・第６号墳出土土器



第19図　第6号墳出土土器

4　第７号墳（第20図，図版第七）

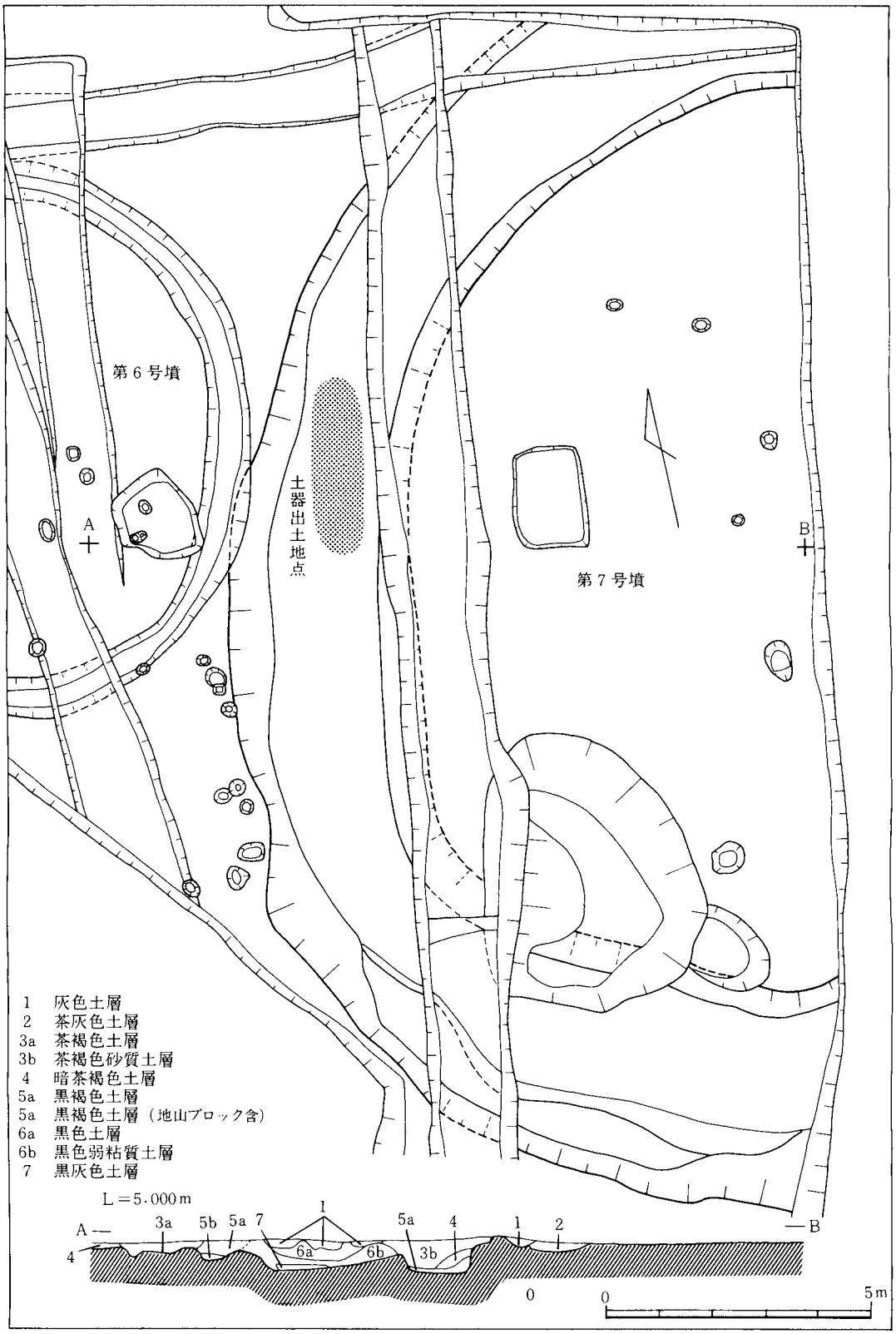
位置　調査区の東に検出された最大規模の円墳である。西には第６号墳が接し，南１ｍには第８号墳があって，本墳をとりまく古墳相互の占地は極めて密集した状態を示している。とりわけ本墳と第６号墳は，周溝外縁の一部がわずかながらも切り合いを示す程に接している。これは，第６号墳が南北に長軸をもつ楕円形を示すことからも判るように，本墳が先に構築され，その規制を受けた第６号墳が狭い領域を最大限に利用して構築されたからである。

さて，本墳の立地する地山レベルは平均 4.6m 前後を測り，西から北東方向へ緩やかな傾斜を示すところである。第６号墳の中心部から比較すると約10cmの落差がある。本墳の更に東約20mには，十人川に向って急傾斜する地点が認められており，[4] 本墳は急崖直前の微高地の縁辺に立地することが予想された。すなわち，微高地と十人川の段丘斜面との地形変換線付近に立地しているのであり，同じ変換線上に占地する，おまる塚古墳と極めて類似した立地状況が窺える。ちなみに，おまる塚古墳の南側裾部の地山レベルは，4.7～4.75m であった。[5]

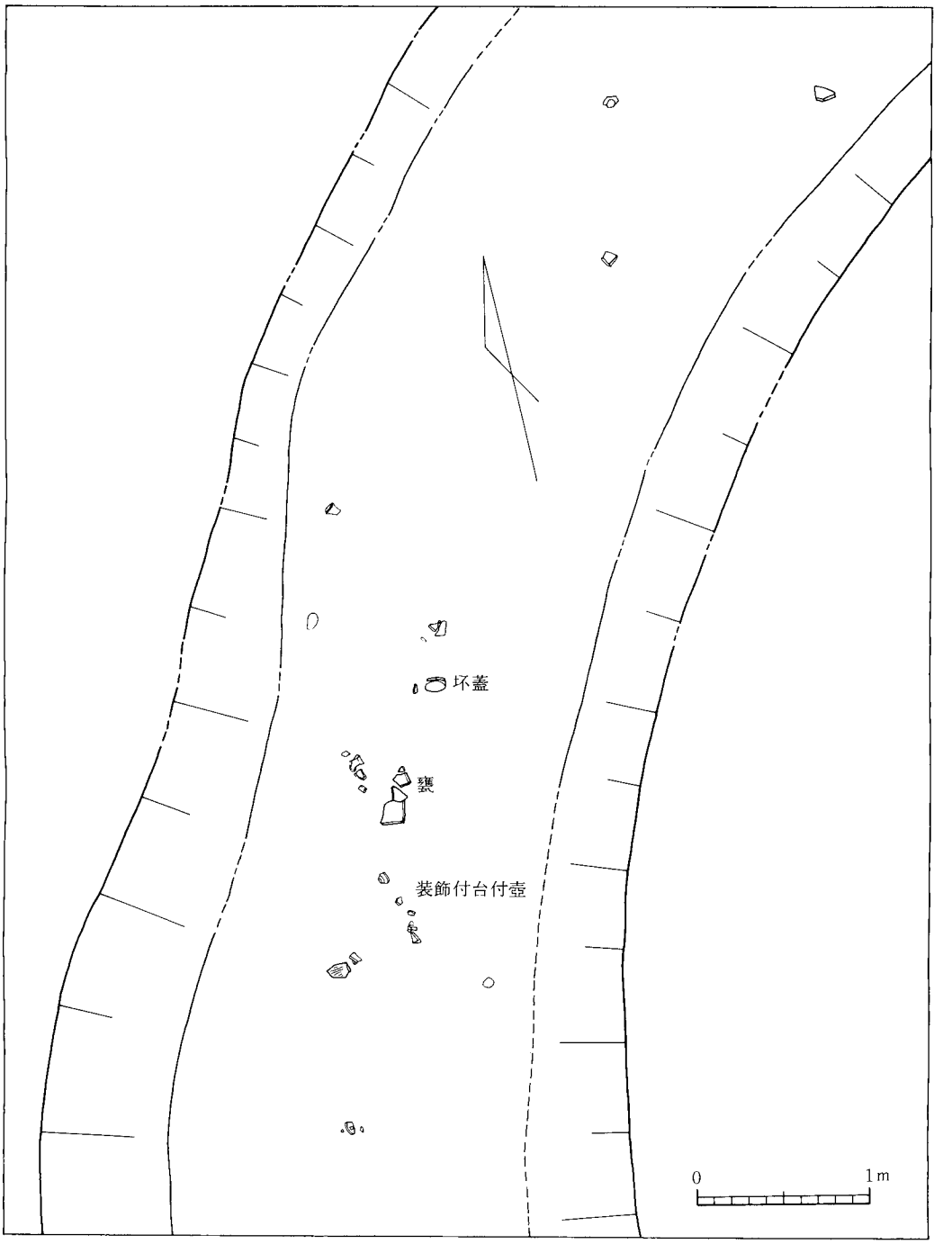
周溝　調査範囲の制約から約５分の２程度検出したにすぎない。一部は平安後期以降の溝や土壙によって切られており，旧状を失っている部分も少なくない。とくに，南北に直進する平安後期の第10号溝によって切られた周溝西側の内縁付近が著しい。外郭線が正確に捉えられるのは，正円に近い形状を示す北側内縁と，西南側の外縁である。これらの点から復元すると，本墳は周溝外縁で24～26mを測る円墳と推定されるが断定はできない。周溝の断面は，溝底面が広く，立ちあがりの緩やかなU字状を呈し，他の周溝とは形状を異にする。検出地山面からの上幅は，北で約2.8m，東で約3.2m，南で約4.1mをそれぞれ測り，上幅の広い南の外縁肩部は二段掘りとなっている。深さは，北で約30cm，西で約55～60cm，南で約45cmを測る。周溝覆土は，最下層に地山ブロックを含む黒灰色土が約10～20cm堆積し，その上層には黒色弱粘質土と黒色土がレンズ状に自然堆積し，月影期の土器などが流れ込んでいた。下層の黒灰色土は，内縁肩部付近から溝底中央に向って流れこんでおり，封土の流土と考えられるものであった。下層上面からは，破砕化した須恵器が北西から西側にかけての約３ｍの範囲に散乱して出土しており，本来は，墳丘部にあって葬送儀礼に使われ，意識的に細片化されたものが後世に封土と共に流入したものと考えられた。さらに，平安後期の第10号溝構築の際に原位置を失ったものも少なくない。

覆土下層出土土器（第22図，図版第八）

須恵器装飾付台付壺（第22図１）　全体形は不明であるが，得られた十数点の小片を復元してみると，総器高54.7cm，脚台部高27.8cm，壺部口縁径16.4cm，脚台端部径23cm，脚台取付部径11.6cmをそれぞれ測ると推定される。壺の肩部には子壺が取付けられ，おそらく４個配されたと推定される。子壺の間には，３ヶ所の脚らしきものが接合されており，人物もしくは動物等の形象物を附したと想われる形跡が認められた。子壺の全体形は不明であるが，残存する胴部の最大径は 3.7cmを測り，外面下部には接合の際に生じたと想われる指頭圧痕が認められる。壺の口頸部は，朝顔状に外反し，口縁端部付近でわずかに水平方向へ屈曲して口縁部に至る。口縁部内面



第20図　第7号墳実測図



第21図　第７号墳周溝西側土器出土状況

と口縁端部には浅い凹線がある。口頸部文様帯は，口縁端部直下に配された１条の凹線と，３条１組の凹線で区画された３段に細かい波状文を描いたものである。肩部は，口頸基部より外下方にのびる。脚台と壺部の接合部は器壁が厚く，外面には４条の凹線からつくりだされた３条の凸線帯がめぐっている。脚台部は，壺部からほぼ垂下した接合部から外反して下方へのび，脚端付

近で内湾するように外反して脚端部に至る。文様帯は，2条1組からなる凹線によって区画された4段からなり，粗い波状文が描かれている。また，その上3段には三角形の透穴が設けられている。胎土は良好であるが，焼成は口縁部から脚部中位まで比較的堅緻であるのに対し，脚端部付近はやや軟質な感を与える。色調は焼成に対応して，外面は脚部中位を境に黒灰色から灰白色に変化し，内面は黒灰色を呈している。

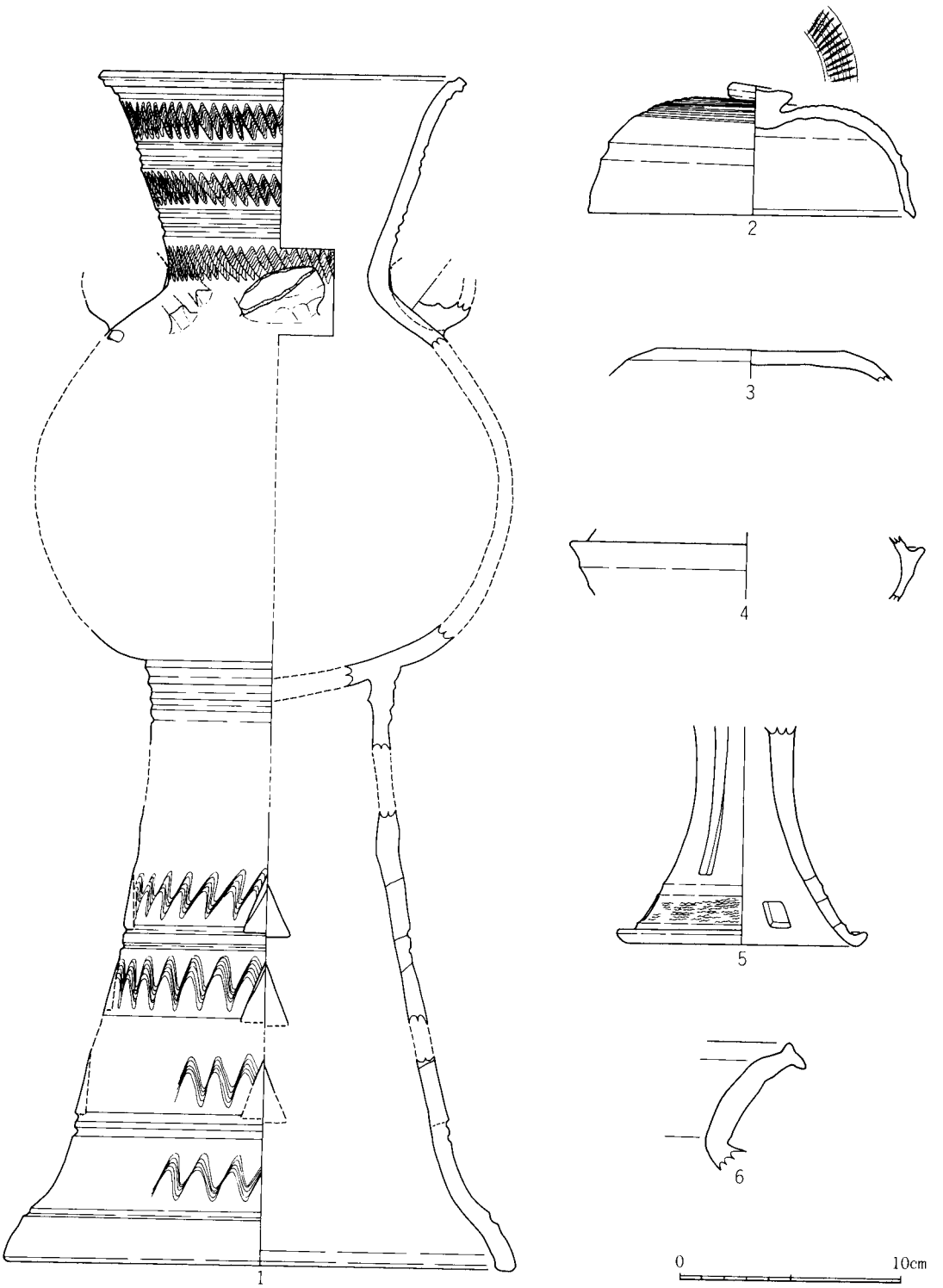
本例は，広口壺の肩部に装飾を施して脚台を取付けたものであり，岸本雅敏氏の装飾付須恵器の分類[6]ではⅢ類の範疇に入る。県下では，七尾市温井(ぬくい)15号墳[7]より蓋付壺に4個の子壺を取付けたものが出土しているが，本例とは壺の形態と装飾のモチーフが異なっている。

須恵器蓋（第22図2・3）　2は，ほぼ完形で高坏の蓋と考えられるものである。口径14.8cm，器高5.1cmを測る。口縁部は内湾しながら下方にひらき，端部付近で短かく外反している。端部内面には外斜する稜がみられる。天井部はやや丸味を帯び，3分の2には削りの後カキ目で器面調整されている。その上には，中央部にある擬宝珠様つまみ（つまみ径 2.8cm）をめぐるように櫛描きの列点文が施されている。口縁部と天井部の境をなす稜（稜径13.3cm）はややにぶく，1条のやや太い凹線をめぐらせて低い稜を浮きたたせている。胎土は1mm程度の砂粒を若干含み，焼成は堅緻である。色調は灰色を呈し，口縁部の一部に緑色の自然釉をみる。3は，坏蓋である。平坦な天井部から内湾して下るもので，外面は逆時計まわりのヘラ削りがなされている。天井部内面には，削りの際に口縁端部を保護する当て道具の痕跡とみられる円弧文がみられる。胎土は良好で，焼成も堅緻である。色調は内外面灰白色を呈する。

須恵器坏（第22図4）　口縁部と底部を欠く。受部は径16.2cmを測り，外上方に短くのびて端部の稜があまく，たちあがりの内傾度が大きい。内外面ナデ調整されている。胎土は1～1.5mm大の砂粒を含み，焼成は良好である。色調は内外面灰白色を呈する。

須恵器無蓋高坏（第22図5）　底径10.4cm，残存脚高10cmを測る。細く長い脚部は裾部にむかってラッパ状にひらき，端部は外上方に屈曲させて短くはね上げている。脚部には細長い長方形の透しを1段3方につけている。裾部付近には，1条の浅い凹線を上下に配して約 1.5cmの区画をつくりだし，その区画内には細い櫛状具によるややくずれた波状文が薄く描かれている。また，その文様帯には1cm×1.5cmの小さな透しが3方につけられている。胎土は微砂粒を若干含み，焼成は堅緻である。色調は，外面は暗灰色を呈し内面は灰色である。

須恵器甕形土器（第22図6，第23図1）　6は口径が20cm前後になると推定される中型品である。口頸基部から短かく外反して立ちあがり，口縁端部付近で外反度を増して口縁部に至る。内外面ナデ調整され，頸部は無文である。胎土には1～2mm大の砂粒を含み，焼成は堅緻である。色調は内外面暗灰色を呈し，内面には自然釉の付着がみられる。第23図1の甕は，口径36cmを測る大型品である。口頸基部より緩やかに外反して立ちあがり，端部付近でさらに短く外反する端部はやや丸味を有し，下端付近に1条の凹線をめぐらせている。頸部には3条1組からなる凹線によってつくられた2段の凸線を2区画配し，区画内には波状文が描かれている。上段の凸線は断面三角形を呈して鋭く，波状文も2条あって古相を帯びるが，波状文そのものは粗雑なものである。



第22図　第７号墳周溝覆土下層出土土器

下段の凸線は鈍く,凹線によってわずかに浮きたたせているにすぎない。肩部はなだらかに下る。外面は平行タタキの後カキ目を施し，内面には円弧文がみられる。胎土，焼成ともに良好で，色調は灰色を呈する。

上層出土土器（第23図２～６）

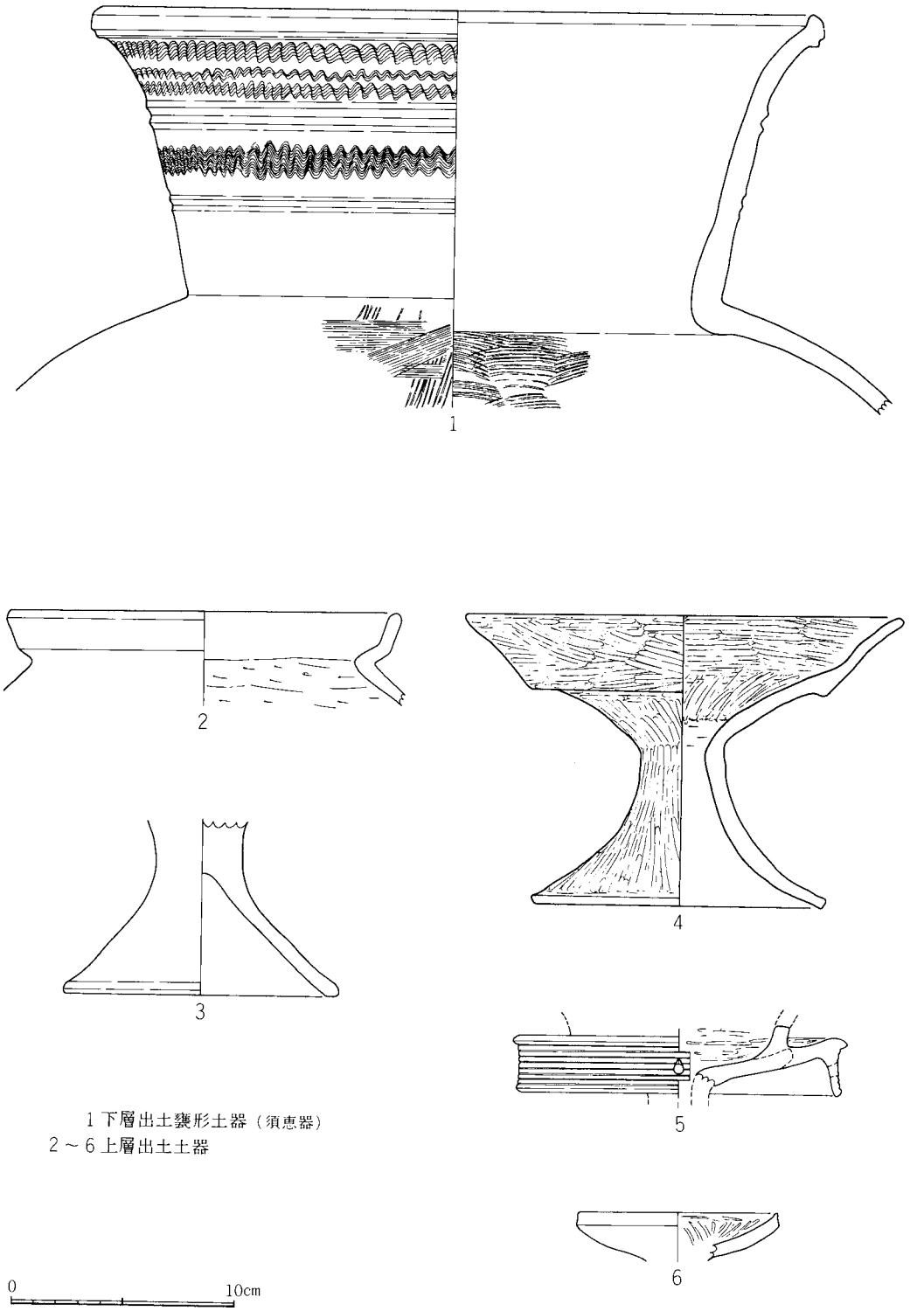
図化し得たものは第23図２～６の５点である。２は口径17.4cmを測る有段口縁系の甕形土器で，器面は摩耗が著しく，肩部内面にヘラ削り痕を看取し得るのみであるが，口縁部は内外面ともに(横)ナデ調整を施しているようである。頸部内面の屈曲が強く，口端部は厚く丸みをもっている。色調は橙褐色，胎土は砂粒を多く含み，良好とはいえないが，焼成は比較的良好である。

３は脚部径12.2cmを測る高坏形土器の脚部片である。器面は摩耗のために，調整痕は観察し得ない。色調は橙褐色，胎土は砂粒を多く含み，焼成はややあまい。

４は外反する脚部と，同じく外反する有段の受部をもつ器台形土器である。受部径19.4cm，脚部径12.7cm，器高13.1cmをそれぞれ測る。器面は脚内面をナデ調整している（上位には一次調整のヘラ削り痕を残している）ほかは，丁寧なヘラ研磨で仕上げている。色調は淡赤褐色，胎土中に１～1.5mm大の砂粒を少量含む。焼成は良好である。４は受部の屈曲が明瞭で，受端部が短いこのタイプにあっては同部がよく発達し，外傾度も大きい。類例として，金沢市近岡遺跡[8]，同南新保三枚田遺跡[9]，同北安江遺跡[10]出土器台があげられることから，月影Ⅱ式土器と考えられるが，先の類例と比較すると，脚部はやや大きく受部は逆に小さい。また器高が若干低いという特徴をもっている。

５は有段の脚部と，外上方へ大きく広がる受部（受端部には垂下帯が貼付される）をもつ器台形土器に鉢形土器が結合したと考えられるもので，いわゆる装飾器台であるが，ここでは結合器台（器台結合鉢)と呼称したい[11]。受部片ではあるが，５も体部には雨滴（涙滴）形透穴をもつものと思われる。垂下帯の外面には擬凹線文(８条)を施し，４mm×６mmの涙滴形透穴(正立形のみ，内面では円形，現存１個)が穿たれている。受部径15cmを測り，色調は黄橙褐色，胎土は良好で砂粒はほとんど認められない。焼成も良好である。結合器台は，月影Ⅱ式土器を代表する形式のひとつである。後続する古府クルビ期（古墳時代前期）には，残存形態は残るとしても，定形的な結合器台は姿を消すと考えられる。また，先行する月影Ⅰ期に比定されるべき結合器台は，松任市竹松遺跡出土品[12]が想定されてはいるものの，伴出土器が不明瞭であるために，確証を欠く。いずれにしても，定形的な結合器台は，時期的にはほぼ月影Ⅱ期に限定して大過ないと思われる。受部径（15cm）もほぼ標準的な法量であることから，５は４と同時期（月影Ⅱ期）の所産と考えられる。

６は受部径 8.8cmを測る小型器台である。受部はゆるやかに内湾し，比較的浅く，端部はほぼ垂直で（やや内屈する）かつ明瞭な面をもち，上端はかすかではあるが，はねあげ状の（ないしはつまみあげたような）稜をつくりだしている。色調は黄橙色，胎土は良好で砂粒はほとんど含まず，焼成も良好である。小型器台は，月影Ⅱ期から出現するものである[13]。受部が内湾し，受端部に面をもつものは，金沢市南新保D遺跡[14]，同近岡遺跡[15]，同二口六丁遺跡[16]などで出土している。古府クルビ期以降のものは，受部径が比較的小さいわりに，内湾度が大きく，受端部の面も不明瞭とな



１下層出土甕形土器（須恵器）
２～６上層出土土器

第23図　第７号墳周溝覆土出土土器

ることから，6は月影Ⅱ式土器の範疇で捉えられるものと考える。

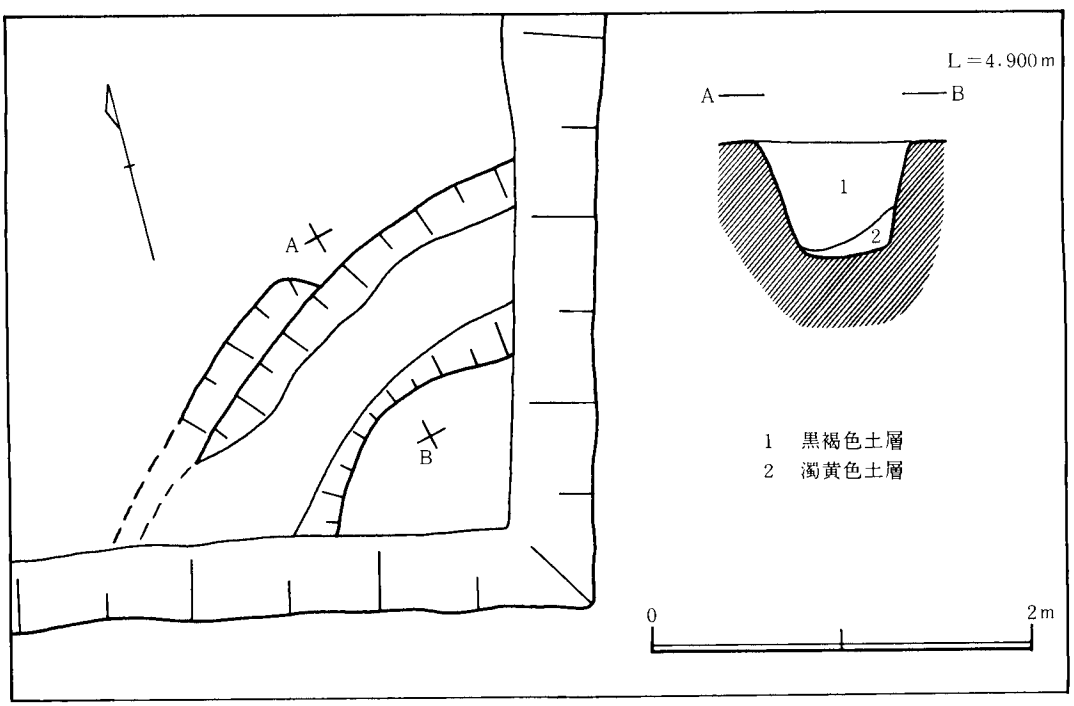
小　結

本墳は，北塚古墳群中でもおまる塚古墳に匹敵する規模を有するものと考えられた。また出土品においては県下でも類例の少ない装飾付台付壺が特筆され，本墳が古墳群のなかでも優位な存在であったことを想起させるものであった。

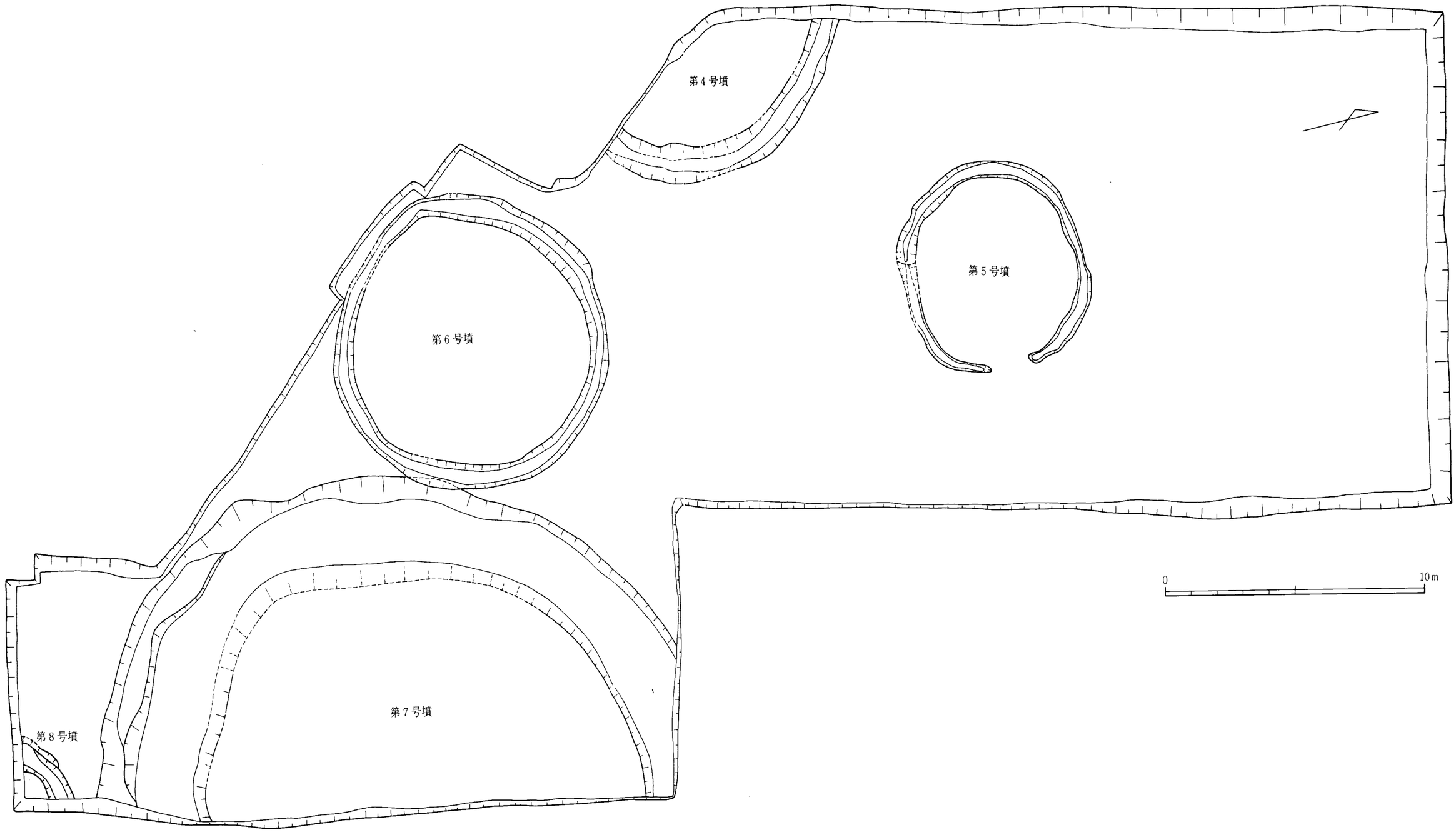
さて，本墳周溝下層覆土より出土した須恵器は，本墳はもとより古墳相互の時期を知るうえで貴重な資料を提供している。第22図2の蓋や同図4の坏にみられるように器形は大型化し，稜線も比較的にぶくなっている。同図3の坏蓋の内面には円弧文が認められ，5の長脚1段透しの高坏の共伴も時期比定の指標となろう。第23図1の甕についても文様構成に古相を感じるが，波状文の粗雑さが看取できる。これらの特徴から，下層出土の一群の須恵器は，陶邑古窯跡群MT15併行におけるものであり，田辺編年[17]のⅡ期前半に相当する6世紀前半代のものであろう。

5　第8号墳

位置と形状等　7号墳の南約1mに位置する。全体形は不明であるが，弧状を呈する形状とU字状を呈する溝の掘方から考えて，古墳の周溝である可能性が高いと判断されたものである。本群中で普遍的な10m前後の規模のものであろう。周溝の上幅80cm，深さ60cmを測り，覆土は，下層に濁黄色土があり上層には黒褐色土があった。外縁部の一部は二段の立ち上がりをなしている。出土遺物には月影期とみられる土器の小片があった。



第24図　第8号墳実測図

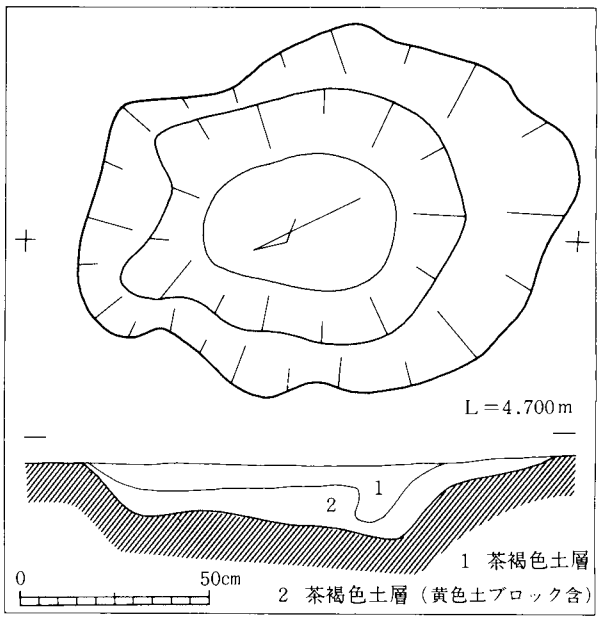


第25図　古墳配置図

第２節　土　壙

１　第１号土壙（第26図）

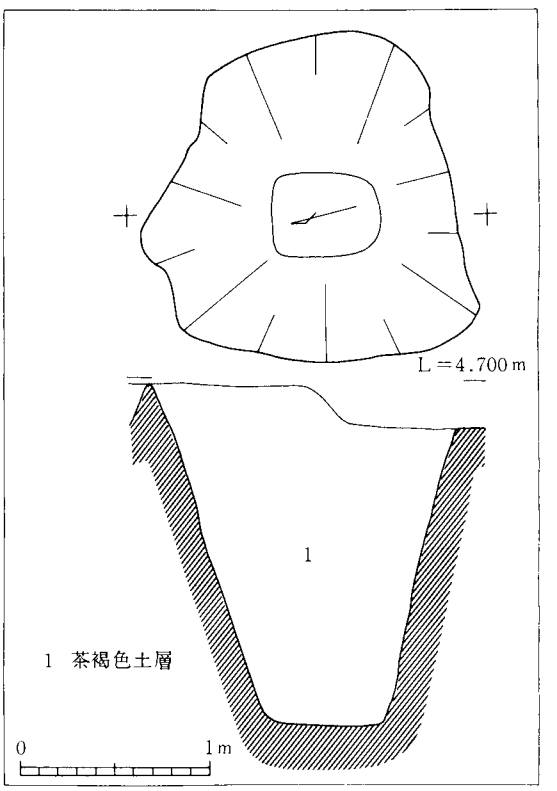
位置と形状等　第５号墳の北約６ｍの地形が北に傾斜するＥ10区に位置する。平面形は，南北軸1.34m，東西軸０.９ｍを測る不整形な楕円形を呈する。中央床面の深さは 0.2m を測るが，全体的に床面の凹凸が著しい。肩部は二段をなして緩やかに傾斜し，とくに南側が顕著である。覆土は上層に茶褐色土があって下層には地山ブロックを含む茶褐色土があった。出土遺物は認められず，時期は不明である。



第26図　第１号土壙実測図

２　第２号土壙（第27図，図版第九）

位置と形状等　第５号墳の南西側周溝の外縁の一部を切り，東西に走る第５号溝の中程に位置している。第５号溝との新旧関係については，両者の覆土が類似することから大きな時期差を隔たないものと想われるが，消極的な所見ではあるが，第５号溝覆土中に部分的に認められた焼土ブロックを含む濁黄色土が第２号土壙上で認められなかったことからすると，第５号溝がやや先行するとも考えられる。上幅は南北軸で 1.6m，東西軸で 1.7 m を測り，不整形な方形を呈する。壁面は急激に斜行し，深さは 1.8m を測る。覆土は茶褐色を呈する。

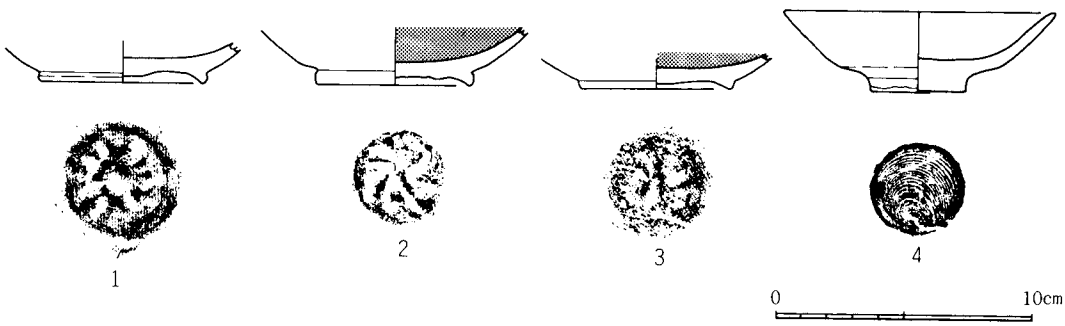


第27図　第２号土壙実測図

出土土器（第28図，図版第一五）

土師器坏　１～３は椀状に近い半球形の坏部がつくと考えられるもので，断面が三日月様ないし三角形を呈する高台を付したものである。そのうち，２・３は内面黒色土器であ

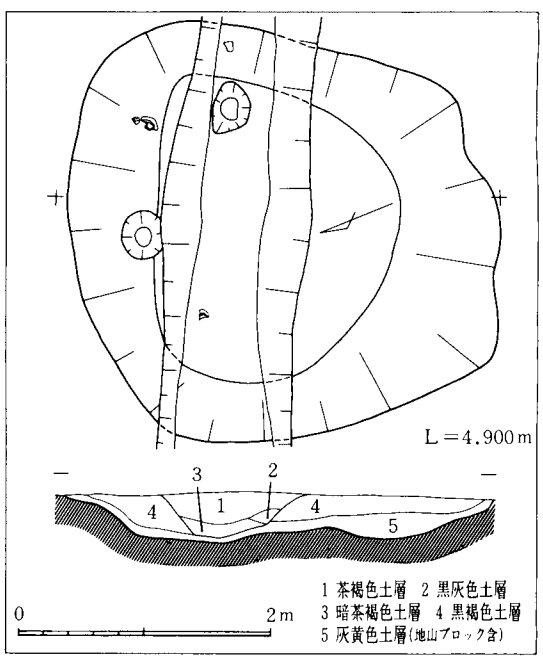
る。いずれも外面の大部分が摩耗しているが，横ナデの調整痕が認められる。また，底部外面には螺旋状ないし放射状に巡る点列が認められる。この点列は，高台周辺のナデ調整によって切られており，高台貼付以前の底部成形段階に係る痕跡とみられる。この種の底部外面の類例については，本遺跡第10次調査の出土品[18]や金沢市増泉遺跡[19]などにみられ，遠くは東北地方において「螺旋状点列」[20]と総称されるものに類するものであろう。2・3の内面はヘラ磨きが認められる。それぞれの底径は，1は6.4cm，2は6.2cm，3は5.2cmを測る。胎土は精選されている。4は，口径10.6cmの浅い椀状の体部に高台様のやや厚い底部を有するものである。底部径は3.6cm，厚さ1.4cmを測り，外面に糸切り痕を残す。内外面とも摩耗が著しく，調整は不明である。胎土は，精選されて砂粒を含まない。



第28図　第2号土壙出土土器

3　第3号土壙（第29図）

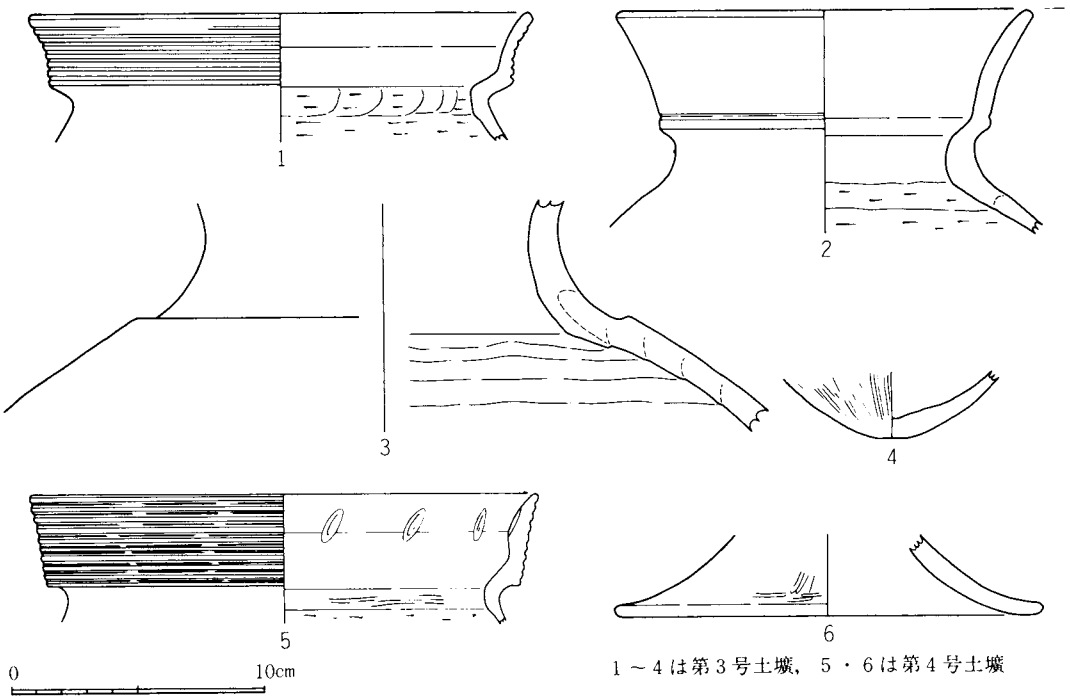
位置と形状等　調査区の中央東側にあり，第6号墳の北東約2mのところに位置する。また，同時期とみられる4号土壙とは約9mを隔てている。上幅は南北軸で3.4m，東西軸で3.2mを測り，南辺で短かくなる不整形な隅丸方形プランを有している。床面はわずかながら凹凸がみられ，深さ0.4m前後を測る。肩部は全体的に緩やかに斜行するが，北側が比較的強く南側が弱い。覆土は，下層の灰黄色土と上層の黒褐色土からなり，いずれも床面にむかって堆積している。土壙中央部は，中世鎌倉期の7号溝によって切られていることが土層より看取される。出土品は，傾斜の強い北側に偏在している。



第29図　第3号土壙実測図

出土土器（第30図，図版第一五）

弥生土器　１は外反する有段口縁の甕形土器である。口縁部には７条の擬凹線がめぐり，端部が丸味を有している。内面の屈曲部の稜はやや不明瞭である。外面頸部と口縁部内面は横ナデされ，内面頸部から肩部はヘラ削りされている。口径19.6cmを測る。２は外反する有段口縁の壺形土器である。口縁端部はやや不明瞭な面を有し，比較的明瞭な外面屈曲部の上位には１条の沈線がみられる。内面の屈曲部は凹み，頸部は比較的明瞭な面を有する。外面口縁から頸部にかけて横ナデされ，内面肩部はヘラ削りされている。口径16cmを測る。３は大型壺形土器の頸部から肩部の破片である。頸部はゆるくカーブし，肩部との境はわずかに張り出している。内外面の摩耗が著しく調整痕は不明である。４は，甕形土器の底部で，底径１cmを測る。



第30図　第３号・第４号土壙出土土器

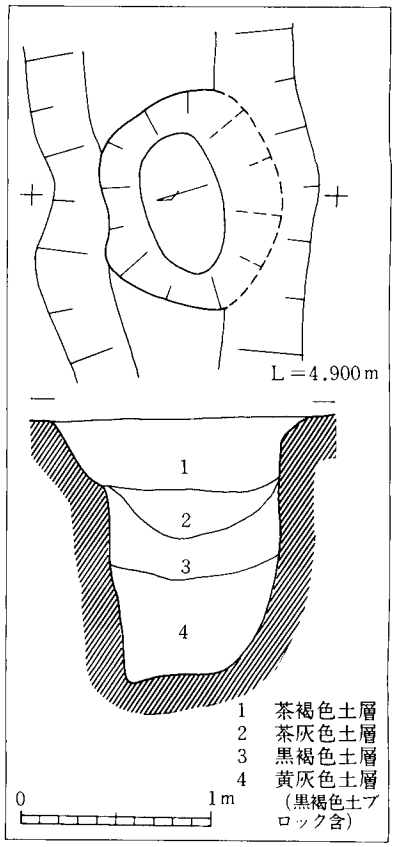
４　第４号土壙（第31図，図版第九）

位置と形状等　調査区の西側にあり，第４号墳の基底内にあたるＥ６区に位置する。上端は鎌倉時代の第７号溝によって切られているため，第７号溝の溝底面検出後に発見された。検出面での上端は，南北で0.9m，東西で1.1m を測る楕円形を呈し，深さは1.35m を測る。壙底面は地形の傾斜にそうように北に若干の傾斜を有している。壙底面からの立ち上がりは，南面がやや内湾気味であるが，全体的に垂直に立ち上がる円筒形を呈している。覆土は，上から茶灰色土，黒褐色土，黄灰色土が堆積している。下層の黄灰色土は，本質的には地山に類する濁土であり，それに黒褐色土のブロックを若干含むものであった。この下層の堆積土は，ほぼ平行堆積しており意

識的に埋め戻された可能性が考えられ，上二層がレンズ状の堆積を示すことから上からの流土が自然堆積したものと判断された。出土土器は中層の黒褐色土中より月影期の土器片が出土している。この種の土壙は，弥生終末期の丘陵もしくは台地上に立地する集落跡に伴うケースが多く，いわゆる円筒形土壙と呼称されるものに類するものである。その機能については，橋本澄夫氏によって多様な可能性が提起されている。(21)

出土土器（第30図5・6）

弥生土器　5は外反する有段口縁の甕形土器である。口縁帯には9条の擬凹線がめぐり，口唇部は細くなっている。外面の屈曲部の稜は比較的明瞭である。口縁部内面には指頭圧痕が認められ，屈曲部の稜は弱い。内面頸部には横ハケが施され，肩部はヘラ削りされている。口径19.8cmを測る。6は高坏ないし器台の脚部である。ラッパ状に外反する裾部にいたり，脚径16.6cmを測る。外面はヘラ磨きされ，内面は摩耗して調整痕は不明である。

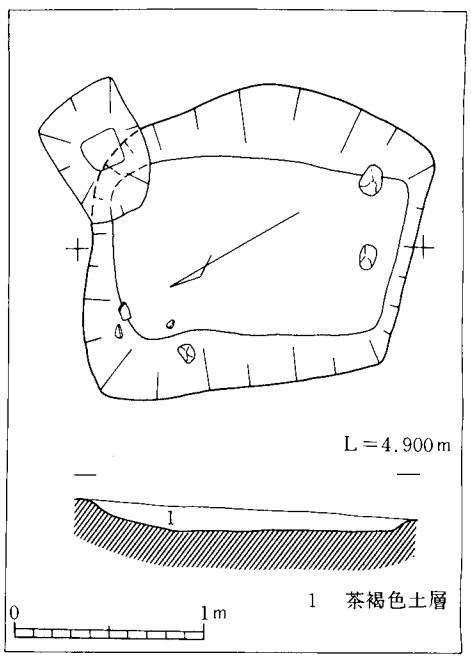


第31図　第4号土壙実測図

5　第5号土壙（第32図，図版第一〇）

位置と形状等　第6号墳周溝の南西側内縁部に接するD3～D4区にまたがって存在する。南には第10号土壙が接しており，西約2mには南北に走る第4号溝と第5号溝がある。南北軸が約1.8m，東西軸が約1.6mを測る不整形な長方形プランを呈する。主軸は北より約10°東にふれるところにある。肩部は，南北両辺が短かく傾斜するのに対し，東西両辺は比較的緩慢な傾斜を示している。壙底面は広くほぼ平坦である。南側の壙底面には15cm大の石が約40cm程の間隔をおいて配置されており，北西側肩部にも1個の石と土師質土器の小片がみられた。ゆがみのある北東側はピットによって切られて旧状を失っている。覆土は，茶褐色を呈する単純層で，土師質土器の他，青磁と加賀古陶の小片が出土している。土師質土器第Ⅱ期に(22)相当する時期であろう。

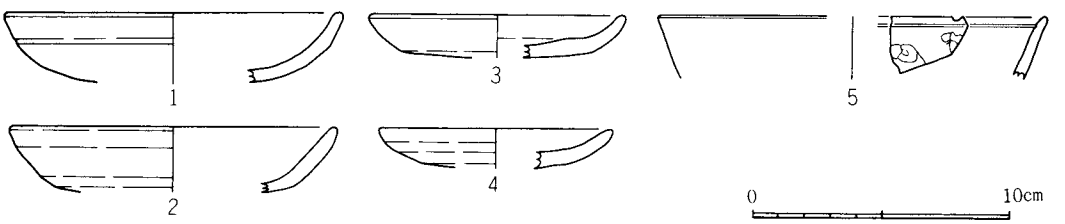
出土土器（第33図，図版第一六）



第32図　第5号土壙実測図

土師質土器　１～４は土師質の皿類である。１は口径13.2cmを測るやや大振りのもので，体部と底部の稜が不明瞭な浅い椀状を呈する。底部とその外周はヘラ削りで成形した後指ナデがなされ，その他は横ナデされている。色調は淡褐色を基調とし，部分的に灰褐色がみられる。２は，口径12.8cmを測り，平底を呈する底部は比較的薄く，やや厚みの外反する体部へとつづく。底部は，ヘラ削りの後指ナデされ，その他は横ナデである。色調は，黄橙褐色を基調とする。３は，口径10cmを測り，器高 1.7cmの身の低い厚味のある小皿である。底部外面は，ヘラ削りによる成形段階の凹凸が若干みられ，その後指ナデされている。その他は横ナデである。４は口径 9.2 cmを測る小皿で，底部から内湾気味に立ち上がる。口唇部は先細りしている。器高は 1.5 cmと低く，底部はやや厚味を有している。底部外面はヘラ削りの後指ナデされ，体部と内面は横ナデされている。これらの土師質土器は，良く水こし精選された胎土を有している。

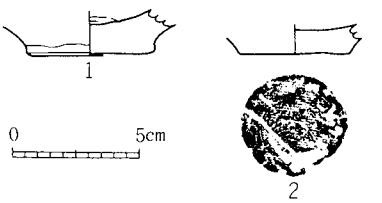
青磁　５は青磁碗の小片である。復元口径は約15cmを測る。内面には，口縁部に１条の片彫りの沈線がみられ，その下には花文らしき文様が認められる。いわゆる劃花文青磁碗とみられるもので，素地は比較的白く磁化しており，透明感のある釉は灰緑色を呈する。全体的に貫入が多く認められる。



第33図　第５号土壙出土土器

６　第６号土壙（第35図）

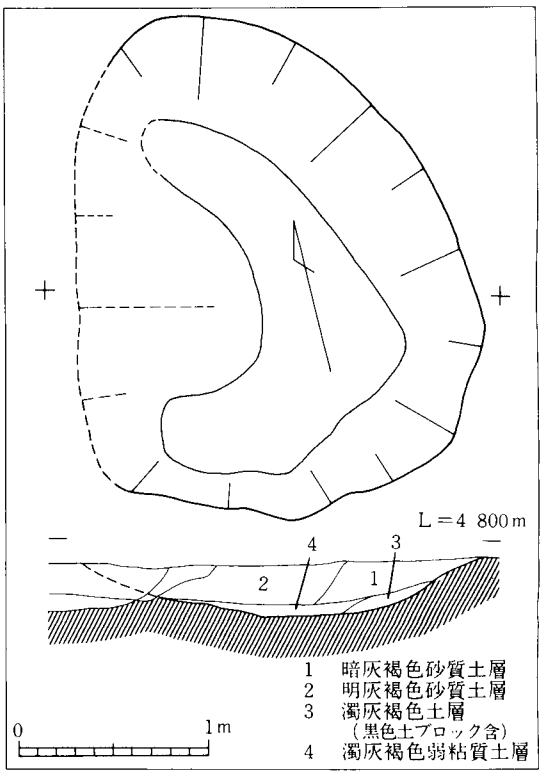
位置と形状等　第７号墳の南側周溝の内縁部を切って構築しており，大部分が第７号墳の基底面内に占地している。本土壙西側の大部分は第10号溝によって切られて旧状を失っている。長軸の南北では 2.7 m を測り，短軸の東西は復元すれば２m 前後になると推定された。上端の形状は，北側で除々に幅を減じる不整形な楕円形を呈する。壙底面は，西側の立ちあがりの斜面が大きく中央部に張り出しているため，幅が狭く東に偏った不整形なものとなっている。深さは，中央部で約50cmを測り，北側では30cmと浅くなっている。立ち上がりは全体的に緩やかで，張り出している西側が特に顕著である。覆土は，上層に暗灰褐色砂質土と明灰褐色砂質土があり，下層には東から傾斜する濁灰褐色土（黒色土ブロックを含む）と濁灰褐色弱粘質土が堆積している。出土品は極めて少なく確たる時期比定はできないが，平安後期を遡るものではないだろう。



第34図　第６号土壙出土土器

出土土器（第34図）

土師器底部　1は底径4.4cmを測る高台様の厚い底部である。裾部には若干の張り出しがみられ，大きく外反して体部へと立ちあがっている。外面の調整は摩耗のため不明であるが，内面はナデである。2は外底面に糸切り痕をとどめ，径4.2cmを測る。内外面は横ナデ調整が認められる。1・2とも黄橙褐色を呈し，胎土は水こし精選されてほとんど砂粒を含んでいない。この他，須恵器の甕の小片が出土している。



第35図　第6号土壙実測図

7　第7号土壙（第36図）

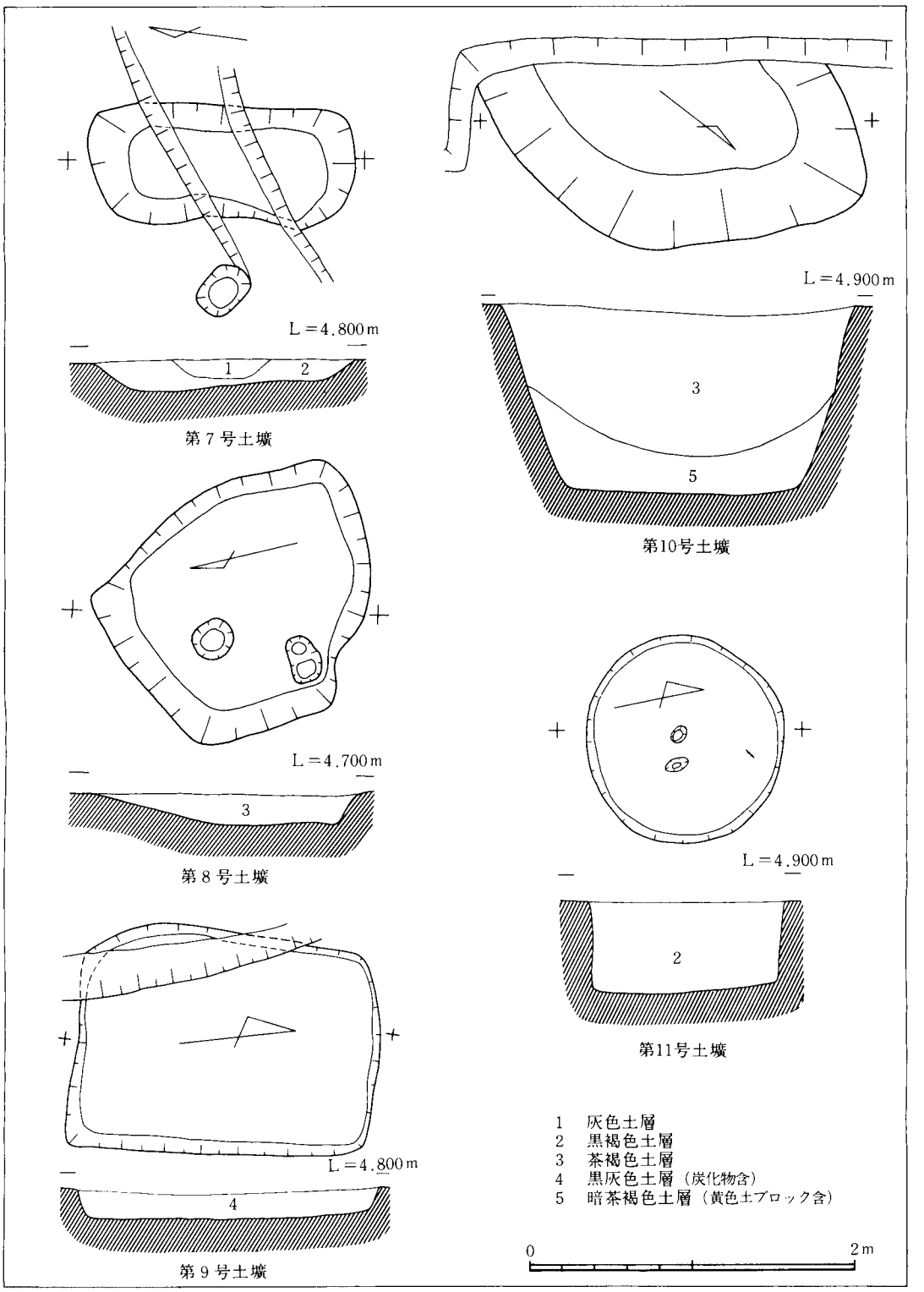
位置と形状等　調査区の南側A1区に位置する。第7号墳の周溝外縁の南約1mにある。南北1.65m，東西0.75mを測る長方形プランを呈し，主軸はほぼ南北にある。深さは約25cmで，壙底面は南から北へ若干の傾斜がみられる。立ちあがりは比較的緩やかであり，覆土は黒褐色を呈する。月影式土器に比定される有段口縁の甕形土器の小片が出土している。なお，本土壙は第14号溝によって上端の一部が切られている。

8　第8号土壙（第36図）

位置と形状等　第6号墳が占地する基底面にあたるC4区に位置する。周溝内縁の一部と第12号溝を切って構築されている。長軸の南北では1.7m，短軸の東西では1.5mを測り，南辺の上端が不整形な方形プランを呈する。深さは20cmを測る。壙底面には二ヶ所のピットが存在するが本土壙にともなうものではない。立ちあがりは，南側がやや直線的であるのに対し，北側の傾斜が著しい。覆土は茶褐色を呈し，土師質土器の小片が出土している。

9　第9号土壙（第36図）

位置と形状等　第7号墳の基底内にあたるA4区に構築された土壙で，南北軸1.9m，東西軸1.4mを測る長方形プランを呈する。深さは約15cmと浅く，立ちあがりはやや直線的である。覆土は炭化物を含む黒灰色土を基調とし，黄褐色を呈する地山ブロックが混合しており，埋めもどされたものと考えられた。近世火葬墓に類する様相を呈するが，断定できる出土品はない。上端の一部は第9号溝によって切られている。



第36図　第７号～第11号土壙実測図

10　第10号土壙（第36図）

位置と形状等　第6号墳の周溝南側の一部を切って構築された大型の土壙である。調査区の制約から約2分の1を検出したにとどまった。検出された部分での最も長い上幅は 2.2m を測り，隅丸方形プランと想定される。深さは 1.1m を測り，覆土には茶褐色土と暗茶褐色土がレンズ状に堆積し，珠洲焼の擂鉢の小片が出土している。

11　第11号土壙（第36図，図版第一〇）

位置と形状等　第4号墳周溝外縁に近接する調査区の西側に位置している。上端径 1.2m，深さ0.5m を測る円筒形土壙であり，ほぼ垂直に近い立ちあがりをみせている。同タイプの第4号土壙とは北西 2.7m を隔てている。壙底面には二つのピットが認められた。覆土は黒褐色を呈し，月影期に比定される甕形土器の小片が出土している。

12　小　結

検出した11基の土壙のうち，確たる時期を知り得るものは少ない。古いものでは弥生時代終末期の月影期に比定される第3号土壙と第4号土壙があった。いずれも，出土土器には外傾・外反の著しい有段口縁の甕形土器を伴っており，月影式でも新しい時期の型式（月影Ⅱ式）に比定されると考えられるものであった。第4号土壙については，円筒形を呈する形状と人為的に埋めもどされていることから，弥生時代終末期の丘陵や台地上の集落跡に多く検出されるいわゆる円筒形土壙に類するものであった。先述したように，その機能については貯蔵穴，墳墓，水溜などが考えられており，結論を得ていない。ただ本例は，壙底面の検出段階で若干の湧水があり，当時は湧水層まで達していた可能性が考えられた。しかし，同時期で同タイプとみられる第11号土壙は，壙底面や壁が丁寧に仕上げられ，深さは比較的浅く湧水層にまで達するものではない。

平安時代後期と考えられる土壙については，第2号・第3号土壙があった。出土土器については，椀状を呈する土師器坏が主で，無台と台付の両者があった。無台付のほとんどは底面に明瞭な糸切り痕をとどめ，体部内外面は横ナデのものであった。なかには，第2号土壙でみた高台様の厚い底部を有する無台坏（第28図4）があり，加賀市田尻シンペイダン遺跡出土土器[23]の系譜に連なるものとみられる。高台坏については，器高は低く断面が三角形ないし三日月様をなす萎縮した高台を有するものである。また，先述したように底部外面には東北地方で「螺旋状点列」と総称される成形痕がみられた。第2号土壙出土土器に代表されるこの種の土器群は，三浦上層期と田尻シンペイダン遺跡出土品の間に位置付けられるものであろう。

中世の土壙については，第5号土壙があった。土師質土器第Ⅱ期に比定される小皿とともに劃花文青磁碗が出土し，鎌倉時代後期頃に比定されるものであった。

第３節　溝状遺構

1　近世・近代溝（第37・38図，図版第一一）

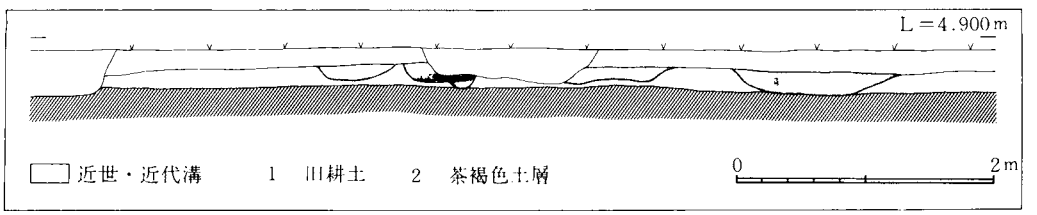
規模と形状等　約20cmの旧耕土下に灰色土を覆土とする近世・近代溝がみられた。第38図に示した第１・２・６・９・11・13号溝である。すべて地形の傾斜にそって南から北への流路を示す。最も大きいものは上幅1.6m，深さ10cmを測る第１号溝であり，その他は上幅が50～60cm，深さが15～20cm程度の細い溝である。断面形は緩やかなU字状を呈するものが多い。これらの細い溝は，調査区の東方に偏在し，東西幅約５mの狭い間隔の中で平行して走っており，切り合いも認められないことから同時存在して利用されていたか，短期間のうちに付け替えがなされたものと考えられた。その用途については明言できないが，おそらく水田耕作に伴う排水路などが考えられる。時期比定については，現表土下の旧耕土が明治末年以降の耕地整理にかかるものであることから，それ以前に遡る近世・近代のものと判断した。

出土遺物（第38図）

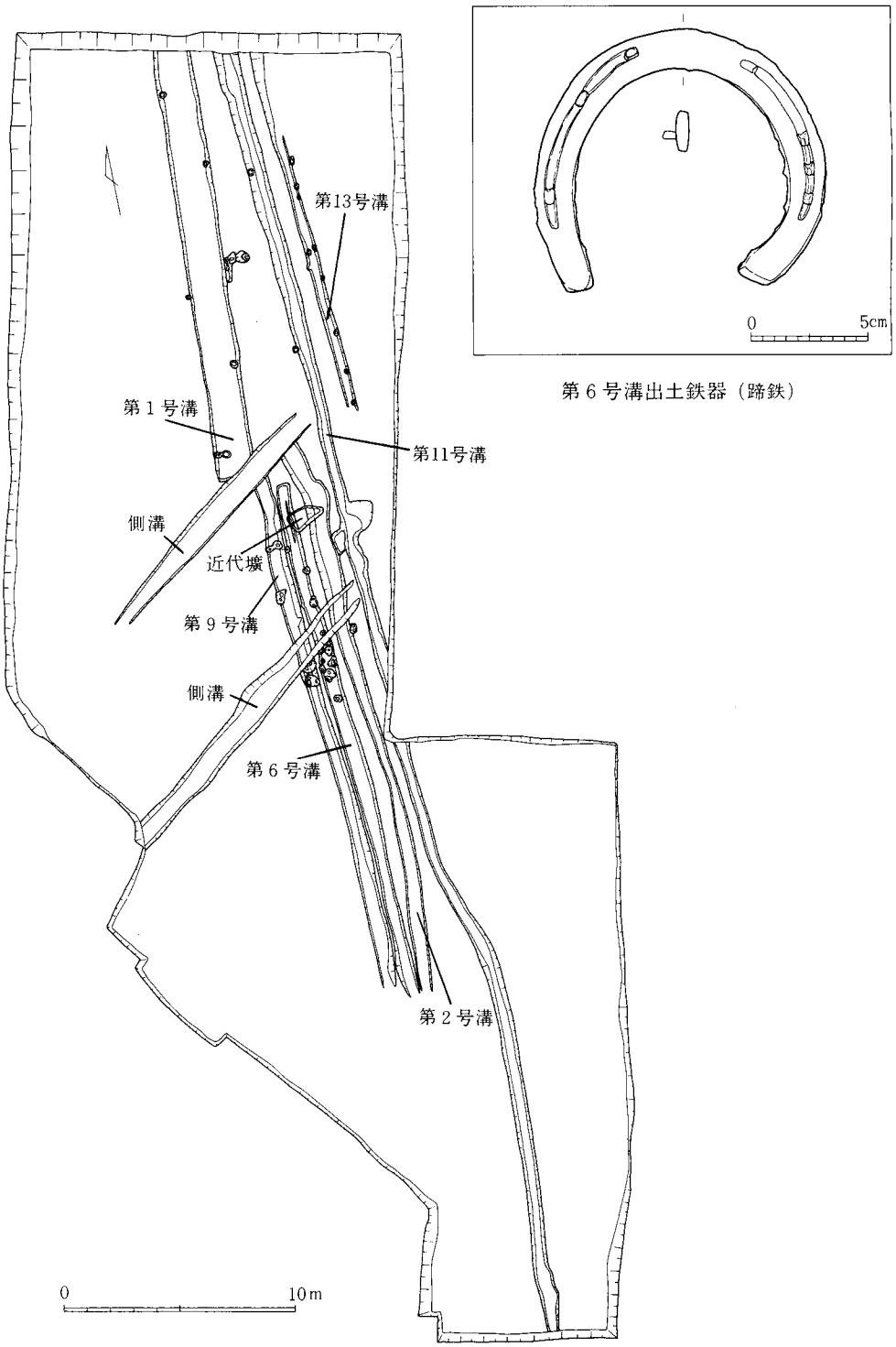
蹄鉄　第６号溝から出土した。長円形を呈するが，右方にやや歪みがある。外縁上方から後方端の長径が11.5cmを測る。外縁と内縁の幅は 1.5cm前後で，後方にいくに従ってやや細くなっている。厚さは約６mmである。両側中央部には幅約５mmの細い溝状の凹線があり，その中には装着する釘状の突出部が数個認められる。

2　第５号溝（第39図，図版第一一）

位置と形状等　第４号墳と第５号墳の間を東西に走る平安後期の溝である。第５号墳の周溝南側の一部を切って構築し，地形的には南から北へ傾斜しようとするところにあり，あたかも微高地の北を画すように位置している。上幅 1.5m，深さ 50 cm を測り，溝底レベルは東西の両端で比較すると約15cm西の方が低くなっている。それは，西から東に向って低くなる地形傾斜に逆行する流路を示すものである。しかしながら，溝底面近くの覆土には砂層や還元土の堆積が認められず，常に水を湛えるような状況でなかったことを示している。溝底面の幅は65cmと広く，断面形は逆台形に近い。覆土は，上層の茶褐色土と下層の暗茶褐色土を基本とするが，中央部から西側の約２mにかけて上下層の間に焼土痕を含む濁黄色土が介在しており，人為的に埋められたと



第37図　近世・近代溝断面図



第６号溝出土鉄器（蹄鉄）

第38図　近世・近代溝平面図と出土遺物

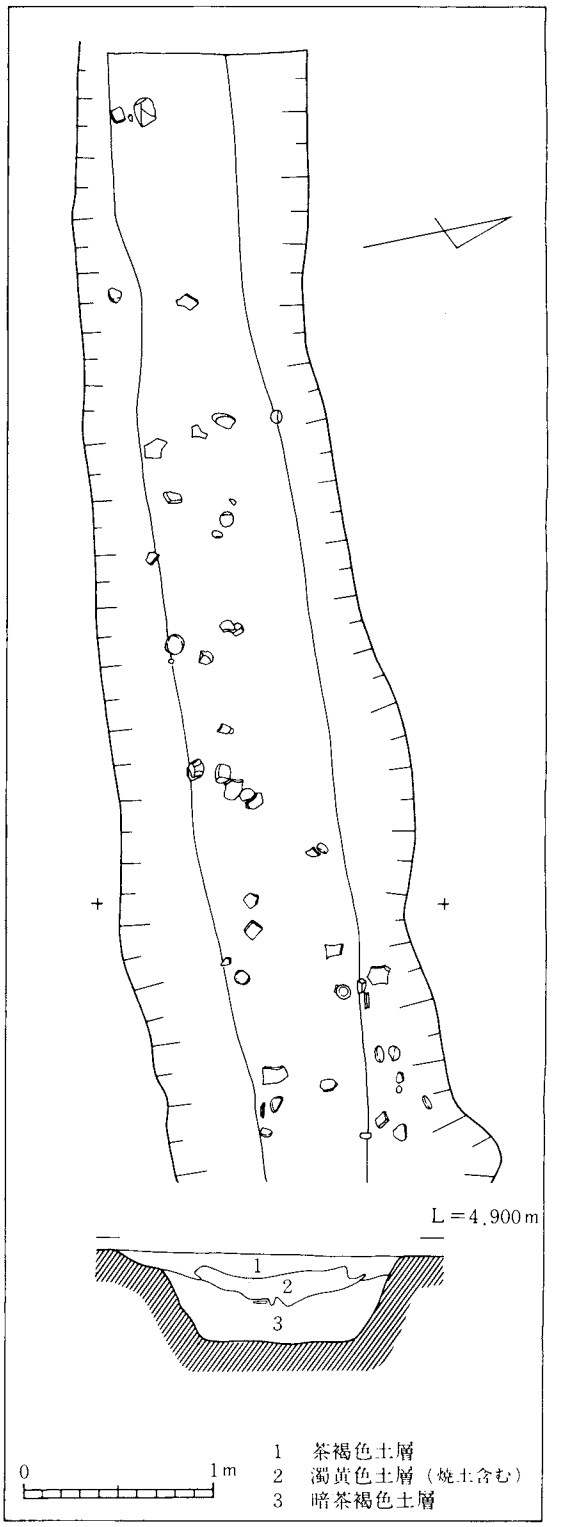
考えられた。出土土器もその周辺に集中している。本溝の東側上端は近世・近代溝によって切られており，中央部では，同時期もしくは若干新しい時期の所産と考えられた第２号土壙が重複している。

出土土器（第40図１～10，図版第一六・一七）

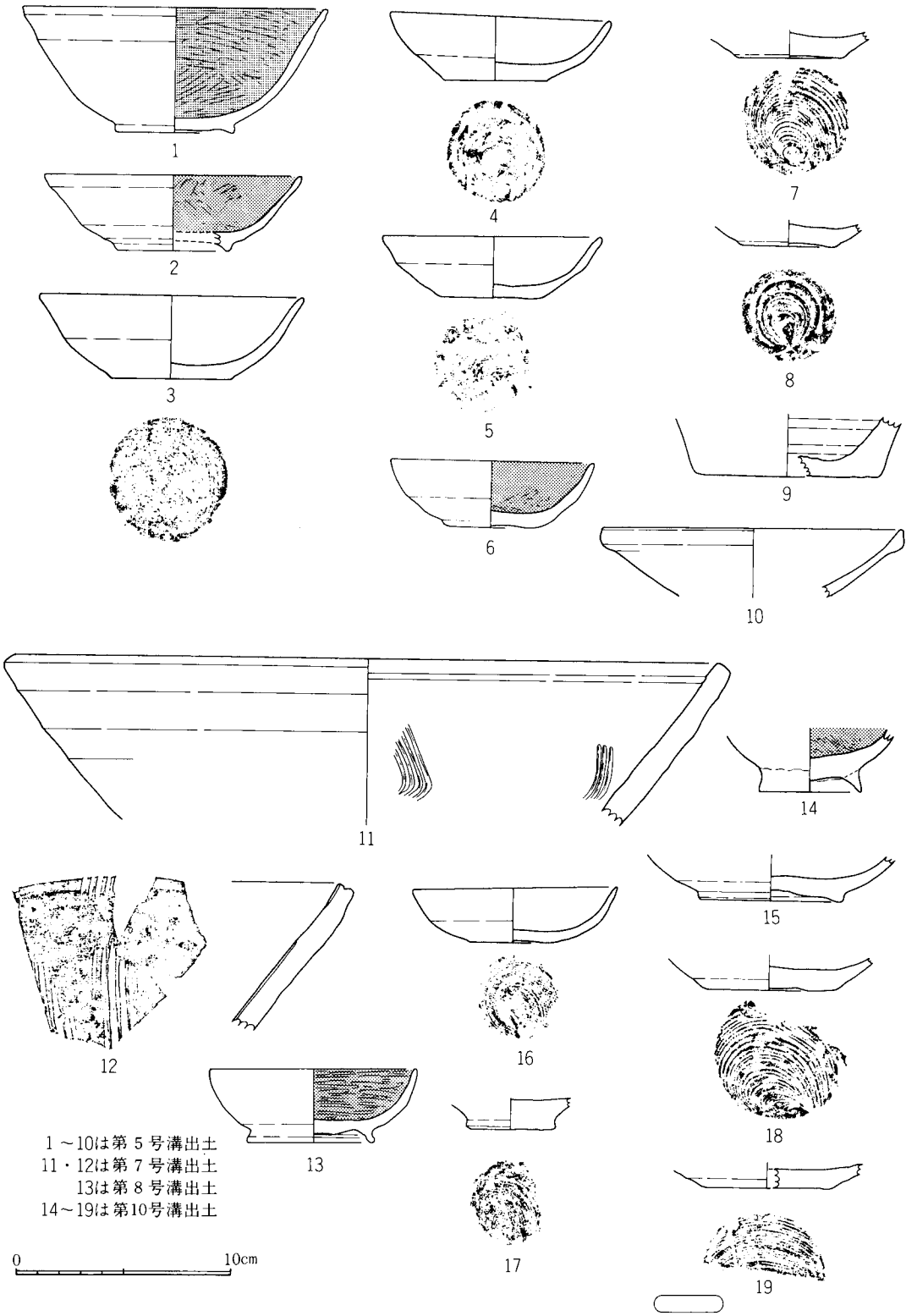
土師器有台坏　１・２は内面黒色の有台坏である。１は，口径14.6cm，器高 5.8cmを測る椀状を呈する身の深い坏部に断面三角形を呈する高台を付したものである。口縁付近の内面は斜位方向にヘラ磨きされ，内底面とその付近は不定方向のヘラ磨きが施されている。外面は横ナデされている。２は，口径12cm，器高 3.5cmを測るやや小振りの有台坏である。器厚は薄く，口縁先端部を細くまとめている。内面はヘラ磨きされ，外面は横ナデされている。胎土は，１・２とも砂粒を全く含まず精選されている。

土師器無台坏　３～８の無台坏は，６を除いてすべて底部外面に糸切り痕を残している。３は口径12.4cm，器高 3.9cmを測り，底部は5.7 cmの平底を呈する。内外面とも横ナデされ，特に外面口縁付近の横ナデがやや強く，体部に弱い稜が認められる。４～６は，３の普通サイズに対してやや小振りの坏である。４は，口径10.4cm，器高３cmを測り，４は，口径10.2cm，器高 2.9cmを測る。両者とも内外面は横ナデされ，特に外面の横ナデで器面に若干の起伏がみられる。６は，口径 9.6cm，器高３cmを測る内面黒色の坏である。体部はやや丸味をもつ浅い椀状を呈する。底部は中央部がやや凹む平底を呈する。

須恵器瓶底部　９は底径 8.4cmを測るもので，外反して直線的に立ちあがる瓶の底部と考えられる。色調は暗灰色を呈し，内外とも



第39図　第５号溝土器出土状況



第40図　溝状遺構出土土器　　アミは黒色

炭化物が付着している。焼成は均質ではなく，やや不良である。胎土は良好である。

白磁碗　10は復元口径13.8cmを測る白磁碗の口縁である。覆土上層上面からの出土で，本溝に伴うかは問題がある。体部はやや直線的で口縁部に小さい玉縁を持っている。器壁は薄く，釉は灰色を帯びた白色を呈し，口縁外面には釉のむらがみられる。胎土は，白色で堅緻であり，若干の粗い気泡が含まれている。この種の白磁碗は，横田賢次郎・森田勉氏の分類[24]によれば第Ⅲ類に比定されるものと考えられる。

3　第７号溝（図版第一一）

位置と形状等　調査区の中央部に位置する鎌倉時代の溝である。西は第４号墳を切り，東では第３号土壙を切り，地形の傾斜にそって西から東へ流れる東西溝である。上幅は一様ではないが1.3 m 前後を測り，深さは約30cmである。断面形は，緩やかに立ちあがる逆台形を呈し，覆土は茶褐色の単純層であり，出土品は少ない。

出土土器（第40図11・12，図版第一八）

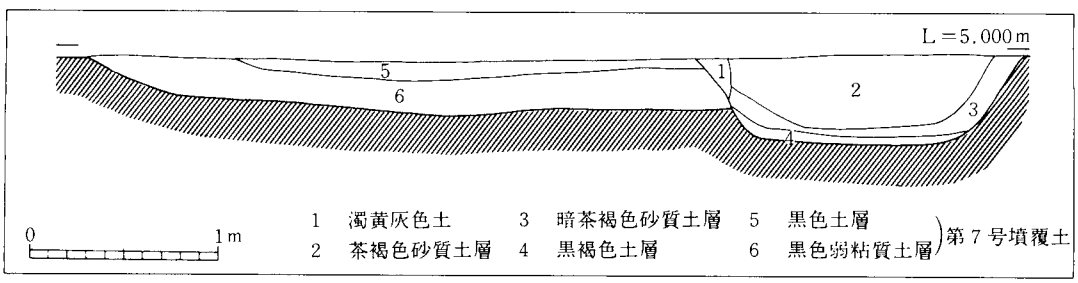
擂鉢　11は推定口径32.8cmを測り，体部から口縁は直線的に立ちあがる。口縁端部は外剝ぎに面取りされ，内面には７条からなる曲線の卸し目が施されている。外面の色調は暗灰色を基調とするが，胎土は淡い緑灰色を呈し軟質である。12は，直線的に立ちあがる体部に，口縁端部は中央を凹ませて外剝ぎに面取りしたものである。内面には５条の粗い卸し目がある。色調は濁黄褐色を呈する。いずれも加賀古陶の製品と考えられ，上野編年[25]の第Ⅱ期から第Ⅲ期の鎌倉時代に比定できよう。

4　第８号溝

位置と形状等　第７号溝の南約２ｍにあり，第６号墳の北側周溝外縁と接するところに位置する。地形の傾斜にそって西から東へ流れる平安後期の溝である。上幅 1.3m，深さ 40cmを測り，垂直に近い立ちあがりを示す。

出土土器（第40図３，図版第一八）

土師器有台椀　３は口径 9.6cm，器高 3.5cmを測る内面黒色の椀である。体部はやや内湾気味に立ちあがり，口縁端部は先細りしている。内面はヘラ磨きされ，外面は横ナデである。



第41図　第10号溝土層断面図

5　第10号溝（第41図，図版第一二）

位置と形状等　調査区の東側に位置し，第7号墳の周溝を切って構築された平安後期の南北溝である。溝底面は北にいくに従って低い。上幅1.7m，深さ50cmを測り，断面形は直線的に立ちあがる逆台形を呈する。本溝は，規模と形状や立地位置から第5号溝に接続することが予想され，時期も矛盾しない。とすると，第5号溝と本溝によって微高地の北と東側を画す溝となる。

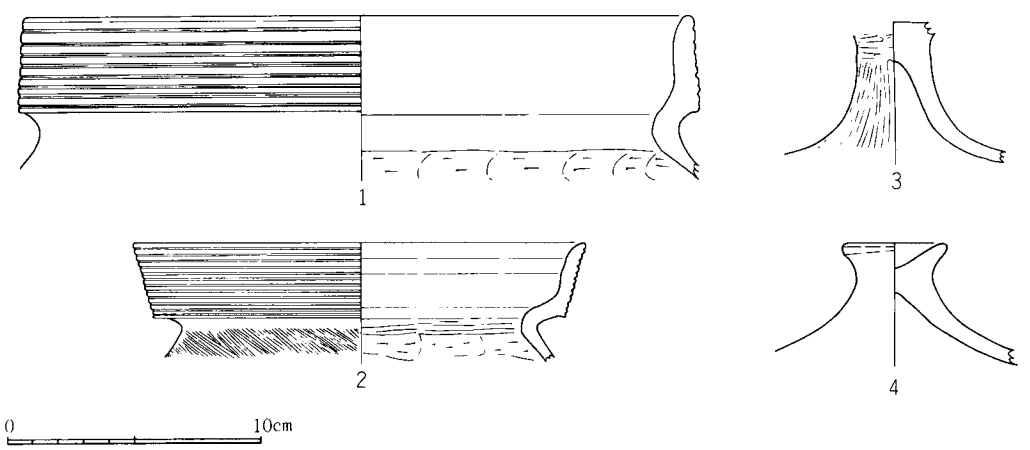
出土土器（第40図14～19，図版第一八）

土師器有台坏　14は断面三角形を呈する高台を付した内面黒色の坏である。体部は椀状を呈する。内面は丁寧にヘラ磨きされ，外面は横ナデである。15はやや矮小な高台を付したもので底径6.6 cmを測る。内外面の調整は摩耗のため不明である。

土師器無台坏　16は口径 9.5cm，器高 2.5cmを測る椀状を呈するもので，やや上げ底気味で丸味をもって立ち上がり，口縁端部は先細りしている。17は高台様の厚い底部を有するもので，底径 4.2cmを測る。18は底径6 cm，19は 5.8cmを測る。これらは，いずれも底部に糸切り痕をとどめ，胎土は精選されている。

第4節　包含層およびピット出土遺物

弥生土器　1・2は有段口縁の甕形土器である。1は復元口径26.2cmを測る大型品で，直立する口縁帯には8条の擬凹線がめぐっている。器肉は厚く重厚な感じを与える。法仏式の範疇に入るものと想われる。2は復元口径17.8cmを測り，口縁帯はやや外傾し，12条の擬凹線がめぐっている。4は蓋形土器である。体部が外反的に広がりつまみ部上面が凹むもので，蓋形土器にあっては中型品（口径8～13cm）の部類に属するものであろう。3はE－9区のピットから出土した高坏の脚部である。外反しつつ広がり脚裾に至るもので，外面はヘラ磨きされ，内面はナデである。



第42図　包含層およびピット出土遺物

註

（１）　本書第３章第４節参照。

（２）　高橋　裕　「北塚Ｂ遺跡」『二塚郷土史』二塚農業協同組合　1978年　石川。

（３）　橋本澄夫・西野秀和・平田天秋等による　『七尾市奥原縄文遺跡・奥原遺跡』（石川県立埋蔵文化財センター　1982年　石川。）や西野秀和・浜野伸雄・平田天秋等による『鹿島町徳前Ｃ遺跡（第４次）発掘調査報告書』（同センター　1983年　石川。）等による。

（４）　昭和57年度に実施された分布調査によって，地形が急激に低くなっていくことが確認されている。

（５）　南　久和　『おまる塚古墳測量調査報告書』　金沢市教育委員会　1978年　石川。

（６）　岸本雅敏　「装飾付須恵器と首長墓」『考古学研究』　第22巻第１号　考古学研究会　1975年　岡山。

（７）　橋本澄夫・谷内尾晋司・桜井憲弘　『温井古墳群発掘調査報告』　七尾市教育委員会　1978年　石川。

（８）　戸淵幹夫・栃木英道　『金沢市近岡遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1984年　石川。

（９）　楠　正勝・宮本哲郎　『金沢市南新保三枚田遺跡』　金沢市教育委員会　1984年　石川。

（10）　谷内尾晋司・山本直人・越坂一也・垣内光次郎・栃木英道　『金沢市北安江遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1985年　石川。

（11）　註（10）の文献によった。

（12）　四柳嘉章　「竹松遺跡出土の土器」　『土師式土器集成　本編Ⅰ』　東京堂出版　1971年　東京。

（13）　谷内尾晋司　「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』　石川考古学研究会　1983年　石川。

（14）　宮本哲郎・栃木英道他　『金沢市南新保Ｄ遺跡』　金沢市教育委員会　1981年　石川。

（15）　註（８）に同じ。

（16）　南　久和・森川洋子・栃木英道他　『金沢市二口六丁遺跡』　金沢市教育委員会　1983年　石川。

（17）　田辺昭三　『陶邑古窯址群Ⅰ』　平安学園考古学クラブ　1966年　京都。

（18）　西野秀和　『金沢市北塚Ｂ遺跡（第Ⅱ次調査）』　石川県立埋蔵文化財センター　1980年　石川。

（19）　平田天秋　「周辺の遺跡②　増泉遺跡」　『金沢市犀川鉄橋遺跡第１・２次発掘調査報告書』　石川県立埋蔵文化財センター　1982年　石川。

（20）　白鳥良一　「第Ⅵ章　遺物　２　土器類」　『多賀城跡　政庁跡　本文編』　宮城県教育委員会　宮城県多賀城跡調査研究所　1982年　宮城。

（21）　橋本澄夫　「国分高井山遺跡が提起する問題点とそれへの所感」　『国分高井山遺跡』　七尾市教育委員会　1984年　石川。

（22）　四柳嘉章・辻本　馨　『西川島・Ⅰ　穴水盆地における中世遺跡群の調査』　穴水町教育委員会1980年　石川。

(23)　田嶋明人　『加賀市田尻シンペイダン遺跡発掘調査報告書』　石川県教育委員会　1979年　石川。

(24)　横田賢次郎・森田　勉　「大宰府出土の輸入中国陶磁器について一型式分類と編年を中心として」　『研究論集』4　九州歴史資料館　1978年　福岡。

(25)　上野与一・小村　茂　『加賀古陶』　ニュー・サイエンス社　1984年　東京。

第３章　まとめ－古墳群を中心にして－

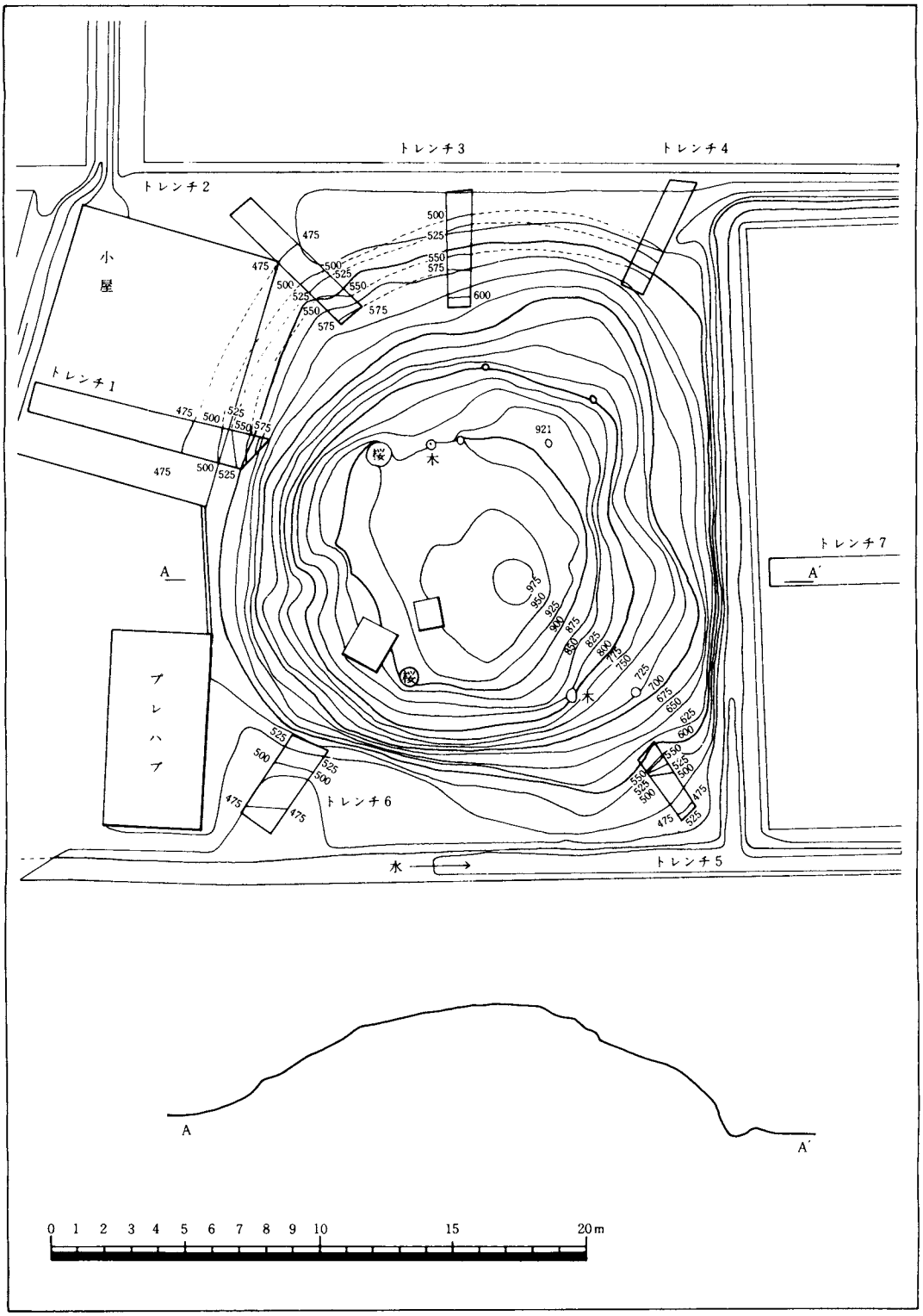
北塚地内に立地する古墳では，古くから，おまる塚古墳（第43図）が周知されており，南塚地内にある，びわ塚古墳とともに金沢近郊の平野に立地する古墳としては稀少な存在である。かつては金沢周辺の平野部に散在したであろう古墳も，後世の土地利用の変化によって墳丘を失なったものも少なくないと考えられ，これまで平野部に立地する古墳の実態についてはほとんど判らなかった。今回の本遺跡の調査では，周溝部のみではあるが５基の古墳が検出され，そうした不鮮明であった古墳の存在が確かめられたのであり，おまる塚古墳をはじめとする北塚古墳群の年代や群形態を理解する手掛りを得ることとなった。

１　古墳群の時期

検出された５基の古墳のうち，時期を知り得る土器を伴出したのは第７号墳のみであった。その他の古墳周溝には，月影期の包含層を切って構築しているために月影式土器の小片が多量に流れ込んでおり，当初は月影期の周溝墓と誤認してしまう程であった。周溝床面での月影期の土器供献などは全く認められず，かといってそれ以後の土器の混在や供献の痕跡も認められなかった。さいわいにも，第７号墳の周溝覆土下層より須恵器の一群が出土し，本古墳群の時期比定に大きな示唆を与えてくれた。出土した須恵器は，子壺と人物もしくは動物らしき形象物を付したと推定される装飾付台付壺をはじめ，口径がやや大型化して鋭さを欠いた稜を有する坏蓋や，長方形の三方一段透しに裾部付近に四角形の透しを組み合わせた高坏の脚部，また，一群の中にあってはやや古相を呈するもので口頸部に凸帯と波状文をめぐらせた甕形土器も出土している。これらの土器については，第２章第１節で先述したように，田辺昭三氏の須恵器編年の第Ⅱ期におけるＭＴ15併行からＴＫ10に近接する時期が考えられ，六世紀の第２四半期頃に比定されるものであろう。この六世紀前半代に比定できた第７号墳と西隣にある第６号墳とは，周溝の外縁相互が一部重複しているものの，第６号墳の構築にあたっては第７号墳や第２号墳の規制を受けて南北に長軸を有する楕円墳となっていることから，古墳相互に大きな時期差は認め難い。したがって，第７号墳出土の須恵器を指標とするかぎり，本古墳群は六世紀前半代には確実に造墓活動があり，群形成の始まりについては後述する本古墳群の群形態から類推して五世紀後半代にまで遡る可能性が考えられた。

２　古墳の特徴と群形態（第44図，第３表）

本遺跡では，昭和48年の専光寺野田線建設に先立つ調査でも円墳２基と方墳１基が検出されている。それらは，当時円（方）形周溝墓と理解されたのであるが，今回の調査結果とも総合的に考えて，今回の調査区に隣接する円形プランの２基については古墳として理解し，ここでは，それらを第１・２号墳と呼称することとした。なお，方形プランの周溝については，円墳群から西



第43図　おまる塚古墳測量図（『金沢市おまる塚古墳緊急調査報告』より転載）

北へ約200m離れた地点にあり，月影期の集落跡の外郭に立地することから，方形周溝墓の可能性が高いが一応ここでは第3号墳と呼称しておく。

さて，地点の異なる第3号墳を除き，これまでの調査を総合すると7基の円墳が確認されたことになる。それらのうち，推定規模が径25m前後を測りやや様相を異にする第7号墳以外には，ほぼ次の様な特徴が窺える。

1　墳形はすべて円形を呈し，周溝外縁で測る規模は径が10m前後の小規模墳である。

2　周溝形状は，断面形が逆台形もしくは直線的に立ちあがるU字状を呈するもので，上幅(最大幅で1m前後)に対して比較的深く（50cm前後）掘られている。

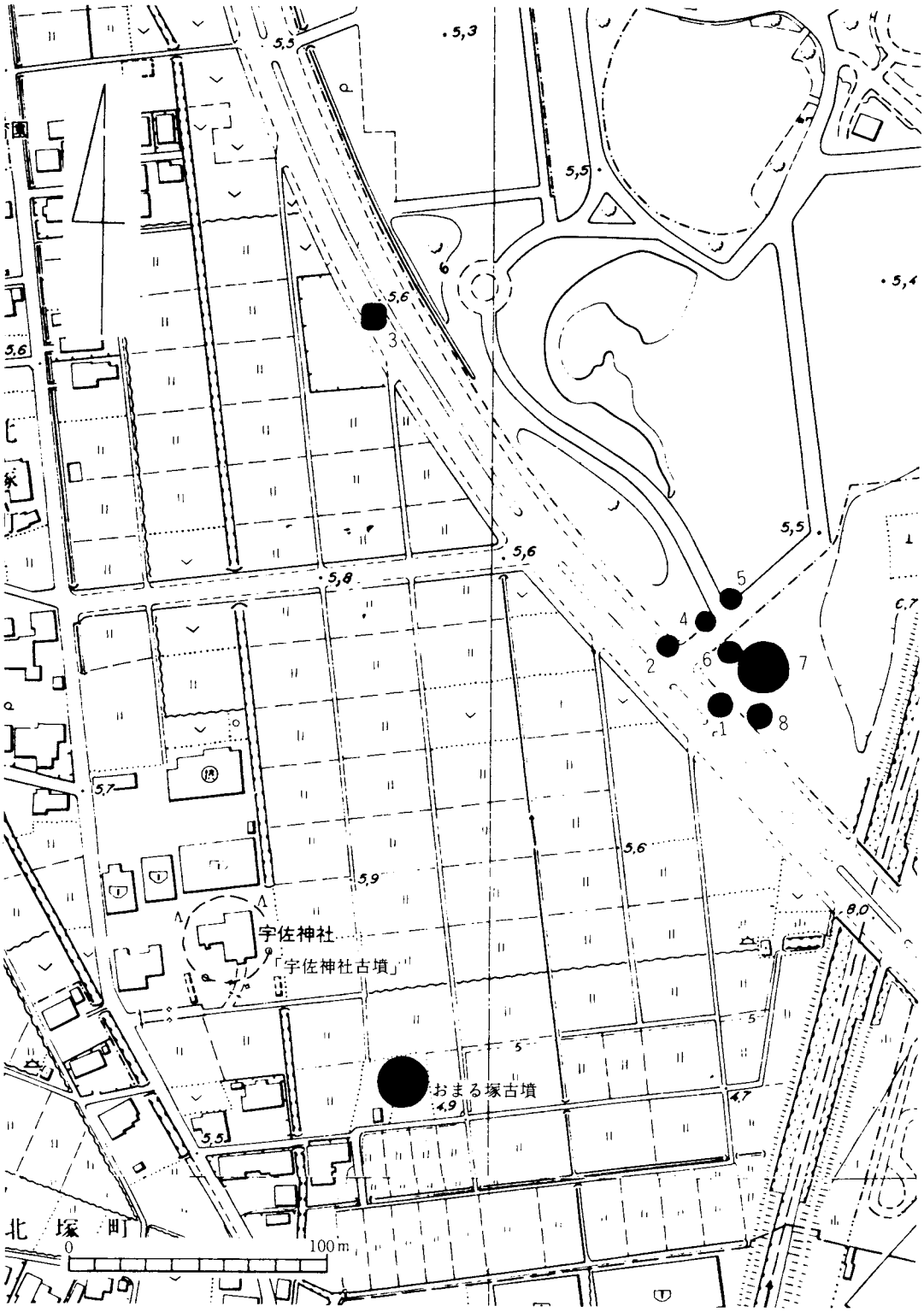
3　古墳相互が墳裾を接するように密集している。

4　月影期の包含層を切って構築している。

墳丘や内部主体が消失しているために，周溝部のみの特徴しか列記できないが，これらの特徴は，加賀市二子塚古墳群の東田支群[(1)]や辰口町下開発茶臼山古墳群[(2)]にみる周溝墓的な形態を示す小規模墳に極めて類似するものであり，初期群集墳の一形態をなすものと理解された。ところで東田支群のタイプは，江沼地域の広域首長墓として疑う余地のない狐山古墳の東南にあり，前方後円墳1基を含む28基以上の円墳からなる支群である。本遺跡の調査では，前方後円墳として確実視されるものは検出されていないが，第7号墳の存在に注視しておかねばならない。それは，10m前後の小規模墳を主体とする古墳群の中では，第7号墳だけが円墳として推定した場合の復元径が25m前後を測る中規模墳であり，周溝の形状も小規模墳とは大きく異なり，上端の最大幅が4.6mと広く緩やかな傾斜を示すU字状を呈するものであった。また，葬送儀礼に使用したとみられる装飾付台付壺の伴出も特異であり，第7号墳の被葬者が小規模墳の被葬者より優位な階層にあ

第3表　北塚古墳群墳形規模等一覧表

	周溝形状		周溝法量（m）			備考
	平面	断面	外径	上幅	深さ	
第1号墳	円形	逆台形～U字状	約12.0	0.8～1.0	0.5～0.7	昭和48年に調査。約½を検出。
第2号墳	円形	逆台形状	約11.5	0.9～1.5	0.25～0.55	昭和48年に調査。約⅔を検出。第1号墳の西北約20mに位置する。
第3号墳	方形	逆台形状	一辺約7.0 南北主軸 N—5°—W	0.5～1.0	0.4～0.7	昭和48年に調査。約½を検出。円墳群の西北約200mに孤立している。出土遺物はない。
第4号墳	円形	逆台形～U字状	約12.0	1.0～1.4	0.4～0.7	約⅗を検出。第2号墳の北東に接し，法量・形状ともに同墳に類似する。
第5号墳	円形	逆台形～U字状	7.2～7.6 (EW)(NS) 0.94：1	0.3～0.8	0.1～0.5	全掘。最も北側に位置する。
第6号墳	円形	逆台形状	9.8～10.5 (EW)(NS) 0.93：1	0.5～1.1	0.2～0.6	全掘。第7号墳の規制から東西に歪みがある。周溝外縁の一部が第7号墳と重複。
第7号墳	円形？	緩いU字状	24.0～26.0 (NS)(EW)	2.8～4.1	0.3～0.6	約⅗を検出。墳形は断定できない。周溝部より装飾付台付壺などの須恵器出土。
第8号墳	円形	逆台形～U字状	約10.0	0.7～0.9	0.4～0.6	約⅒を検出。



第44図　北塚古墳群分布図

ったことを物語っている。ところで，第7号墳の墳形についてはこれまで円墳と推定してきたが，全体の5分の2程度しか検出していないことや周溝の随所が平安後期の溝や土壙によって切られており，墳形を断定するにはやや危険である。東田支群の第10号墳のような全長22m クラスの小規模な前方後円墳となり得る可能性もなくはないのである。その懸念を増幅される一つの要因として，装飾付台付壺の出土がある。この種の装飾壺は，首長墓の葬送儀礼に関わる儀器として使われ，前方後円墳の造り出し・くびれ部，前庭部などの儀礼の場から出土することが多いものである。[3] 七尾市温井15号墳では，[4] 全長16.8m を測る小規模な前方後円墳のくびれ部から装飾付台付壺が出土しており，その証左となるものである。本墳の装飾付台付壺は，本来墳丘部にあって意識的に破砕されて細片化したものが周溝に流れ込んだ状況で出土しているが，こうした須恵器を意識的に破砕する墓上祭祀には，先の温井15号墳や七尾市高木森古墳（前方後円墳)出土の器台[5]にも認められるところであり，首長墓における固有の葬送儀礼ともみられるものである。この限りでは，第7号墳が前方後円墳であっても決して不自然ではないのである。ともかく，第7号墳が円墳か前方後円墳かはにわかに決定し難いことであり，いずれにしろ小規模墳よりは優れた内容を有している点こそ重視しなければならない。すなわち，多くの小規模墳とともに，それらの長クラスと推定される中規模墳が墳裾を接するように共存している点に大きな特徴があるといえる。

こうした東田支群タイプの群集墳について田嶋明人氏は，[6] 地域首長墓域から小規模墳が分割し，小型前方後円墳を長として小円墳被葬者を再編・組識化された結果として捉え，そのことが地域首長墓の専制的側面を強調することになったと論じられた。今回検出された中・小規模墳は，北塚古墳群のなかでも田嶋氏が指摘する首長墓のもとで分割・再編された人々を被葬したものと考えられる。それら中・小規模墳の被葬者の階層をより明確にするには，おまる塚古墳や前方後円墳としての指摘もある「宇佐神社古墳」[7]の存在を無視できない。特に，「宇佐神社古墳」が小嶋芳孝氏が指摘するように前方後円墳であるとすると，その規模から地域首長墓にふさわしいものといえる。とすると，北塚古墳群は地域首長墓域に東田支群タイプを従えた二子塚古墳群に類似し，「宇佐神社古墳」を頂点として，おまる塚古墳や第7号墳などの中規模墳のもとで小規模古墳が構成されるというピラミッド的墓制秩序が捉えられることになる。この限りでは，初期群集墳のなかでも地縁集団的な辰口町下開発茶臼山古墳群や加賀市黒瀬御坊山C群，七尾市温井A古墳群などとは様相を異にするものといえる。しかしながら，その図式はあくまで「宇佐神社古墳」が名実ともに古墳として実証されねばならないという課題を残しているのである。

註

（1）　田嶋明人・湯尻修平・梶　幸夫　「江沼古墳群分布調査報告」『石川考古学研究会々誌』第21号　石川考古学研究会　1978年　石川。

（2）　西野秀和　『辰口町下開発茶臼山古墳群』　辰口町教育委員会　1982年　石川。

（3）　岸本雅敏　「装飾付須恵器と首長墓」『考古学研究』　第22巻第1号　考古学研究会　1975年　岡山。

（4）　橋本澄夫・谷内尾晋司・桜井憲弘　『温井古墳群発掘調査報告』　七尾市教育委員会　1978年　石川。

（5）　大塚初重　『能登　高木森古墳』　七尾市文化財保護委員会　1960年　石川。

（6）　註（1）に同じ。

（7）　小嶋芳孝氏は「北加賀地域古墳群分布調査報告」（『石川考古学研究会々誌』第22号　石川考古学研究会　1979年　石川。）の中で宇佐神社の立地する低い独立丘を前方後円墳と考えておられる。

第2編　北　塚　A　遺　跡

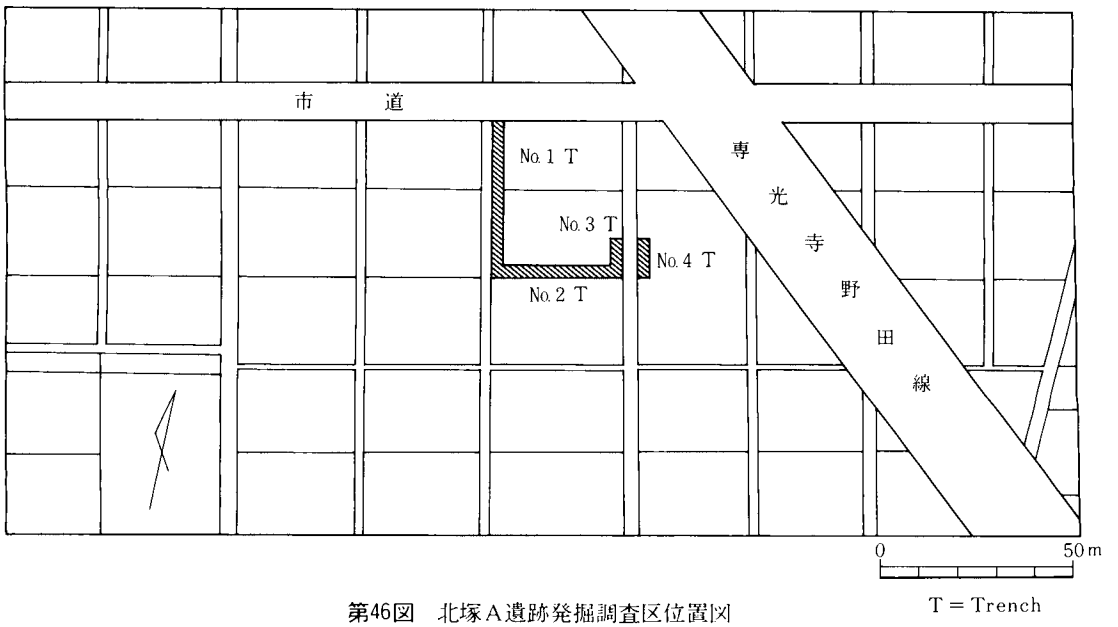
第１章　調査の概要

北塚Ａ遺跡は，金沢市の西郊外北塚町（金沢平野北部）に所在する。本遺跡の調査は，西部緑地公園北塚駐車場整備事業（駐車場の土留擁壁工事）に係るものであり，昭和59年５月24日から同年６月14日まで行った。発掘調査区は標高約４.５ｍの水田地帯に立地する西部緑地公園北塚駐車場予定地である。調査面積は約130㎡である。

盛土および耕土は，バックホーにより除去作業を行った。その結果包含層は，圃場整備等によって大半が削平されていることが判明した。駐車場の土留擁壁工事という性格から，幅約1.5ｍ，長さ約90ｍのトレンチ調査を行った。

調査区の設定は，市道と直交するトレンチを第１トレンチとし，市道と平行し第１トレンチに直交するトレンチを第２トレンチとした。さらに用水をはさんで西側を第３トレンチ，東側を第４トレンチとした。また第１トレンチと市道との接点に基準点を設置し，これよりＡ・Ｂ・Ｃ区と区画した。

基本的層序についてであるが，調査区の総延長が約90ｍにもおよぶことから，堆積する土層の層序にも随所に変換が認められる。調査区の基本的層序は１層（耕土），２層（黄灰色粘質土：地山ブロック），３層（暗灰褐色粘質土：床土），４層（茶褐色粘質土：遺物包含層）に分けられる。



第46図　北塚Ａ遺跡発掘調査区位置図

第２章　遺構と遺物

第１節　概　要

調査により検出された遺構は，溝状遺構19条，土壙２基，ピット７基である。溝状遺構（以下溝と呼称する）のほとんどがトレンチに直交する形に走っているため，遺跡の全体像を捉えることはできなかった。

遺物は，縄文土器，弥生土器，土師器，中世陶器等が検出されている。これらのことから本遺跡は縄文時代（中期中葉）から中・近世にかけての複合遺跡であると推定される。

第２節　遺構・遺物

１　溝状遺構（第47図，図版第二〇～二二）

第１号溝

第１トレンチ（Ａ区）で検出した西―東に主軸をもつ溝である。西端は調査区外に及んでおり未確認である。検出部における測定数値は長さ1.26m，幅4.08m，深さ22cm，覆土は暗茶褐色土の単一層である。溝内から縄文土器片，土師器片が出土している。

第２号溝

第１トレンチ（Ｂ区）で検出した，西―東に主軸をもつ溝である。両端は調査区外に及んでおり，未確認である。検出部における測定数値は長さ1.34m，幅3.3m，深さ20cm，覆土は暗褐色粘質土の単一層である。溝内から縄文土器片，土師器片が出土している。

第３号溝

第１トレンチ（Ｃ区）で検出した，南西―北東に主軸をもつ溝である。両端は調査区外に及んでおり，未確認である。検出部における測定数値は長さ1.8m，幅50cm，深さ24cm，覆土は濁茶褐色土の単一層である。溝内からは土師器片が出土している。

第４号溝

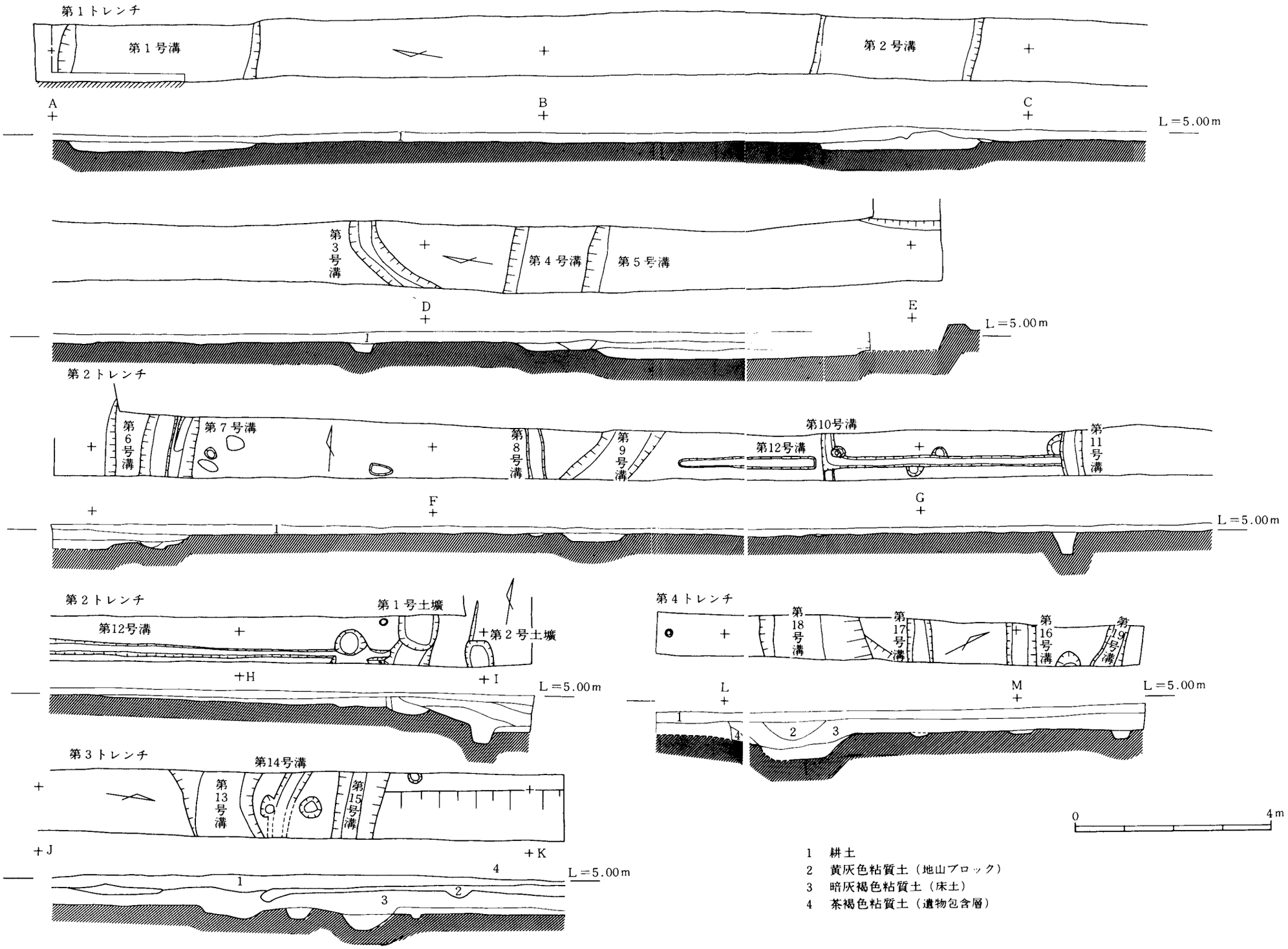
第１トレンチ（Ｄ区）で検出した，西―東に主軸をもつ溝である。両端は調査区外に及んでおり，未確認である。検出部における測定数値は長さ1.5m，幅1.9m，深さ18cmである。覆土は灰褐色粘質土と黒褐色粘質土が混入している。出土遺物はない。

第５号溝

第１トレンチ（Ｄ区）で検出した西―東に主軸をもつ溝である。両端は調査区外に及んでおり，未確認である。さらに北側の肩が検出されなかった。検出部の測定数値は長さ１.５ｍ，深さ18cm，幅は不明である。覆土は暗茶褐色土，濁暗茶褐色土の二層にわかれる。出土遺物は下記のとおりである。

出土遺物

凹石（第48図10，図版第二二）


第1トレンチ
第1号溝
第2号溝
A
B
C
L＝5.00m
第3号溝
第4号溝
第5号溝
D
E
L＝5.00m
第2トレンチ
第6号溝
第7号溝
第8号溝
第9号溝
第10号溝
第12号溝
第11号溝
F
G
L＝5.00m
第2トレンチ
第12号溝
第1号土壙
第2号土壙
H
I
L＝5.00m
第4トレンチ
第18号溝
第17号溝
第16号溝
第19号溝
L
M
L＝5.00m
第3トレンチ
第14号溝
第13号溝
第15号溝
J
K
L＝5.00m
0
4m
1 耕土
2 黄灰色粘質土（地山ブロック）
3 暗灰褐色粘質土（床土）
4 茶褐色粘質土（遺物包含層）

第47図　遺構配置図

４面に凹部がみられ，敲打痕がある。重さ585ｇ，長さ10.7cm，幅6.7cm，厚さ４cmである。石質は粗粒砂岩と思われる。

土師器（第48図17・18，図版第二三）

18は椀形土器の底部の破片である。高台径６cm，高台高0.4cmを測り，色調は橙褐色土である。胎土は全体に精選されており，焼成は良好である。調整は摩耗のため不明瞭である。

17は椀形土器の底部（高台部）の破片である。高台径10.5cm，高台高0.5cmを測り，色調は淡赤褐色土である。胎土は全体に精選されており，焼成は良好である。調整は摩耗のため不明瞭である。

珠洲焼（第48図19，図版第二三）

色調は赤茶褐色。底径は17.5cmである。胎土は１mm程の粗粒砂多量混入。焼成は不良である。調整は外面タタキ，内面はナデ，底面は摩耗のため不明瞭である。

第６号溝

第２トレンチ（Ｅ区）で検出した，南―北に主軸をもつ溝である。両端は調査区外に延びており，未確認である。検出部における測定数値は，長さ1.32m，幅60cm，深さ14cmである。覆土は暗茶褐色土の単一層である。第７号溝を切っている。出土遺物はない。

第７号溝

第２トレンチ（Ｅ区）で検出した，南―北に主軸をもつ溝である。両端は調査区外に及んでおり，未確認である。検出部における測定数値は長さ1.32cm，幅40cm，深さ10cmである。覆土は暗茶褐色土の単一層である。出土遺物はない。

第８号溝

第２トレンチ（Ｆ区）で検出した，南―北に主軸をもつ溝である。両端は調査区外に及んでおり，未確認である。検出部における測定数値は長さ1.1m，幅26～34cm，深さ４cmである。覆土は暗茶褐色土の単一層である。土師器片が出土している。

第９号溝

第２トレンチ（Ｆ区）で検出した，南西―北東に主軸をもつ溝である。両端は調査区外に及んでおり，未確認である。検出部における測定数値は長さ1.2ｍ，幅１ｍ，深さ18cmである。覆土は暗茶褐色土の単一層である。出土遺物は下記のとおりである。

出土遺物

縄文土器（第48図３～６・８・９，図版二三）

３は過巻状文に貝殻腹縁文が若干渇じっている。色調は淡褐色。胎土１～1.5mmの粗粒砂少量混入。焼成は不良である。

４は浅鉢の口縁部と推定され，沈線の下に貝殻腹縁文が施されている。色調は明黄褐色。胎土は約0.5mm内外の砂粒を少し含む。焼成は不良である。

５は深鉢の胴部（底部近くか）と推定される。色調は明茶褐色。胎土は１mm大の砂粒を少し含む。焼成は不良。半截竹管文が施文され，一部に櫛状具刺突文（貝殻腹縁文の一種）がある。

６は撚糸文をもつ土器で，色調は淡褐色。胎土は１～1.5㎜の粗粒砂少量混入。焼成は良好。

８には沈線５本が施されており，葉脈状文の支脈か，綾杉文の一部とも推定できる。色調は黒褐色。胎土１㎜内外の砂粒を多く含む。焼成は不良である。

９は磨消縄文（充填縄文）が施文された土器である。色調は褐色。胎土は１～1.5㎜の砂粒少量混入。焼成は良好である。

弥生土器（第48図13・15・16，図版第二三）

16は甕の口縁部である。色調は淡橙褐色。胎土は１～1.5㎜の砂粒少量混入，焼成は並である。有段口縁で，口径17.4cm，頸部径14.6cm，残存高14.6cmを測る。口縁部の調整は内面共に横方向のナデ。体部は外面が刷毛調整のあとナデ，内面は右から左へのケズリである。また口縁部外面で煤の付着が認められる。

13も甕の口縁部である。色調は橙褐色。胎土は1.5～2mmの微礫が微量混入。焼成は良好である。調整は摩耗のため不明瞭である。

15は甕の底部である。色調は淡橙褐色。胎土は1.5～2mmの微礫少量混入。焼成は良好である。調整は外面がハケ。内面は下から上に向かってのケズリ。底面はケズリのあとナデ。焼成は良好である。

第10号溝

第２トレンチ（Ｆ区）で検出した，南―北に主軸をもつ溝である。両端は調査区外に及んでおり，未確認である。検出部における測定数値は長さ1.04m，幅20～26cm，深さ２cmである。覆土は暗茶褐色粘質土の単一層である。溝内からは縄文土器片，土師器片が出土している。また，この溝は第12号溝によって切られている。

第11号溝

第２トレンチ（Ｇ区）で検出した，南―北に主軸をもつ溝である。両端は調査区外に及んでおり未確認である。検出部における測定数値は長さ１m，幅52cm，深さ48cmである。覆土は暗茶褐色粘質土の単一層である。溝内からは縄文土器片，土師器片が出土している。この溝は第12号溝によって切られている。

第12号溝

第２トレンチ（Ｆ区～Ｇ区）で検出した，東―西に主軸をもつ溝である。検出部における測定数値は長さ17.9m，幅20～36cm，深さ20cmである。覆土は灰褐色粘質土の単一層である。溝内からは，縄文土器片，土師器片，染付片等が出土している。

出土遺物

縄文土器（第48図７，図版第二三）

７は覆土内より出土した葉脈状文（綾杉文）をもつ土器である。色調は淡褐色。胎土は１～２㎜大の砂粒を多く含む。

第13号溝

第３トレンチ（Ｉ区）で検出した，東―西に主軸をもつ溝である。両端は調査区外に及んでおり

未確認である。覆土は暗灰褐色粘質土の単一層である。溝内からは，縄文土器片，弥生土器片，土師器片，石製品等が出土している。

出土遺物

摩製石斧（第48図12，図版第二二）

重さ20.5ｇ，長さ2.2cm，幅3.2cm，厚さ1.5cm。石質は不明である。

石鏃（第48図11，図版第二二）

最大長2.3cm，最大幅1.6cm，最大厚３mmである。重さ1.1ｇである。石質はフリントである。

第14号溝

第３トレンチ（Ｉ区）で検出した，東一西に主軸をもつ溝である。両端は調査区外に及んでおり

第48図　出土遺物実測図

未確認である。検出部における測定数値は長さ1.5m，幅1.2m，深さ34cmである。溝内覆土層は灰褐色粘質土の単一層である。溝内からは縄文土器片，土師器片が出土している。

第15号溝

第３トレンチ（Ｉ区）で検出した，東一西に主軸をもつ溝である。両端は調査区外に及んでおり未確認である。検出部における測定数値は長さ1.5m，幅1.2m，深さ34cmである。覆土は灰褐色粘質土の単一層である。溝内からは，縄文土器片，中世陶器片等が出土している。

第16号溝

第４トレンチ（Ｋ区）で検出した，東南一北西に主軸をもつ溝である。両端は調査区外に及んでおり，未確認である。検出部における測定数値は長さ94cm，幅58cm，深さ８cmである。覆土は灰褐色粘質土の単一層である。溝内からは，縄文土器片，陶器片等が出土している。

第17号溝

第４トレンチ（Ｋ区）で検出した，東南一北西に主軸をもつ溝である。両端は調査区外に及んでおり，未確認である。検出部における測定数値は長さ92cm，幅44～50cm，深さ８cmである。覆土は灰褐色粘質土の単一層である。溝内からは，土師器片が出土している。

第18号溝

第４トレンチ（Ｋ区）で検出した，東一西に主軸をもつ溝である。両端は調査区外に及んでおり未確認である。検出部における測定数値は長さ１m，幅2.1～2.3m，深さ30cmである。覆土は灰褐色粘質土の単一層である。溝内からは，縄文土器片，土師器片，陶器片，磁器片が出土している。

第19号溝

第４トレンチ（Ｋ区）で検出した，東南一北西に主軸をもつ溝である。両端は調査区外に及んでおり，未確認である。検出部における測定数値は長さ96cm，幅40～60cm，深さ20cmである。覆土は灰褐色粘質土の単一層である。溝内からの出土遺物はない。

２　土　壙（第47図）

第１号土壙

第２トレンチ（Ｈ区）で検出した楕円形と推定される土壙である。北端は調査区外に及んでおり，未確認である。検出部における測定数値は直径80cm，深さ16cmである。覆土は暗茶褐色土の単一層である。土壙内からは，縄文土器片，土師器片が出土している。

第２号土壙

第２トレンチ（Ｉ区）で検出した楕円形と推定される土壙である。南端は調査区外に及んでおり，未確認である。検出部における測定数値は直径60cm，短径54cm，深さ30cmである。覆土は暗茶褐色土の単一層である。土壙内からは，縄文土器片，土師器片が出土している。

3　包含層出土遺物（第48図１・12・14，図版第二三）

縄文土器　２は渦巻状文に縄文地描出文が若干混じっている。色調は茶褐色。胎土は１㎜位の砂粒を多く含む。焼成はやや不良である。

１は半月状の刺突文が隆帯の両側に施されている。波状口縁をもつ土器の口縁部と推定される。色調は灰褐色。胎土は１～２㎜大の砂粒を含む。焼成はやや不良。

須恵器　14は須恵器脚部であるが，全形は不明である。色調は暗灰色土。胎土は微粒砂微量混入，焼成は良好である。調整は内外面共にナデである。

第３章　まとめ —今後の課題—

北塚Ａ遺跡は白山山系に源を発する手取川，犀川，十人川が形成した沖積平野に位置し，河川による段丘状地形の上に立地する縄文時代中期中葉から中，近世にかけての複合遺跡であると推定される。

発掘調査は，西部緑地公園整備にかかる駐車場の土留擁壁工事という性格から，幅約1.5ｍで長さ約90ｍのトレンチ調査の形をとったため，検出された遺構は断片的となり，遺跡の全体的な性格は不明瞭である。また，包含層は近代において圃場整備等により大半が削平されているため，出土した遺物は少量にとどまり整理箱１ケースにすぎない。

検出された主な遺構は溝19条，土壙２基，ピット７基である。ここでは現段階における問題点を掲げ，今後の課題としておきたい。

縄文時代

本遺跡は，縄文時代中期後葉「北塚式土器」の標式遺跡となっており，今回の調査箇所は遺跡の中心部よりやや東にはずれ，遺構遺物とも分布は稀薄であった。

本遺跡周辺の縄文遺跡としては，南東約１kmの地点に縄文中期中葉の標式遺跡となっている古府遺跡がある。南方約２kmには，縄文時代晩期初頭「八日市新保式土器」の標式遺跡となっている新保本町チカモリ遺跡，さらに南方約２kmには，縄文時代晩期初頭「御経塚式土器」の標式遺跡となっている御経塚(Ａ)遺跡がある。

本遺跡出土の縄文土器は，半截竹管文に櫛状具刺突文をもつ土器（中期中葉後半），貝殻腹縁文をもつ土器（中期後葉前半），渦巻状文に縄文地描出文が混じる土器（中期後葉前半），渦巻状文に貝殻腹縁文が混じる土器（中期後葉後半），波状口縁をもつ土器，葉脈状文をもつ土器（中期後葉後半～後期前葉前半），撚糸文をもつ土器（中期後葉後半～後期前葉前半），磨消縄文（充填縄文）が施文された土器（後期前葉前半）などが明らかになっている。

これらのことから，縄文時代においては，中期中葉後半～後期前葉前半まで営まれていることが推定される。

弥生時代・古墳時代

本遺跡東方200ｍには弥生時代後期（法仏期）から中世にかけて断続的に営まれた複合遺跡である北塚Ｂ遺跡，南方200ｍには最大径24ｍを測る北塚町おまる塚古墳（円墳），さらに南方500ｍには規模は不明ながら南塚町びわ塚古墳（円墳）が所在する。また十人川をはさんで東側には，古墳時代時期から平安時代中期にかけての古府クルビ遺跡，古墳時代時期の土壙墓群と碧玉製石釧，管玉，同末製品を出土した高畠遺跡がある。本遺跡の第９号溝出土の甕形土器は弥生時代後期(法仏期)の所産である。

また，本遺跡で検出された第３号溝は，その形状が，近接する北塚Ｂ遺跡で検出されている古墳の周溝と類似することから，古墳の周溝であると推定することも可能である。

平安時代・中世

本遺跡周辺の平安時代および中世の遺跡としては，北方2.5kmに普正寺遺跡（鎌倉時代～室町時代中期），南東1.5kmには黒田町遺跡（平安時代），さらに南方3kmの地点には御経塚B遺跡（平安時代）がある。

本遺跡出土の平安時代の遺物は第5号溝から出土した椀形土器の底部2点（10世紀代の所産か）である。また，中世の遺物としては，5号溝から出土した甕形土器の底部（14世紀末の所産か）がある。

今回の調査は，調査面積約130㎡で，かつトレンチ調査という形であったため，各時期に渡る遺跡の全体像を捉えることはできなかった。前述した，各時代における史的背景と本遺跡がいかなる関わりをもって営まれたのか，なんらかの問題を提起するものである。今後の調査，研究に期待したい。

参　考　文　献　（五十音順）

高堀勝喜・金沢市中学校社会科研究会　「金沢市北塚住居址遺蹟の調査」　『石川考古学研究会々誌』第4号　石川考古学研究会　1952年　石川。

西野秀和　『莇生遺跡』　辰口町教育委員会　1978年　石川。

西野秀和　『金沢市北塚B遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1980年　石川。

沼田啓太郎　「金沢市北塚遺跡第2次調査報告」　『石川考古学研究会々誌』第12号　石川考古学研究会　1966年　石川。

橋本澄夫・中島俊一・高橋　裕　『金沢市北塚C遺跡』　石川県教育委員会　1974年　石川。

平田天秋・木越隆三　『尾口村尾添遺跡発掘調査報告』　石川県教育委員会　1977年　石川。

二塚郷土史編集委員会　『二塚郷土史』　二塚農業協同組合　1978年　石川。

福島正実・西野秀和・浜野伸雄・藤　則雄　『鹿島町徳前C遺跡調査報告』　石川県立埋蔵文化財センター　1983年　石川。

KITAZUKA SITES

(ENGLISH SUMMARY)

1 9 8 5

Archaeological Research Center of Ishikawa Prefecture

KITAZUKA SITES

The *Kitazuka* sites are located in *Kitazuka machi*, *Kanazawa city*, *Ishikawa* prefecture. The *Sai* River and the *Fushimi* River and other smaller streams, which run on the skirt of the *Tedori* alluvial fan, form an alluvial plain. These sites are situated on it.

Excavations of these sites were done taking the opportunity of the construction of the *Seibu* Green Park. Our two years' investigation covered 1,130 m² of the area.

As the result of the investigation, venerable monuments and rilics made in *Jomon* Period, *Yayoi* Period, *Kohun* Period, *Heian* Period, and in the Medieval Period (of Japan) were discovered.

The *Kitazuka* A site is famous for the excavated pottery typical in the latest stage of the Middle *Jomon* times. The investigation this time was done along the eastern border of this site.

In the investigation of the *Kitazuka* B site, five ancient tombs are worthy of notice. Three more tombs were newly excavated in the sixth investigation. Including the *Omaruzuka* tomb, the *Biwazuka* tomb, and the *Usa* Shinto Shrine tomb around, there are fifteen tombs totally. All these ancient tombs are called "the *Kitazuka* Ancient Tombs" 北塚古墳群. It is presumed that these tombs had its beginning in about the end of the fifth century, and until the latter half of the sixth century this area had been the hereditary graveyard of the headmen governing the basin of the *Sai* River.

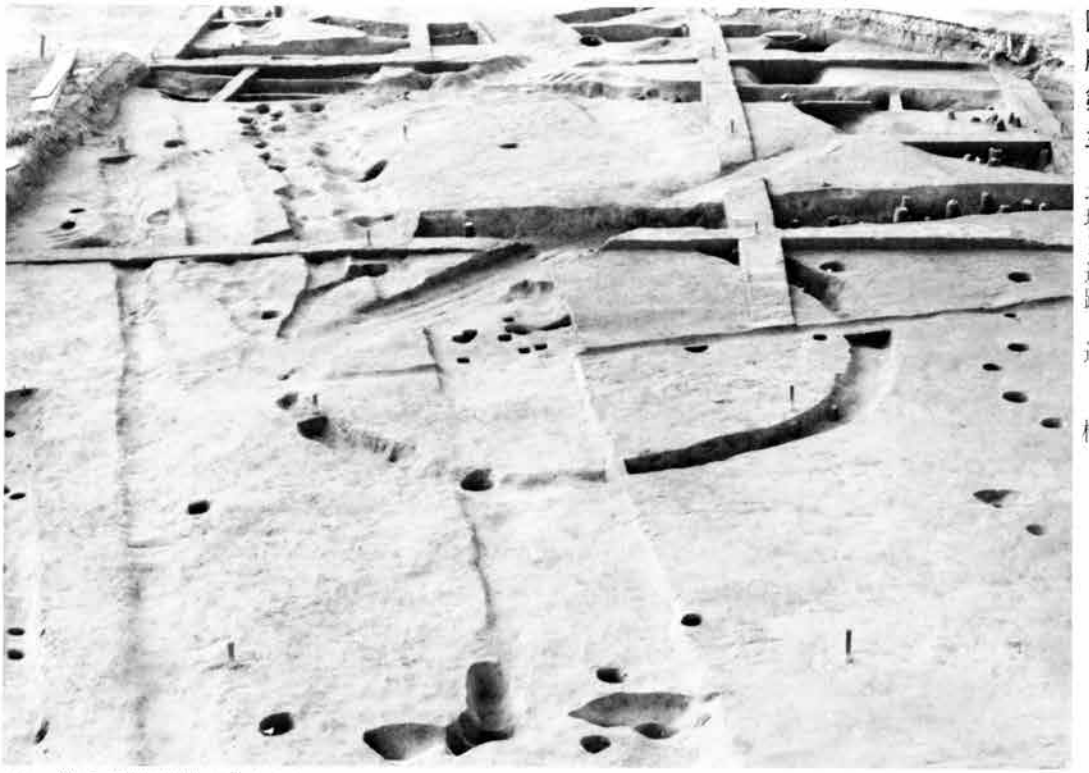
Translation by Seichi Kakita and Mizue Dōi

図　　版

北塚遺跡群(○印)と周辺地域　　昭和46年6月24日撮影

図版第二　北塚B遺跡　空中写真

昭和58年11月22日撮影

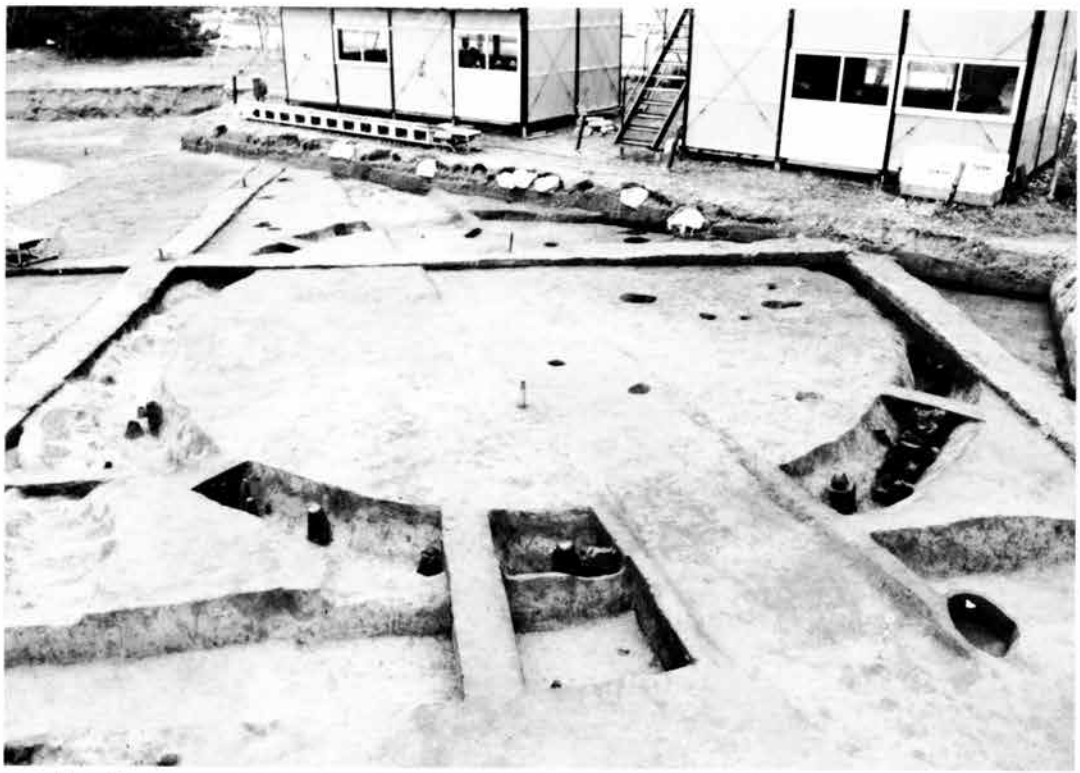


(1)　第5号墳遠景（北から）

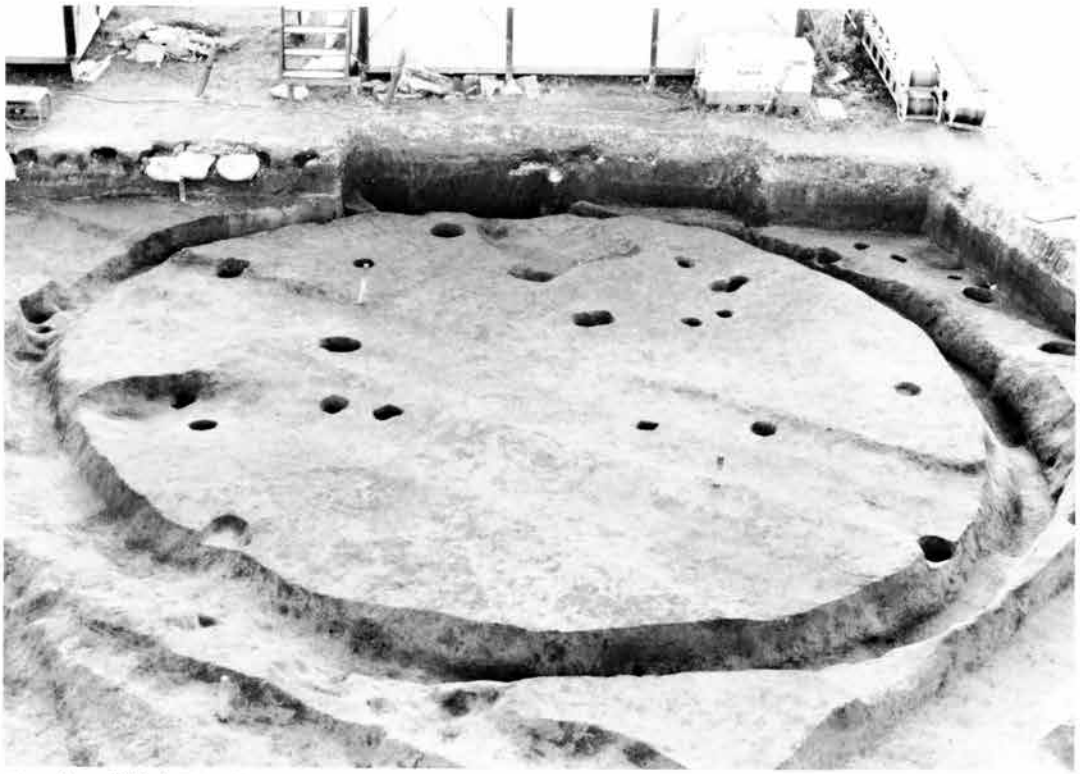
(2)　第5号墳近景（東から）

(1)　第4号墳近景（東から）

(2)　第4号墳周溝（北側）



(1)　第6号墳近景（北から）



(2)　第6号墳完掘状態（東から）

(1)　第6号墳遠景（北から）

(2)　第6号墳西側周溝（南から）

(3)　第6号墳と第7号墳の切り合い（北から）

(1)　第７号墳近景（北から）

(2)　第７号墳北側周溝（西から）

(1)　第7号墳周溝西側土器出土状況（西から）

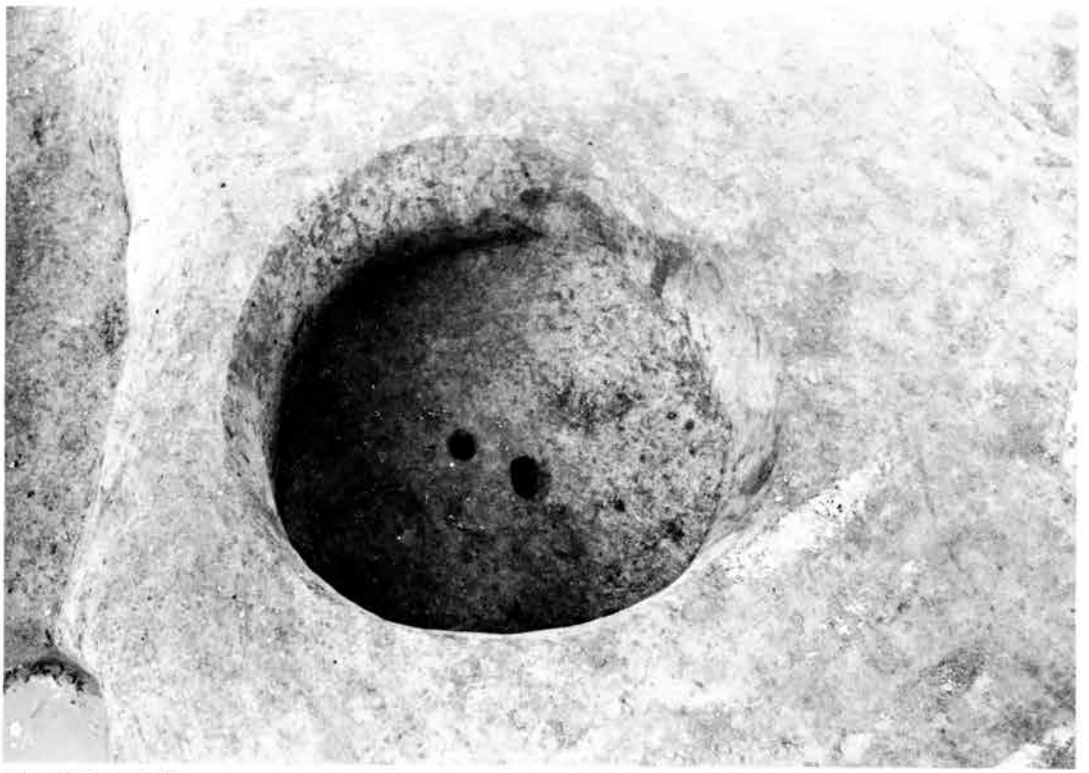
(2)　第7号墳須恵器装飾付台付壺出土状況（北から）

(1)　第2号土壙

(2)　第4号土壙

図版第一〇　北塚B遺跡　遺構

(1)　第5号土壙



(2)　第11号土壙

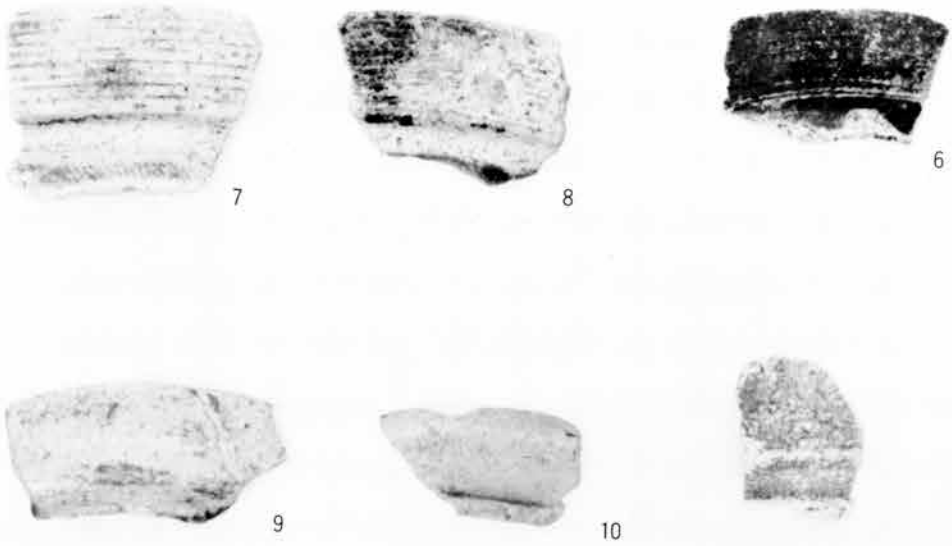
(1)　南北に走る近世・近代溝（北から）

(2)　第５号溝（西から）

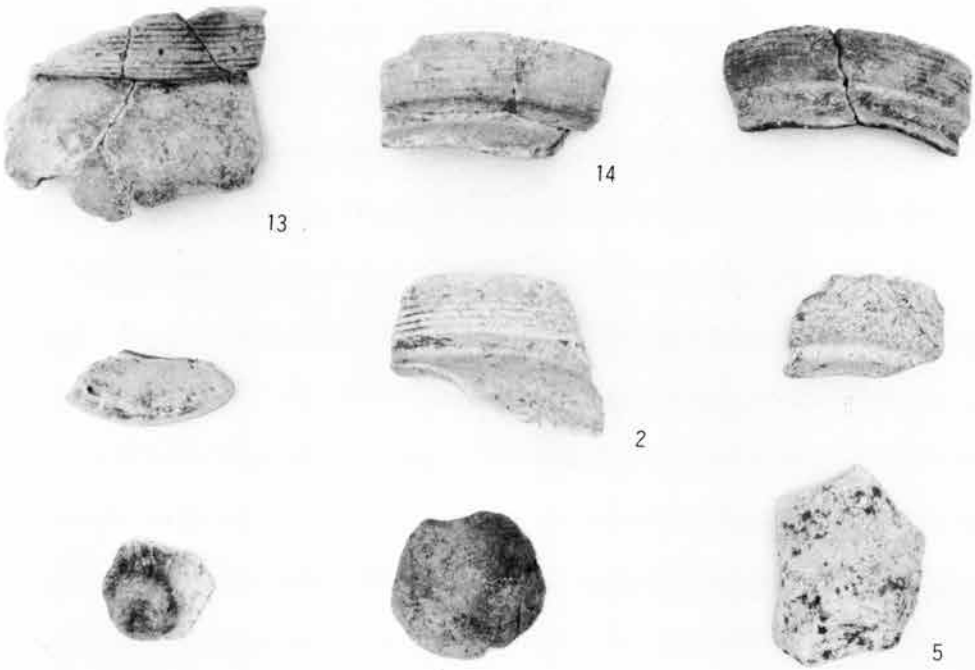
(3)　第７号溝（東から）

(1)　第10号溝（中央の直進する溝・北から）

(2)　第10号溝土層断面（北から）



(1)　第５号墳周溝出土土器



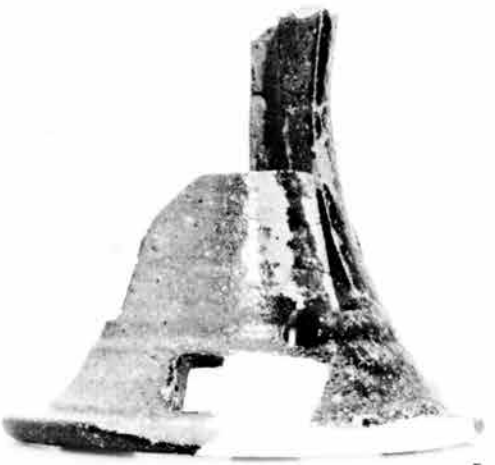
(2)　第４号・第６号墳周溝出土土器（上段が第６号墳）

22-1

2

23-1

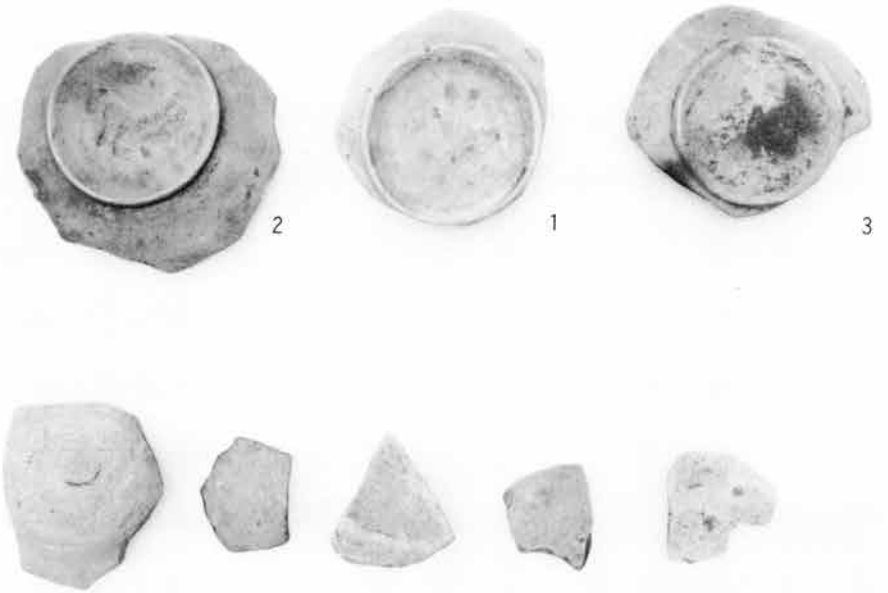
22-1



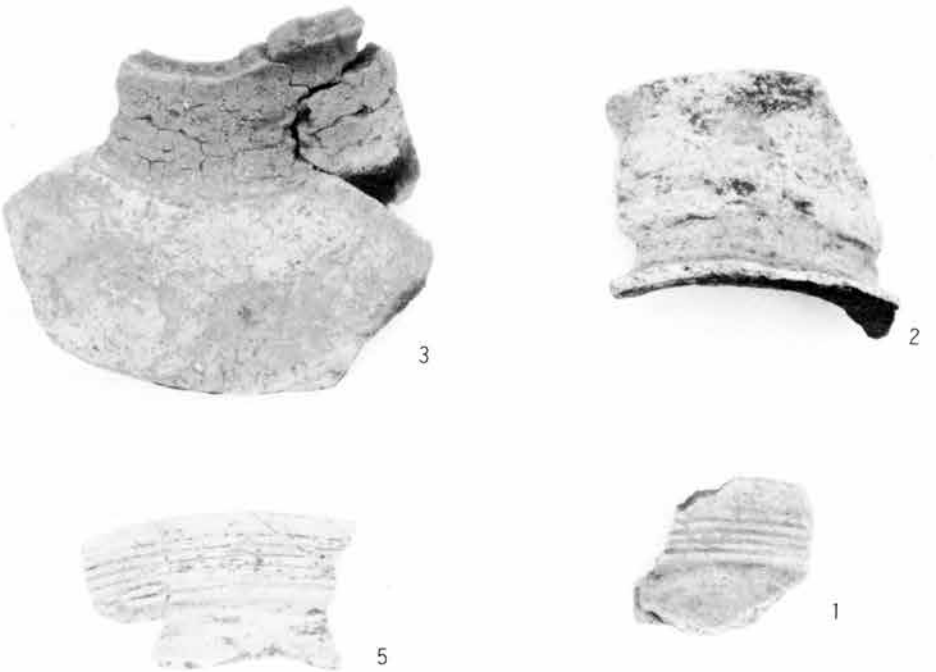
5

第 7 号墳出土須恵器

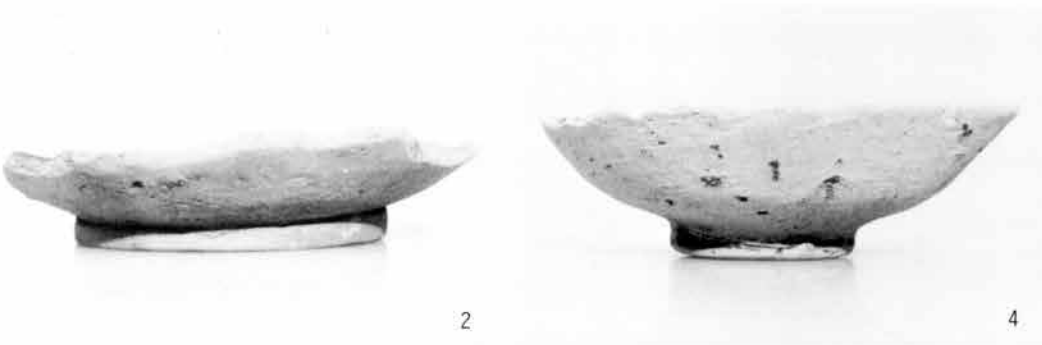
装飾付台付壺上部	蓋
同　上　脚台	甕
	高　杯



(1)　第２号土壙出土土師器

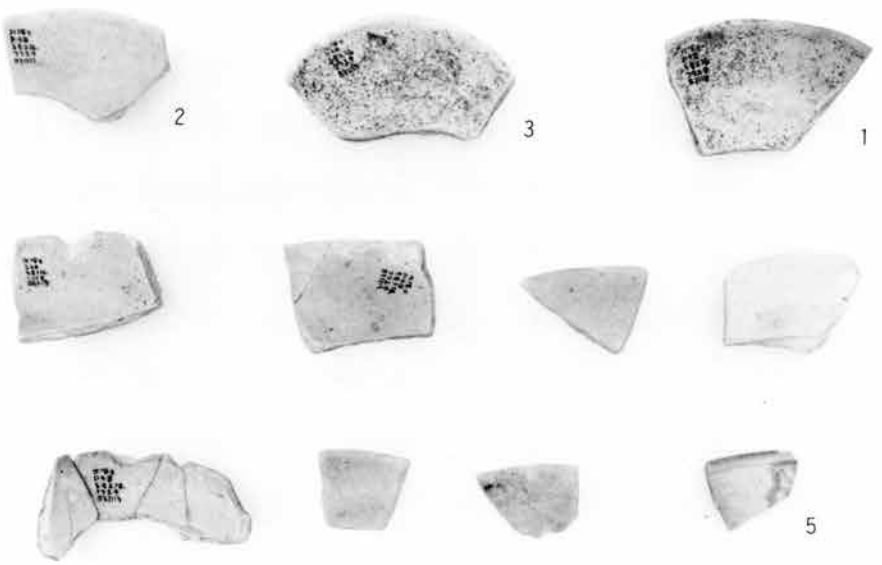


(2)　第３号土壙出土弥生土器



(1)　第２号土壙出土土師器坏

(2)　第５号土壙出土土師質土器小皿



(3)　第５号土壙出土土師質土器・青磁（下段右）

(1)　第５号溝出土土師器

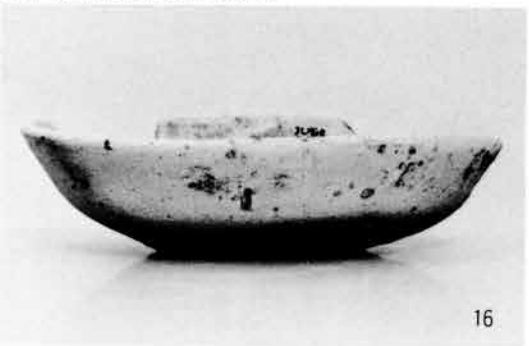
(2)　第５号溝出土土師器・白磁（下段右）

第7号溝出土土師質土器小皿

第7号溝出土加賀古陶擂鉢

第7号溝出土加賀古陶擂鉢

第8号溝出土土師器埦



第10号溝出土土師器埦

第6号墳周溝出土弥生土器高杯

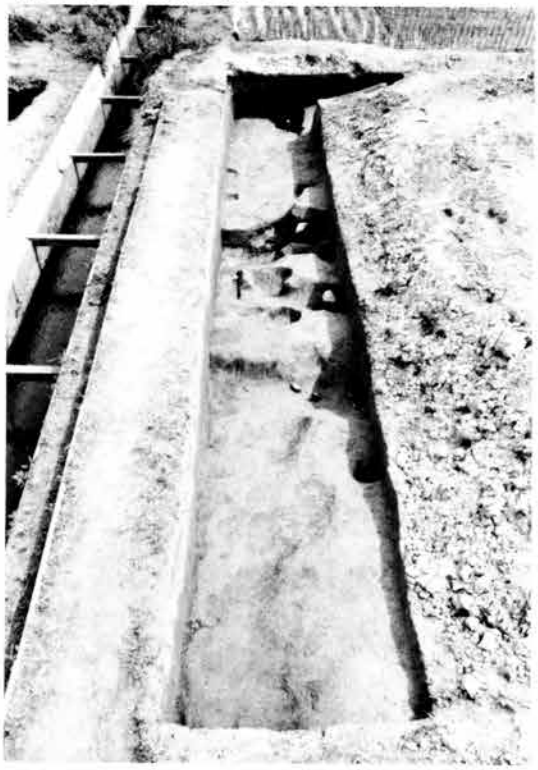
第7号墳周溝出土弥生土器器台

包含層出土の底部穿孔弥生土器

溝・古墳・包含層出土遺物

第1トレンチ全景（北から）

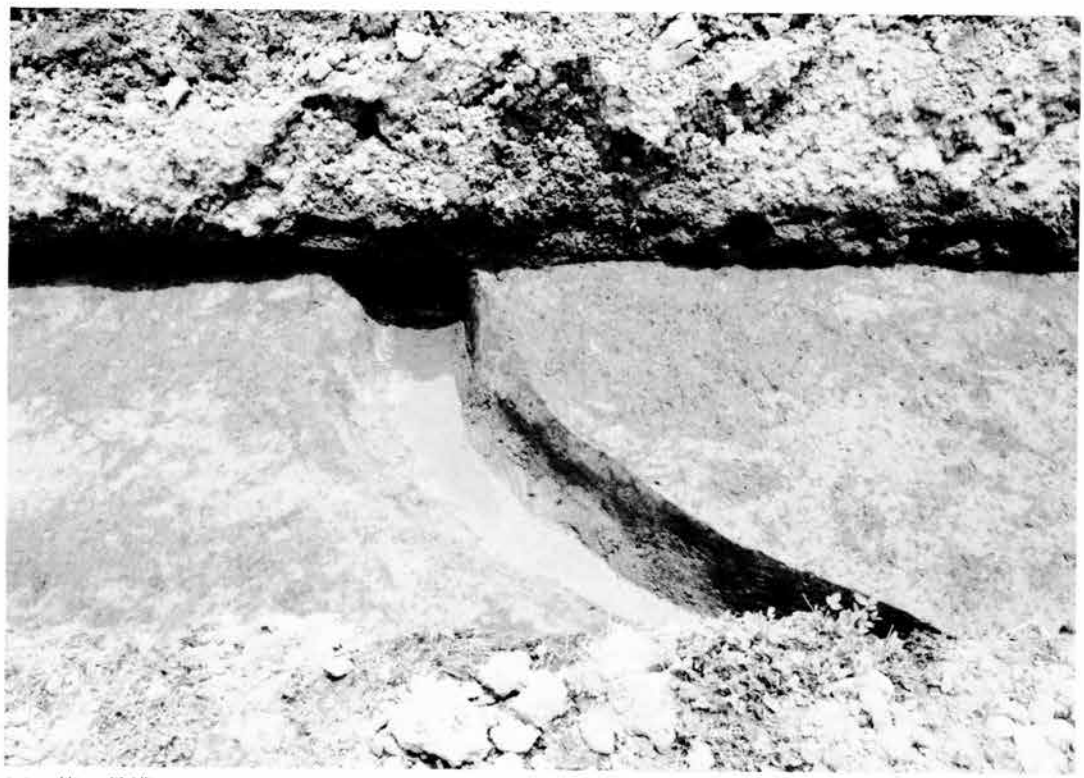
第2トレンチ全景（西から）



第3トレンチ全景（南から）

第4トレンチ全景（北から）

(1)　第2号溝



(2)　第3号溝

(1)　第4号・第5号溝

(2)　第6号・第7号溝

(1)　第16号・第17号溝

10

11

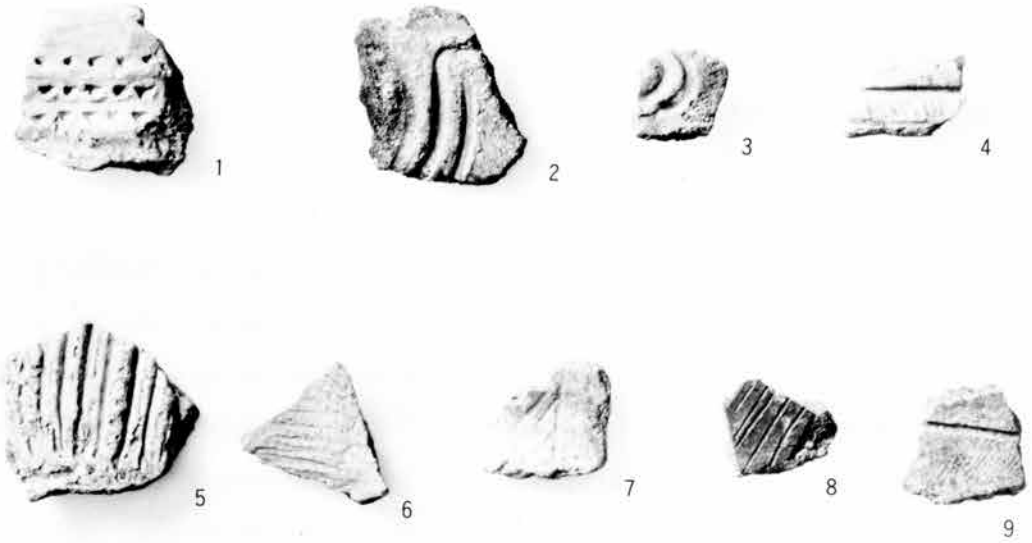
12

凹石

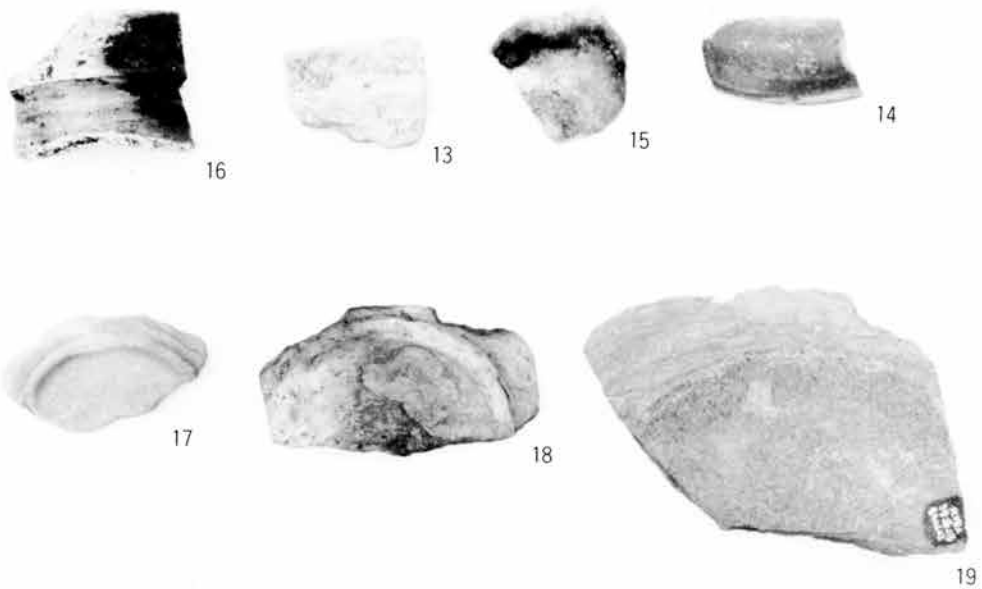
石鏃

磨製石斧

(2)　石器



(1)　縄文土器



(2)　弥生土器・土師器・須恵器・珠洲焼

(1)　おまる塚古墳（北西から）

(2)　おまる塚古墳（南東から）

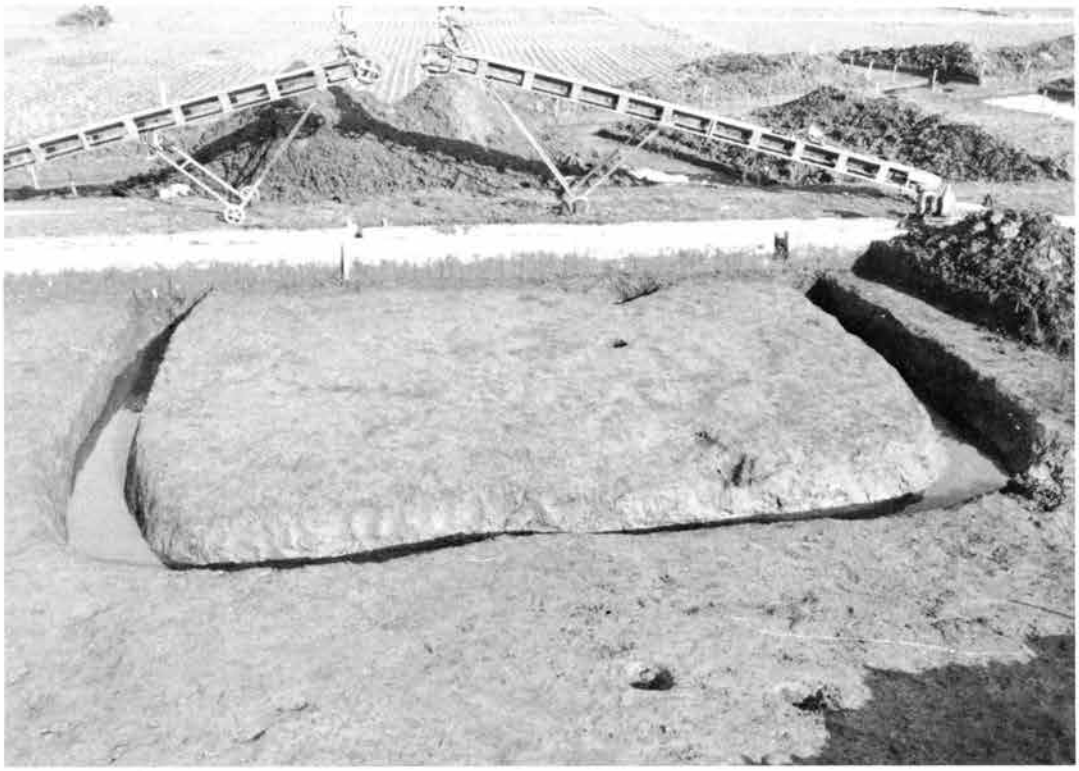
(1)　宇佐神社古墳（南東から）

(2)　びわ塚古墳（南から）

図版第二六　北塚B遺跡　第一次調査

(1)　第1号墳（北西から）

(2)　第2号墳（北西から）



(1)　第３号墳（西から）

(1)　第１号溝（北西から）

北　塚　遺　跡　群

昭和60年3月20日　印刷
昭和60年3月31日　発行

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地
〒921　電話（0762）43—7692番（代）

印　　刷　社会福祉法人石川サニーメイト
石川県石川郡野々市町末松2丁目239番地

© 石川県立埋蔵文化財センター　1985
本文用紙：書籍用紙イエロー（中性紙）

KITAZUKA SITES

1985

Archaeological Research Center of Ishikawa Prefecture